

ら、其の八百屋で家を聞いて、お目が留まりましたか、へ、へ、と何か言はれたさうで、丁と詮索は行届いて居る——出掛けろ、構ふ事はない、とつか／＼此の別世界のやうな、袋田へ侵入に及びました。

崖に山百合だの、野藤だのが咲いて居ました、そんなものは構はん。

今度の事ぢや、お話の中心點にでもしなけりやならないやうな、あの庚申塚ですな。其さへ有つたんだか無かつたんだか、點で氣にも留めないで、のそ／＼其處等をのさばり散らして。

唯暑い時だつただけに、奥の方から流れて出る、先刻私が惱みましたね、あの小流が、今のやうに水が枯れては居なくつて、露草の暗い中を、さら／＼流れて、處々白くなつて、蒼い花の上を越して、澄切つて走るのが、可い心持だつたんです。

裾と裾を、山の下を挟み抜けるやうに、すん／＼奥へ、塹壕だ、塹壕だ、天、彼の美人をして堅壘ならしむるぞ、なぞと憚からず冴えながら、空のかつと開いた大な洞穴へ入るやうな此の袋田を、頓て麓で包んだ底へ着いたと思ふ處で、右を見ると、四角いやうな百姓家があつて、大な柳の樹が一本、鬱然茂つて、藁屋の棟を包むやうにして居たのが、何だか奥床しくつて、美しくつて、然も一寸意氣つてんですか、私たちにや其の、粹な、當世なやうに見えました。

誰の目にも心持は同一だと見えて、其の後聞くと、可哀相な事があります。お民は、元來身體

が弱い、力業は出来ないから、暮しは何うでも、居職か、勤人——百姓家は逆も遣り切れぬ、と實家でも云つたのに、媒始人が、百姓だつて、土穿りを爲るぢやない、田畠は作男に任せ切。

内ぢや別荘の出入をして、旦那方と膝組みで暮すと言ふ——お民も縁談のある家は、どんな様子だらう、と實家の妹を連れて、密と、遠くから今の吉松の家を覗くと、其の柳が蕭々と、優しく涼しく茂つてるのを見て、あ、是なら、と安心をしたつて言ひます。

毛桃や、柿、李の植つて居るのより、其の柳の方が、何だか妙に、住んでる者も心意氣が美しく見えます——……

槻の大木は庄屋の門、柳の古樹は里のお茶屋の軒に枝垂れる、と何となく思はれますもの。

如何にも、小作に百姓さして、大分小綺麗に住んでるやうに思はれて、それで縁付く氣になつたんですつて。

淺薄な……と云ふ私達が矢張、其の柳を見た時は、床しい氣がしたんです。尤も其の柳の樹を目印しにして來たので、豫て此が其の美人の家だと思つて、其がために懐かしかつたかも知れませんが。

其の、月明に瀧を見るやうな、涼しい緑の靡いた中に、白鷺でも留まつた風に、先刻もお話しの、上の崖の、あの女神像が、霞もかゝらず——ちら／＼見えます。

居るぞ、と一人低聲で云ふ。私は門口から覗きました、藁屋の下は薄暗いので能く分らん、とうまい事を考へた——

(御免よ、裏の、あの雪見たいな人形を見させてくれ)つて。たかが邸に草摺りに来る對手だ、遠慮はしません。傍若無人に、土竈を築いた土間を、三人で、向うの背戸へ突抜けたんです——其の柳のある許へ。」

十九

「お聞きの通り、貴下、其の亂暴さ加減ですから、外に誰が居たか、そんな事は些とも氣に留まつちや居りません。」

(何うぞお掛けなさいまして、ひどい處でございませう)と言つて、背戸の縁へ、堅にして、埃を拂いて、持つて来て、莫塵を敷いてくれたのは其の美人。

(さあ、掛けたまへ、構やしない)と連出した奴が、案内者だけに心得た顔で世話をする。

腰を掛けて、可いな、實に美麗なもんだなんて、其の柳を見透かして、崖の女神の像を高慢に仰ぎながら巫山戯たんですが、氣が着くと向うの爐端で、薄汚い婆さんが、茶碗を仰向けて並べたから、(歸らう)と私が一番に飛出した。

昔あつたと言ふ、毛見の悪役人か、検査係と言ふ横暴な風で、どや／＼と三人、土間の竈の前を又通つて、舊の門口へ出る、とでした。

跣足で、其で襪で、慫う、

と、カウスをぐいとかけつ、

「此處等まで——こんなんぢや不可い、」

と獨言のやうに半ばを言つて、手首を握つて、

「細いが、肉の可い、すきりとした腕を出して、何か筵に干したものを取込んで居る處でした。

(おや、お歸りでございますか)と、姉さんかぶりの手拭を外して、ちやんと挨拶をしましたつ

け。  
はつ、と言つて一人、あわをくつた體でお辭儀をした。此の男なんざ、餘り美しいので、思はず敬意を表したんだ、と言ひます……途中での話ですが。

五歩ばかりで、何となく振返ると、其時、いま取つた藍染の手拭を口に啣へて、俯向いて、ぐい、と脰を揚げて、被ぐやうに襟脚を撫でて居る。藁屋越に柳が纏れて、夕暮の風が戦ぐ、水の音も聞えました。實際美しかつたんですね。

處を、古風な、一人、突然、ドシンと私の背中を撲つた。婦が見たらうと思ふから、極が悪く

つて駈出しましたよ。

美人だ！が、あの、繕はず、飾らず、見得もなし、跣足もあゝなると形而上の風情がある。靴を穿いた女神の像と言ふのは少い。處で、何となく憂を帯びて、些と陰氣な、其も品に成りはするが、物寂しい所は少い。其で、貞操……、……孝行、一村の賞者な奴が、盆踊の時、代官に惚れられるか、鷹狩の殿様に見染められて、權威と、壓制で、奪取られて、一悲劇が出来ようと言ふ人相だ。人相が然うだよ。さあ、其時に及んで、家のために身を殺すか、其ともお部屋となつて夫を殺すか。何方にしろ生命がけの婦人だ、あの様子が、と案内した奴の、花を飾るのを聞きながら、私は妙に愉快でした。而して得意になつて、身内を煽られるやうな心持がしたんです。何だか、自分華族であるのが嬉しかった、と言ふものは——其の美人に對して、鷹狩の殿様とは行かないでも、何うやら、代官ぐらゐるな事は出来さうに思はれたからです。同時に、殿様や代官と言へば、惚れた婦なら、婿だらうが何だらうが、敢て引奪くつて差支へない、と思つた。

と言ひかけて、猶豫ひながら、

「……思ひました。不埒な！昔、領主や代官が他の美人を奪ふとする、と仁者とも賢君とも言はれない。悪逆とは言ふ、無道とは言ふ。けれども、私通とも何とも言はん。婦、娘、妾を奪つた

とこそは言へ、野合だなんぞと言ひはしない。構はず、奪はう。筵旗で押寄せたつて、たかが袋田の村一つ、金の力で踏潰すに暇が要るか！己が家は伯爵だ、と高を括つた。」

二十

「悪逆無道、そんな事は書にある字だ。又聖人や君子なんて時世後れな者に成りたくも何とも無い。構はず引奪る——引奪つて、萬一、一揆のために代官滅亡と成つた處で、昔暴君が國家を失つたも同一事、假に是を天下に傳ふる歴史家があるとすれば、殺生關白美人を奪ふ、と遣る歟。少くとも、新聞の三面記事に、愚劣な標題を掲げられるやうなんぢやない、遣つた了へ！」

と慪うだつたんです。が、そんな横着な了簡で居る癖に、人間と云ふものは、考へて見ると、根が是でも何處か正直かも知れません。別のことぢやないんです。——其の後二三度、今度からは私一人で、のそく彼家の前へ行つたんですが、妙に氣が咎める、ばかりぢやなく、何の爲に胡亂つくんか、我ながら極が悪くつて操つたいが、正直と云ふのは此處なんです。

吉松の裏山には、其の女神像、愛神があります。繪工が、寫さして貰ひたい、彫刻師が見せて欲しいと言つた處で、對手が對手、色鉛筆でも嘗めて居れば其で事が濟んだでせうのに、此の御覽の通り殺風景で、美しいと言や顔の妍い婦ばかり、繪葉書も人形も念頭に無いのですから、

仔細のない、其の口實も發見せませんでした。

しかし、うまいものが見つかりました。煤だらけの軒前でも、成丈日當を選つて掛けて置く、鳥籠の、其も古び切つた、鼠の穴を一ヶ處、燐寸の穀箱のひしやげたので塞いだんですが、頬白鳥が一羽。

知里里、古呂呂呂、知里古呂と、佳い諸鈴で囀つて居ますから、

(おい、頬白鳥を見せておくれ)と、是をだしに使ひましたよ。

(頬白鳥を見に来たぜ)つて又出掛ける。……

(若様はお好きですか。)

と口を利くやうになりました。

此の(若様)と、言はれたんで、又ぐつと豪くなつた。最う自棄に悪代官なんぞを標榜しやしません。づつと其の鷹狩の殿様になりましたよ。

(水をおくれ)なぞと、對手を小間使どころに扱ふ。が、貴下、可厭な顔もせんのでせう、——  
而して、

(水は不可せんですから、お湯を)と言ふ、其が實は嬉しくつて、

と未だ風に押附けられた、掠のとれぬ咳をして、手巾で口を拭いたが、伏目に、

「其の頬白鳥が種になつて話も出來て、別に手持不沙汰な事もなかつたんです。聞きます處、こりや去年寒明に、此の近邊十何年にもない雪が降つて、八寸ばかり積つた時、吉松の弟と云ふのが、廐の裏の竹藪の前の雪を掻いて、ばら／＼米を撒いた、もちほごを刺して、夜の明けない内から廐へ入つて、羽目を覗きながら狙つて居て、餌に餓ゑて來る小鳥を、小雀、山雀、鶉、可哀相に藪鶯さへ一羽交つて、十五六羽、頬白鳥ばかりも三羽取つた、其の一羽を、拜むやうにして頼んで、お民が籠に養つたんださうです。勿論息はあつたが、もちを外す時に無理をされたか、片羽痛めて居て、飛び得なかつたからだ、と言ひます。

二年越飼つてあるから能く馴れて居る、と言つて、黍を白齒にくゝんで出すと、籠の目から嘴で、赤い唇をつゝいて取る。——カチリと言つた。

と端ない、舌を見られたらうと思つたのでせう、興に乗つて遣つたらしかつたが、はつと顔を赧くして、

と言ひ漚つて、苦笑した。

鳥白頬  
「私は、そんな勇氣は無かつたんです。尤も彼方此方人が居ました。大方婆々どもなんぞでせう、そんな者は、壁の雨染、障子の破目同然で、眼中になかつたけれども、何うして父が存生だつたんですから、家が自分のぢやない。投出さうたつて然うは行かんかつたんですが、……父は、何

です、其の夏の季に亡くなりました——  
お話の続きですが、頬白鳥が、知里里里、古呂呂ッて鳴きましたよ。」

二十一

「一日……」  
世嗣の君は更めて言った。

「今日こそは、と又此の袋田へ入つて来ました。午少し過ぎで、時間の見計らひ、別に注意をしたでもなくつて、二人の妹どもが、未だ小學校から歸らないと言ふことが、なんとなく胸にあつた。」

この、お宅の前を、半町ほど街道へ寄つた畑に、婆々が一人、何だか青菜を間引いて居たのが、熟は見ませんでした、何うやら吉松の阿母のやうで、其ぢやあ、と思つたが、吉松は何處にも見えません。尤も、其處等に彼方此方、唯今天から降つて来た、と云ふ風で、三人、二人、畑打をして居ましたつけ。畝々山の裾を傳はつて、蔭へ入つたり、日向へ出たり、狭い處ぢや構はず粟を干した筈の上を踏んで通る、と最う其節ぢや用水の小流が、白々に成つて、水が底を摺つて、枯草の中を、かさ／＼云ふやうに、裂けた銀紙のやうに見えました。

其の音が、身體へ響いて、骨を削るやうで、ブツと、あの廐の裏の藪を潜つて、お民の背戸の柳の下を流れて来るんだ、と思ふと、キリ／＼と、扱帯か何かで、胸を締めつけられる思ひ……  
妙に、草臥れたやうで、其の癖、氣が焦つて、恚うふらくするから、曲り角の、あの庚申塚の巖の上へ、ぐつたりと凭つて休んだんですね——今日の此の風が、彼處へ固つて吹着けると同一に、其日は又別して屏風のやうな岩の窪に、赫と日が當つて居つたんです。

三ツ四ツ、直ぐ傍に、依ぐらるな稻束が眞白に轉がつてる。些と横向きになると、直ぐ目の前に崖を上る絲のやうな路があります——あれから頂を高く越すと、西洋人の持山だとか言ふ、例の女神像の突立つた、吉松の裏へは鴨越になるんですつて——こんな路は、世を忍ぶ日蔭者が夢にとぼ／＼と通ふんだ。己は、そんなぢやない、華族だ、と靴をトン／＼とやつて、抱いた杖を振つた。

其の杖の輪に亂れて、一面の赤蜻蛉が、光ります、と言ひたさうにヒラ／＼遣るのが、山を越して、愛神の矢が、羽を切つて来たやうで、莞爾すると、面白いのは、一疋帽子へ来て留まつて、眉毛の前へ、羽を閃めかすぢやありませんか。

(御免なせえまし。)

(へい、眞平。)

と二人で前を通つた百姓が、どちらも肥料桶を擔いで居ます。其の頬被をしな、頭髪が伸びて、耳へ被つた少い方が吉松でした。」

「成程。」

と思はず云つて、何爲か深く考へたのである。

「お話を伺へば、そりや屹と庚申塚へ挨拶をしたものでせうが、——何しろ、氣が昂ぶつてゐるんだから、悪代官また此處で大得意で、應、と頷で答へたばかり。への字形に半分起きて、傲然として見送りました。小作人が敬禮をして通つた氣、領主が其の支配地へ臨んだ勢だから驚くでせう。」

と寂い顔する。

「折曲つて、ひよつくら行く。あの大根畑は、唐辛子が縁を取つて、此方の水岸には、曼珠沙華が血のやうに燃えて居たに、最う執方も無い。其のかはり、向うの山の裾に黄色だつた粟畑が、眞白な蕎麥畑になつて根が赤らんだ。然うだ、東京へも五六度行つたり來たり、久瀧、と思ふと、急に堪らなくなつて、すつくり立つて、杖を支きましたが、歩行出さう、として見返ると、今度は、良遠くなつて、日影を行く吉松の後影——

あ、しかし、肥料桶を振つて、臀で調子を取りながら、太腰を搔込んで、しやんと成つて、

發奮んで出る——あの、呼吸、うまいよ、彼處だけは己も合はん。

と嘲つて唾を吐いた。何うです、代官根性を發揮したもんですね。」

二十二

「小流に添つて歩きましたが、村の者を侮辱した、今の舉動を憤つたか、其とも、里がめつきりと寒くなる前兆か、用水の堰の、淀んで一段落ちる處が、ぶつ／＼泡立つて、眞白に綿を累ねて居る。」

無意味に杖を突刺すと、他愛なく白泡が包まつて、ふよ／＼絡つて上る處を、抜いて日にかざすと、びし／＼消える……杖の尖は、早や前途に、粗い鉛筆畫のやうな柳の枝へ届いたんです。

可懐い——否々、可懐いは人柄過ぎる——美しい顔を見よう。

奥深い處ですから、山が垣根で、別に木戸を附けた圍ひもない、突如縁先。雷の處へ入りましたが、寂として居る——破障子の裡は例に因つて、薄暗い。厚ぼつたい藁屋の軒の、斜に切れた小口はづれに、仰向いて空を見ると、頃日の空模様で、裏山のナダレから颯と日が蔭つて來ましたつけ。

コトコト／＼、飼秣桶を靜に横木に振當てる音がする——其の廐の前へ出向いて行つて、

(馬鹿)とね、あの、ボンと言ひさうな張切つた鼻頭へ浴びせましたが、悪い氣で言つたんぢやない、我儘者のお世辭でした。ですから獨で莞爾しました。あの、廂から仰向いて空を視めた工合と言ひ、鼻の下の伸びた、と言ふのは、こんな時の形容でせうか。」

聞く者は無言で聞く。

「御覽なさい、人を人とも思はない上調子で、知里里里、古呂呂、古呂呂、と直ぐ耳許で聞えたんです。」

(居るかい)

と大きな聲して、其の籠の掛つた、納戸の縁の方へ歩行きながら、

(又頬白鳥を見に来たよ)と言つて、籠の下へ突立つと、鳥はびつたり啼止んで、直ぐにかたかた、留木を踏む、物靜な障子の中で、しとくと、何だか柔かな物を摺らす音がする。

片端の障子の隅を細目に、嬢嬢と婦が立つたんです。透切れの二個處ある、黒緋子の襟の掛つた寝衣、藍とお納戸の立縞が古ぼけたから霞が懸つて、色が朧の袷一枚。寝て居たんで端折を占めないから、裾が落ちて、朽葉色の片袂が、ちらりと小さな足を這つて、するくと翻つて敷居に引いた。其を引上げようとする、拇指が上へ反つて、膚の綺麗な胸が開いて、襟の膨りした兩の乳房、痛みはしまいかと思ふ、兩方障子の棧と柱とで、しつくりと劃つた姿で、今巻掛けた帯

の先を、後ろ手に抱へ上げた、肩を柔に力を張つて、顔は俯向いて居ましたが、櫛巻だつた……；髪は、耳に濃く懸つたばかりで、結んだ處は、障子の紙にも透かないで、半身で立つた。

其の爪先が冷たさうに、裾を内端に搔込んで、片手で、襟を引合せながら、  
(頬白鳥は少し病氣をして居ますんですよ)

心細さうに……でも笑ひましたよ。柔順な眉から瞼へ染んで、薄色にほんのりして、目が平時より、もつと涼しく見えたのは、獨で泣いて居た處と見える。

寝ても起きてても、此婦のほか考へなかつた時ですから、直接に本人に聞いたんぢやなしに、誰からとも知らず、家の様子の辛い事、農家の習慣とは言ふものの、堪へない労働をさせられる事を、丁と聞いて知つて居ましたものね。

(こんな中に居るからだ。だから病氣になるんだ。)

と言つて、杖で籠を突いたが、揺りはしなかつた。

(お前、可哀相だな。)

と小鳥と兩方を熟と見た時、ばらばらと木の葉が散つて、私の背、障子、お民の帯に懸りました。疎然と冷くなる、と雨が白く、晃然と銀の絲を捌いて、曇と日が當る。落葉の数が、青いの、赤いの、半ば黄色なものも、ちらちらして、其處に立つた婦の姿が、輝くやうに美しい、と思ふ間

に、忽ち眞暗になつて、ざつと云ふ雨の音。廊で眞白な呼吸を吹きました。」

二十三

世嗣の君の物語に、此の時聊か間隙があつた。聞く者は唯、潤紅、淺緑、星の閃めくが如き木の葉の、雨を縫つて日の面に飛交ふ奥に、美人が、古障子に白々と手を掛けて、纏れ髪して立つたと言ふ、髣髴たる其の面影に憧れつつ、

庭の落葉か、村雨か、搔鳴らす琴の音歟。人に知られぬ我袖に、餘りて洩るゝ涙……とか、うる覚えの明石の組が胸に浮んだ。

——やあ、戸外は何うして、其處どころの風ぢやない。爺様が出た後を、直ぐに閉込んだ棟の下も、山が焼けるかと、明さが凄いほど、先刻の黒雲は吹飛んで、晴切つたものらしい。世嗣の眉宇に煩悶の曇のあるのは、一入歴然と認められる。

「少時してから、私たちは、背戸の流に臨んだ、柳の樹の許に居ました。——で、故と聲を勵まして言つて聞かした。」

（何だい、頬白鳥が逃げた位で泣くなんて、そんな、そんな奴があるか。何だい、黙つてますからね、柳の枝を引張りながら、同一しなやかさだと思ふ、婦の肩へ手を掛けて、

春の風ほど揺つて見たが、

（だつて……）とまだ泣聲で居りませう。

（何、馬鹿な、誰か言句を言つたらな、己だと言へ、己だと言へよ。）

（そんな事を、）

ツて顔を上げたが、目に一杯涙を溜めてた。で、何です、病氣だと言つたに、此處へ呼吸を切つて驅出したんで、顔の色が蒼白かつた。こりや、其の或言葉の機會に、籠を開けて私が頬白鳥を放したからです。

（己だと言つては迷惑になるだらう、と遠慮をするのか、何が迷惑だ、又迷惑をしたつて構はん、迷惑するのを迷惑だと思つて迷惑する……そんな卑怯なんぢやない。

婆々、吉松、誰でも構はん。何うしたと聞いたら、己だと言へ。己だが何うした、と言へ、構ふもんか。

姉さん——

頬白鳥ばかりぢやない、お前もだ。鳥が籠に居て病氣をするやうに、こんな家に引込んでゐるから、煩つたり泣いたりする。出ツ了へよ、こんな家が何だ。直ぐに出る。其のなりで構やしな

鳥白頬

い、今からでも連れて行くから、)



(連れて行く、とおつしやつて、)

と不思議さうな顔をしました。其時、何處か高い處で、頼白鳥が啼いたんです。

(聞いた？彼を。見たが可い、頼白鳥は其の行く處へ行つたんだ。お前も行く處へ行くんぢやないか。)

(私が、私が……………)

とばかり言ふ。

(お前が、何だ、)

と故に迫ると、

(私の行く處とおつしやつて、どうして實家へ……………)

皆まで言はせないで、

(實家へ？誰が實家へ歸れと言ふ？私は縁家に厭きたつて、實家へ歸る奴があるもんか。勿論、其の實家の父親なり、阿母なり……………)

此の時はじめて聞きました。其までは、誰の子だか何處の娘だか知りやしません。

(お前兩親は、)

(否、)

と掠んだ聲をして、

(父親ばかりでござんすの。)

(然うか、ぢやあ——己が其の實家の父親なら、お、然うか、よく歸つて來た、で事は濟む。が、お前許のは然うは行くまい。)

(はい、些ども曲つた事は大嫌ひな人ですから、)

(曲るか曲らぬか、そんな事は風次第、水次第、此の柳の枝だよ。けれども、何しろ己の云ふ道理なんざ、お前の親には分りやしない。)

決して實家へ歸れと言ふんぢやないのだ、姉さん、)

と言つて摺寄りましてね。]

二十四

鳥白頼

「何だか、四邊は見られました。ほんの通雨だつたんですから、婆も吉松も唯首を上げて見たばかり、田畝に居なりと見えて歸つちや來ません。目の前の山のナダレは、枯残つた尾花ばかり。緒土の處々、松のすく／＼した、唯ある梢を、ゆらりと潜つた鳥が一羽、翼の色も明白に見透いたが、頼白鳥ぢやない、雀でした。」

(小鳥だつて、一旦籠に捉まつたとすると、今度飛出した時に、舊の巢へ歸るか何うか解らない。お前も行く處へ行くんだ、行く處へ。頼白鳥は何處へ行つたか知らんが、お前の行く處は外にはない、己の許へ来るんぢやないか。)

と言つた時は、何故か肩が聳えたんです。汝達が目には御殿とも言ツつべき、我が館へ引取る、と言ふ意氣組ですから。

婦は、

(え、)と言つた。

それ、驚いたぢやありませんか。私は、婦が嬉しさに卒倒するだらうくらゐに堅く自ら信じて居たんです。尤も串戯とは思はせないほど、辭氣ともに激しかつた。

案外——然も、沈んだ落着いた顔をして、

(そんな事が、私に、)

と身體を避けて、蹠跟けて後を向かうとしますから、柳の中に、

(何故出来るのだ。)

と、ぐいと袂を取る。

(内に……)

と漸と聞えます。私は傲然とした。

(何、内に、内に濟まん。何が濟まん。菜葉に黍か……假令頼白鳥の飼と同一でもだ、此内に養はれて居て、其で不義理をするなら、或はそりや不都合かも知れん。其だつて、勝手な奴が勝手に不都合にして、不都合だ、と怒鳴るばかり。

況やだ、他の者に心を移すと同時に、衣食住の勘定を濟して、再び内の世話にならんで、己に引取られる分にや仔細はなからう。

又有つても、己が立派になくして見せる……)

(それぢや、)

と思ひも掛けず、力のある聲して、

(婦人の道が、)

と口惜しさに云ひました。屹とした眉が一文字に、清しい目を睜つたんです。

(其處だ、)

と言つて、私は悠然として微笑みました。

(多分、丁ど其奴を言ひ出しさうな處と思つて居たよ、)

と待構へた、と言ふ風に、

「實は、私も待ちました。」

と聞き居る不行者、此方も腕を撫でつつ摺寄つた。

「其處です。」

(姉さん、其の事だよ。婦の道、――男の道――男は此處に話が別だ……其の婦の道だ。が、官道か、私道か、田畝道か何か知らん、そんな物は、何時誰が、鋤鉄、シヤヴェルを持つて拵へた

い。  
一夜に富士山が顯はれた、と言ふ時にも、天から扱帯を下げ、地に繻子の帯を開いて、是が、婦人の道である、と言つた験を聞かんぜ。

元來、人間で勝手に拵へた道ぢやないか。勝手に人間の拵へた道なら、勝手に人間が踏破るに何がある。然も踏破ると、危く溝へでも落ちるんならだが、然うぢやない。楽しい美しい花園だの、熟した旨い木の實なんかは、其の道の外に、其の掟の外に、其の規を超えた、其の圍を出た處にある。

是を、食物を強請る小兒に、恣に其の求むるものを與へない親にたとへるか。親は與へたい、遣りたいけれども、食べさせるより、與へるより、品物のなくなるより、一倍の苦痛を堪へて、兒の健康のために忍ぶ、可愛いから與らないんだ。

が、婦の道を拵へた奴は、然うぢやない。妬しくつて圍つたんだ、脊で矢來を結つたんだ。惜さに塀を拵へたんぢやないか。それも、地主なら未だしも可い、しみつたれな居候が、撮食ひを、大切に袂に藏つて置くのよ。』

二十五

「(其の、お前……)」

何だか、貴下に言ふやうに聞えます、」

と世嗣の君は怯んで見える。此方は何にも言はないで、唯、

「先づ、先づ……」

「……(木や竹で、歩行くこと、働くことの出来ないものなら知らん事、手足を自然に授かつた、清い目のある、姉さん、お前……否、婦人たちが、何の因果で、詰らん道なんか守つて居る。

併し、彼は貞女だ、と言つて人が讚めるか、あ、賢女だ、と云つて感心するか。成程、お前は貞女と言はれて居る、賢女だ、と言はれて居よう。

其の賞められ、感心をされるのが、舞臺へ立つた俳優の評判ほどのものがあるかい、……あるまい。恐らく鎮守祭禮の棧敷に掛つた、太神樂にも及びやしないよ。――馬鹿な、詰らん話ぢや

あないか。

此の袋田の貞女なんぞ……柳の樹のお民と言ふ、美名が後の世に傳はつたつて、一年太郎作が畠の芋莢が、丈一丈に出来た事や、三股の大根の生えた事、檀那寺の三毛猫が上手に鼠を捕つたと言ふ話の序に、人の口の端にかゝるに過ぎんぜ。

最と飛んで、(此村に貞女あり)と谷戸の入口に榜示杭が建つた處で、其が直ちに、傾いた曲つた小屋の、突支棒に成るんぢやなからう。其とも操を守るがために、美しい衣服を着て、旨い物を喰つて、御楊枝で端然と坐つて居られる、と言ふならだ。操正しい、賢女だ、節婦だと言はれるために、弱い身體を人一倍苦勞して、婆にや苛められ、小女にや小撞かれる、見ろ、そんな破れた襟の半纏着で、)

と言ふと、眞白な咽喉を、取つて引緊められたやうに、胸を抱いた。

(茶ツ葉を嚙つて水を飲んでる貞女が何だい。)

と私は豫て婆どもの事を知つて居たから、饒舌る内にも勢づいて、満腔の俠氣、渠を救ふに、敢て世に憚らん氣がして來て、

(貞女の胸にや瓔珞が掛つて、淫婦の帯を蛇が巻いてる、と云ふ例を聞かん。

善不善、それゝに、自然の報があると云ふのか。此家へ縁附いて何年經つ。一度も、どんな

か果報があつたか。ありやしまい。今己に若し救出されて、其を人非人だ、不埒だ、と勝手な事を云ふ奴等に、お前を着飾らせて見せたら何うする？金剛石で、翡翠玉で、其の美しい指を輝かせて見せたら何うか。袋田村の貞女を廢めろ！)

お民の、然も一生懸命らしく、負けまい、屈せまいとするやうに、仰いで睜つて居た目は、何時の間にか水の流に伏目になつて、枝に頸を垂れながら、其の思は肩に籠つて、優しく拗ねた風情がある。

(まだ、分らんのか。)

と私は兩手で犇と柳の樹を壓した、枝がふら／＼と靡いたんです。

(第一お前は、此の柳の茂つた色を外から覗いて、暮し向きを床しがつて、だまされて來たんぢやないか。約束をした亭主も、惚れた夫も何にもない。人は違ふが、まるで、然うすりや、雪の朝、餌に餓えて、弟の奴にたばかられて捕まつた鳥と同一事さ。

其だつて、餌を飼はれりや、よく懷いて、手を叩けば來る、呼べば啼く——あ、可愛い、恩を知つて、とか何とか言ふだらう。馬鹿な、人間が勝手に言ふのよ。——婦の道と同一さな。

頬白鳥の方ぢや迷惑だ、が、悲い事には、餓いに替へられんから、其處で己を囚にした敵にも懐くんだ。——お前が婆に苛められても……腰を擦つて、齊眉してるのも然うぢやないか。

人の目には、よく馴れた、可憐いた、と思ふ頬白鳥が、おい、何うしたよ、己が手を掛けて戸を開けりや、兩の羽を羽搏つて飛んだぜ。お前は、まあ、あんなに可愛がつて遣つたものを、不人情だ、薄情だ、と思ふだらう。そりや勝手だ、我儘ぢやないか、何うだ。

(まあ！)

(否とは言へまい、否、否とは言へまい。頬白鳥は他に佳い處があるんだから、行きたい花園があるんだから、欲しい木の實があるんだからよ。此内も其の通り、頬白鳥に於けるお前と一つだ。不人情だ、薄情だ、と言ふだらうが、そりや、居候の禪のやうな、婦の道とか云ふものに、お前を立て、歩行かせて置いての事で、向うは勝手さ。むかうは其が勝手だらうが、お前はお前の勝手が有る。附木で繕つた籠を抜けて、一足出りや、己が居る、己はお前の花園だよ、旨い木の實だよ……)」

二十六

「(さあ、此の旨い木の實を遣らう、)

と自分の懐へ、私はブツと手を入れて、

(綺麗な花園へお出で、)

と言つて、濃い柔かな束ね髪を垂れながら、指を反らして焦つた状で、小刻に柳が幹に觸つて居た、滑かな袖を取つた。取つた茨には刺があつたが、引かれた花は、其の手、其の襟、其の胸、其の足、脛ばかりが薄紅さして、唯眞白な胡蝶のやうで、其が不殘、ゆらく戦く。

途端に皆消えた……のは、崩折れて柳の根へ跪つたんです。片手は袖口を捲いて口を壓へた、顔も半分隠れましたが、取つて離さなかつた手は其のまゝなのを、ぐい、と下へ引かれたから、此の胸が被さつて、乗越して上から覗く、脇明へ冷たさうに、淺葱の色が絡んで見える。

何の氣なく、目を反らして、水を見ますとね。同じやうに常磐木の縁を透いて、雪が隠顯映るんです——眞上の、ナダレの、あの女神の白身が、倒に浮いてるんで。

不圖、思着いたから疊みかけて、又恚う言つた。

(見なよ。此處に、此の水に映るのは何だ。)

と眞直ぐに指さすと、ちらく、と其の映つたのが、底から玉のやうに湧いて動く——

お民も、熟と覗きましたか、

(朝晩見て居よう、こりや裸體の婦だ。——此だがね、今此處でお前が全て衣服を脱いだら、人は何と思ふ。)

と言つた時にや、フイと顔を背けました。餘りだ、と極が悪さうに。

私は猶豫はす捲し掛けた。

(衆何うする、何と言ふ——出来ん、そりや出来ない。お前が己に聞いて、家を棄てる事を、人に對し、世間を兼ねて仕得ないのは、恰も此の庭で、白晝裸體になつて突立つのを憚るやうなものだらう——人が見て何と言はう、指して何うするか、と思つて。

けれども、能く聞け。

村の者は、此のナダレに立つた、膚の白地な女に對つて、何う出来る、何が言へる。唯、あれあれと馬鹿口を開くばかりぢやないか。頓て其の美麗さに、押魂消るばかりだらう。是が西洋の女神の像だ、と聞いて、田畝で拜むやうに成らうも知れない。

是とても、場所が場所、畦道にでもあつて見る。土を捏ねた泥ツ手で、奴等ア密と胸を撫でて見ようも知れん。浅ましい、と云つて、唾も吐きかけようし、草鞋を拾つて打つける小兒もあるんだ。——處を、立派な持主が、高い處に据ゑて置けば、うつかり指さしも仕得ないぢやないか。

婆どもに苛められても、吉松の此の家の内に居ると思へばこそ、己の説に従ふについて、唾も吐かれう、草鞋も頂かされうと云ふ憂があるんだ。邸へ來い、百姓等に指だつて指さしはせん。口なんぞ利かせるもんか。

何がなし、奴等が思慮分別に突ばつた、雲の中の女神だ、とお前を思はせるから憂慮するな。が、故郷へは錦だから、都の貴婦人となるよりも、村で肩身を廣げたからう。……其も可、こんな袋田の村一ツ、買潰して池にしようが、庭にしようが、そのくらゐな事には驚かん。馬丁に前を拂はせ、馬車に乗つて衝と入れ。不義理な、人非人だと、面と向つて誰が怪我にでも言ひ得る——又、奴等が口を利かないのも氣にするな。偶に此方から物を言へば、月の光に倣立つて、あの女神が、微妙な聲を懸ける時、百姓が土下座して伏拜むと同一位地にお前を置くから。お民……

と爾時手を離して、柳を攀づる意氣込みで、小手をナダレの女神に翳し、

(天は高い、地は潤い。雨霽れの日の黄金の綾に包まれた、別世界、白玉の女神と、翼ある兒が戀の矢を引絞つた極樂が、目の前にあるではないか——外國の事と思ふな、斷念めるな。こゝにあればこゝにある、然も、此の袋田の空に飄々くが如くにある。唯立て、手を伸ばせ、直ぐに花園の木の實に届く。)

と言ふと、魂が入れ變つたやうに、きつと立つて、ひしと絶つた、婦の背を確乎と支へたんですが。]

「……魂が、他愛なく、我か人か、胸で一ツに成つた……と思ふと、緑の葉と葉の間を抜けて、白く燃える尾花の波を、兩岐の霞のやうに、すら／＼と足を迄らして来て、目前へ立つたのは等身の女神の像で、端麗な其の顔は、何故か、不思議に唇だけが、私の顎の下に紅かつた。

あの女神の顔が、餘り能くお民に似て居ると、何時も思つて居たからでせう。

婦は活々した嬉しさうな聲になつて、女神は兎に角、可愛らしくツてならなかつた、羽の生えた小兒は？ツて聞きますから、矢の講釋を手眞似でしながら、(あ、放した、それ刺つたぞ)と云ふ時、指環を抜いて、婦の胸へ。……此がヒヤリとしたと見えて、

(あ、)

と言ふ、其の拍子に、漸と分れて歸りました。

これだけの隙はあつたけれども、連出す約束をしたのは、未だ其の折ではなかつたんです。處が、お民と、ふとした行係になつてからは、其までの打壞し主義、敵役の代官が、打つて變つて、首尾よく成就させた気がし出したので、妙に遠慮勝になつて、前のやうに、づか／＼出入りが出来ません。が他所ながらも、様子を見ないぢや居られんから、其處で、此方の塚の傍

を敲つて上る、搦手の路を發見しました。

御存じの、石碑の裏を、馬の鬣なんぞ分けるやうに、尾花を踏んで、束ね放しの粗朶が、ころりと寝たり、仰向けに路に轉つたり、ごろ／＼して居る上を跨いで、無暗と、攀上つて、方角を見い／＼、雜木林を突切ると、峰へ出るんですね。

頂は三四百坪——廣場ですから、見た目には狭くつても、あれで五六百坪はあるかも知れん、平地地ならしが出来て居ますが、しばらく打棄つてあらるしい、枯草が茫々、真中に、十字が建ててあります。

端へ出ると、あの女神像は、恠う張の好い腰へ、ふつくり搔込んだ、柔かな背筋が、些と窪過ぎたかと思ふほどに、浮いた肩先が四五寸、峰を抜いて立つて居ます。近づいて、はじめて知つた、波がしらが裾へ立つた石の臺に取附けてあるんです。愛神は上から見ても、矢張高く松の枝に架つて居る。まだ、肱をまげて、長く成つて、すらりと足を投げて、胸が漣のやうに横に寝た、女神の像が最一つある。

其の間へ、足を落して、山の端へ腰を掛ける、と厩も藁屋も、柳にか、つた繪馬か、と見える。吉松の構内を瞰下ろすと、ちよろ／＼と流れる水も、雲に遙に連なつて、蒼空の中から鱗を洩らして、磯馴松を絡つた海も、どれも同一水の色です。私は獨で豪くなつた——頑冥な、馬鹿律義

な、舊弊な、愚者どもの眠を覺し、舊き道德を滅して、新なる、智慧に、自由に、自然に蘇生らせる大海嘯に挿して來た、波の上なる女神の夫だ——雲の端に手を翳した豫言者の意氣組で。本を開いて見るやうに、帽子の下から、下の様子を窺つちや歸りました。幾日か然うしました。僥倖に天氣續き、其の節此の風に……」

みりく、梁が撓んで鳴る。

「今日のやうなのに吹かれると、天上へ飛ばか、甌の中へ突落される處でした。

現に昨日も、又然うして居たのを、柳の根へ來て、お民の手が梢に搦んで私を招く——尤も彼處からは下りられませんが、呼ぶ程だから差支へはあるまい、と元の庚申塚へ廻つて、急いで吉松の内へ行つて、……何時かの時と同じやうな事がありました。で、密と話をして、昨夜の其の事、遁げて出よう、迎ひに來よう、と約束をしたのでした。」

### 二十八

「此處で矛盾したのは、豪さうに自分だけの新思潮の潮先に立つて、袋田の奥へ海嘯の如く押寄せて、美人を犠牲に取つて凱旋する勢の奴が——婦を連れて遁げるのに、夜を選んだのは可訝しいでせう——尤も私の發議ぢやない。先からの行係りでも、卑怯な夜遁げは不可ん、白晝大手を

振つて出る、と附元氣をして見たが、婦が斷じて背きません。

又私も、何うやら村を連出すのに、人目を忍んで、薄尾花にまで心を置くと云ふ方が、妙に嬉しい氣がしたんで、ぢやあ、間違へるな、(今夜……屹と)と言を番へた。いや、其の爲に飛だ間違ひが起りましたよ。考へて見りや、婦も町へ用たしに出る風で、晝間の方が却つて都合が好かりさうなものだに。

一方には、連出して一先づ藏匿ふ處を拵へて置いて、愈々昨夜、月を遡つて、來掛つたんです。時間も粗た打合せをして置いた。一時頃までは村の若い者が町方へ賭博に出る歸途がある、三時過ぎると、最う絲工場へ通ふ早出の職工が通る、其の間、と兩方から切詰めたから、窮屈な時間です。

丁どお宅の前あたりで、鶏がないたのを聞いて、吃驚して、後れたか、と時計を出して、月影に透かしたが、一番鶏。

此の通り、山の裾がぐるりと取廻して居ますから、夜は洞穴を抜けるやうで、大な白い蝙蝠ぢやないが、枯尾花の穂が、ちらくする。水田は一面に黒ずんで、どんよりした底光、死んだ湖を見るやうでせう。山の面は眞蒼で、處々灰色の骨が出て、遠いのは腰、近いのは頭に、白く冷い霧が薄り掛つて、其が動くやうな、動かないやうな、宛然大濤の幽靈かと思はれる。今日の風



が吹く前觸だつたか、其はく寂としたものでした。

又何も、昨夜に限つたんぢやありませんまいが、然うした月夜の習ひで、立木なぞ片面が明いと、裏は餘計に暗いんですね。引いた足が暗いと、踏出す處がぱつと明い。路傍の枯樹の枝が、つつきり刺さりさうに足の甲へ映るかと思ふと、爪先の土からは、ぼうと薄煙が立ちます、——好鹽梅に、寒さは骨に透るほどぢやなかつた。何の、そんな事は氣になりませんね。吉松の近くへ行くと、と彼處の取着が、雑木山で、空から樹の蔭が一束になつて押被さつて暗いんです。門の前は、眼が覺めるほど明るくつて、而して、山の行留りの所爲か、霧が又一際濃くつて、ぼたく音が生さうに、厚ぼつたく累つて、ふつくりと月を乗せて居ました。

脱つた、暗號の約束をして置かなんだ、とげつそり心寂しくなりましたつけ。……ばたくばたく、鶏の羽音がした。急に胸が轟きました。——確に吉松の家の鶏小屋で、ケツツケ、ツとけた、ましく騒立つ——何處かで、ウ、ウと牛が鳴く。

握拳ほどの影が出て、明るい處へ、すつと擴がつた、と思ふと顔の白い、茫とした、裾の蒼いのが立ちました。私は夢かと思つた。

(お民)

とはつと出る、と何にも言はずに、此の時は婦の方から、確乎私に取纏つて、ぴつたりと袂を

摺寄せました。

(……………)

(行かう！)

と其なり、私は婦の袖口へ手を掛けたが、——それぢや……そんな事を、……下着を着換へて居つたんですね——冷く觸つて、掌にぶるゝ動きました。

其處へ、一寸立停まつて、直ぐに突出された風で、足を揃へてするゝと歩行き出した。

左手……の私の横合ひから、のつそり白犬が跟けて来る。家を早や遠ざかつた。あの塚が見える處で、前脚をひよいと出して、面を振向けて、膝の處を、クンと嗅ぐ。

(畜生)

と叱ると、うゝと可厭な聲を出したんですね。」

二十九

た。

「私は、悪いものを持つて居ました。昨夜なんぞ、特に敵地へ臨む氣ですから、袂に短銃があつた。唸りながら頸を伸ばして、老の畜生、鼻尖を擦りつけたが、直ぐに嗅いだと見えて、翻然と三

尺、地摺りに退つて、怪しからず吠えたんです。お民が、貴下、  
(何ですね。)

ツて一足出て、一寸腰を屈めながら、頭を壓へて、ぐつと壓して、  
(白ぢやないかねえ。)

然うすると、畜生、鼻頭を仰向けて、霧を吸ふやうな大口を開いて、ぺろりと嘗めようとす  
る。お民が袖の下へ手を隠すと、向をかへて、ふらく田のふちを傳つたが、矢のやうに颯と飛  
んで、何處へか見えなくなりました。

お民が其まゝ、足を留めて、

(可厭なねえ、内へ吩つけに行きはしますまいか。)

(今まで見懸けない犬だ、お前ン許のか。)

(否、他所のです。)

と言ふから、私も何うやら安心しました。

(飼主が、寶物を穿出す夢でも見るだらう。さあ、構はず行かうよ、急いで。)

(はい。)

其まゝすたくと歩行き出した。些とは落着いたものらしい。其の時はじめて、自分たちの聲  
音が耳に入つたんです。が、少時すると、はた、と其の一ツが留まりました。妙に、八九枚田を  
隔てた對方の山の裾で、其の響が止んだらしい氣がします。遠くで——大方、びたくびたく、  
唸とか言ふものがして居たからでせう。

(あら……)

(……)

(若様、)

と聲が變る。

(何だ、)

(誰か呼びはいたしませんか。)

(誰を、)

(私、)

(誰が、)

(……)「お民ツて、」……お、又……「何處へ行く、」ツて、……あ、  
と言ふ、と最う調子が上ずつて、確乎、私に摑つたんです——私は、的なしにきよろしくしま  
した。

少時、身動きもしなかつたが、堅くなつた婦の身體が、ぶる／＼と震へた、と思ふと、  
（庚——申——塚で呼ぶんですよ。）

と言つたのが、私の連れた婦ちやなくて、遠くで、今、蹙音が銜を返したと同一に聞える。私も何だか慄然としました。

（庚申塚で呼んだんですよ、——「何處へ行く……お民！」ツて、）  
とわな／＼する。

（庚申塚に、誰が居る。）  
（否、お庚申様ですよ、何うしませう。）  
と蒼くなつた。

（何、あの塚が物を言ふ？馬鹿な事を！）  
自分ぢや却つて安堵して、低聲で笑つて、而して、婦の氣を休めるために、つか／＼と寄つて、恐氣もなく、不作法に顔を突出して、蒼白い石碑の、周圍が蔭に成つて、底の浅い巖の窪に浮いた奴を覗きました。が、猿の形が、唯、何だか混沌とした、大きなものの胎内に宿つた、乳汁に包まれた不氣味な小兒のやうに見えました。  
雖然、何となく其に目が引附けられて、岩に冷く腫が据わると、あの三方へ三體刻んだのが、

孰から始めたか、ぐる／＼ぐる。はつと思ふと、又舊の處へ朦朧として居直つた。  
吃驚して退りましたが、無論、こりや自分の目の所爲だ、と考へたし、又自から敢て恐れない事を證據立てるために、平氣な風で、

（何でもないぢやないか、來ないか。）  
と呼ぶと、婦は元の處に立竈んで居て動かんので、  
（來ないのかい。）  
と促しますとね、纔に身體を動かしたが、私に其處へ來て欲しい、と云ふ仕打なりました。」

三十

「勢よく引返すと、継りついて、耳へ囁かうとして、口を寄せるのが、震へて、頬へ掠れるほどで、

（家へ歸して下さいまし、何うぞ。）  
（何を云ふ。馬鹿、あんなに言つて聞かしたのを忘れたのか。未だ分らんのか、婦の道なんぞ心持だけだ。此の村一つ出はづれる間のもんだ。誰に遠慮をする。些とも憂慮はないと言ふに。）  
（最う、最う、恚うして私、内を見棄てて、來、來ましたもの、恥かしいも濟まないも、そんな

事、そんな事は思ひませんが、お庚申様が……)

(何、人には構はんが、庚申塚を憚るんだ？ そ、そんな事を言ふのが、未だ魂が此の袋田の隅っこを彷徨ついで居るからだ。伸して出る。靈魂を高く持て。あのナダレの女神の姿を仰げ——妨をする佛もあるなら、戀の權化の神もある。村の佛に世話を焼かすな。くだらない。操だ、義理だ、そんなものは、念に懸けるな。爪の垢ほども考へるなよ。何だ、塚が、石碑が、何だい。己の婦の邪魔をして又麥飯を食はせるのか。)

と激烈に遣附けたが、何故か、唾が乾いて不可んです——こんな事ぢや駄目だ、と思つて、躍起となつて、

(え、！目觸りになる關所なら、突破つて通して遣らう。)

奮然と、躍り上る勢で、月影を颯と亂して庚申塚へ武者振りついた。婦は引留めもしなかつたんです。聲が出なかつたぢやない。幾干か、私を便りにして、何のくらゐに反抗が出来るか、其を見た上で、最う一度決心しようとしたらしい。

變でしたよ。奮發懸つて、ドンと突かうとした手が空を切る。石に些とも届かんですね。其處に、目の前に、月の暈を見るやうな、輪廓がある癖に……

これは、と思つて、又押したが當りません。赫として、二三度拳を揮廻はすと、力が餘つて、

ぐるりと背後向になりました。

其時不圖見た、月の色が、何とも言へず蒼かつたんです——

婦は、と見ると、

(呀！)

何うしたか、ばったり地に倒れて居るんでせう。

(瘴氣むか。)

(お遁げ……お逃げなさいまし。今、今、塚の前へお立ちあそばしたお身體が、眞白な煙になつ

て！)

(え、！)

(消え、消えるやうに、見えたんですもの。私、最う可恐い、どうぞ、どうぞ。)

と、舊來た家の方へ、居膝つて、袖を落して、腰を引摺る。其に續いて思はず、ふら／＼と歩行きました。婦が又、あつと言ふ——戻らうとする畦路にも、山の根にも、樹の下にも、大勢影のやうな人が立つて見て居る——と言つて窘むんです。

(土、土百姓ども。さあ、誰でも来い。操だの、義理だの、そんなものは、貴様達の大根畑にや肥料を被つて生えて居ようが、己の方にや、怪我にも無いんだ。無いと云ふに何うするてんだい。

己が此の婦を連れて行く。文句がある奴あ、此處へ出る。何者だ。とくらくくして目も眩んだんでせう、誰も見えんが、居ると云ふから叱りつけた。

(あ、もし、もし)

と婦が下から、胸へ攀るやうに膝を立てて、

(否、「否、決して言句は申上げん、唯私をお連れ遊ばして、お通りの處を、黙つて見て居るのぢや、」と言つてです。「樹も、草も、お月様も、皆が見てござるぢやないか。」ツて、然う言ひますよ。「誰もお邪魔はしませんから、すんく行かつしやい。」ツて。——え、え、誰？誰方？まあ、あ、墓から出て来た、袋田の爺婆だつて。あれえ、あれえ！)

とのつけに反る。橋のやうになつた胸を、兩腕で、ぐい、と抱いた。

私も夢中で、

(うむ、見物しろ。殿様が御通りだ。)と言ひさまに、白々と足をさげて、月がツくりと仰向く婦を、宙へ。大股に歩行きましたが、庚申塚を抜けようとする……」

世嗣の君は大意を吐くのであつた。

三十一

「急に重量が掛つて、我慢にも腕が痺れて、抱いて居た手を放すと、氣絶して居たと言ふんぢやありませんから、頭は落ちないで起返つて、塚の礎に手を突いて、身體を支へた時でした。

(あ、あ、顔の赤い大きな物が、木の葉を食べて……)

と恍惚して、熟と見ながら判然と云ふかと思へば、

(あ、)

と髪を散らして、突伏して了つたんです。

顔も上げずに、私は是なり成るやうになりませう、歸つて下さい、遁げて欲しい、最う夜がある、と身を揉みます。

霧がむくく動いて来て、一面に田の上へ、波が寄るかと思ひましたから——斯うなつちや、若し人に見られると、私が居ては尚ほ婦のために悪からう、と思ひましたから——とぼく歩行出して、振返つて見る内に、霧が段々、あの、其の墨繪のやうな姿の上へ、累りく、やがて、私の身體を袋田から押出すやうに、後を壓へて擴がりました。」

扱は袋田の、今朝の霧の濃かつたのは、恚る祕密が包まれたのであつた。戸にカタリと打附かつて、ほうと言つて、六兵衛爺様が歸る。

で、世嗣の君は懸念に堪へず、お民の成行きを見定めようと、出直つて来たことは言ふまでもないが、庚申塚で行惱んだのは、吹く風の威力ばかりではなかつたのである。然るにても延寶八年の、其の奇しき塚が、——海嘯が山の奥を浸した時——祖先の手に建てられた、遠慮のほどが思ひ當る。

時に、恚う打明けて、世嗣の君が懺悔した趣意と云ふのは、聞くが如き悲境に落ちたお民の救を求めたのである。

仰せまでもない。中空には、はた波を踏んだ女神もあるのに、お民は庶で縛められた、——止まぬな！此の風。あはれ牛頭馬頭に追立てられ、裳が炎に乗つたと云ふ、疾く先づ其の繩を切解かう。

次の夜、伯爵の世嗣が、壘屋に再び訪れた時は、馬丁體のものが附いて、麥酒を束にして持つて来た。別に肴があつたので、爺様は例の手酌で獨りで飲んで、宵の内にごろりと寝たが、主客は炬燵に差向ひで、耳も顔も熱くなるまで相語つた。行者が醫師で、風邪ぐらゐるは、村の者に藥を盛つた信用から、兎も角も亂心でないのを悟して、お民の繩は解かせた、と言ふので、世嗣も落着いて、猶悉しく當時の狀を繰返した。——此まで記したのは、二度のを纏めて一つに綴つた

ことを言つて置かねばならぬ。——さて又打つて變つた今夜の風、天井で鼠は騒ぐが、戸外の氣勢は寂として、霜の降るのが犇々と身に應へる。

續きは忘れたが、世嗣の君は炬燵櫓へ肱を掛けて、此方へ押寄せるが如くに凭れながら、

「貴下は何う思ひますか。」と急に尋ねた。

「何でございます。」

「婦ですよ。お民があのかくらな容色と、氣立を持ちながら、こんな村の隅つこに、埋木に成つて一生を暮すのは可哀相とは思ひませんか。前生の約束と云ふやうな、愚な事でも考へないぢや、馬鹿々々しいと思ふんです。

一生襤褸を着て、糠を食つて、土穿りをしつづ枯木に成つて朽ちるほどなら、人に何と言はれつつ、たかが一村一里の批判です。外國と戦争した時の破裂弾のやうに、日本中響き渡ると云ふんぢやない、構ふもんですか。——而して榮耀榮華をして貴婦人と言はれて、化粧料の殘餘で慈善事業でもした方が幾干増か知れんと思ふ。何うでせう。」

「何うも些と何うも其は、」

とばかり此方は陶然として天窓を搔いた。

「お返事に窮しましたな。」

世嗣の君。

「不可いでせうか。」

「何ういたしまして、一々御道理のやうで。」

「別に道理ぢやありませんよ。」と直ぐに折るのが憎くはなかつた。

「尤も、お民さんが、私のものなら直ぐに貴下に獻じます。何うも其の方が婦に取つて幸福のやうだ。いや、やうだぢやない、確に幸福かも知れんから。貧乏人が碌に食ふものも食はせないで、我が面をする権利はない、差上げますとも。」

「然う云はれては——恐入つた。」

と埋めるばかりに掛蒲團に額を伏せた、此の容子に、又少からず動かされた。しばらく、途絶えて、夜が更ける。

「時に、お睡くはありませんか。」

「否、お民の事が出来てから、夜を寐ないことがいくらもあるんで……私は些とも。しかし貴下は？」

「私は御覽の通り——そりや然うと、其の肝心の、昨夜、庚申塚をお通なさらうとする時、怪しい声を、」

と言ひ出したが、變に背が廣いやうで、見返ると押入の襖に、頭の圓い影が映る、二つ二人の、

が、未だ一つあるやうな気がして、背が寒い。

「其の聲を掛けたと云ふお話、貴下も其をお聞きでしたかい。」

「婦の口から、不意に、(お民、何處へツて——お庚申様です)と云つて震ひついたんで、縫られた胸からかけて、ぞつと貫かれるやうでした。爾時のお民の聲と云ふのがなかつたんです。今もお話した通り、一度婦の咽喉から出て、田畝を廻つて、向うの山の裾を傳つて引返して、ぐわんと此の耳へ来た。而して、(何うしませう)ツて悲鳴を上げられた時は、私も實際何うしようかと思ひました。何とも言へない氣持でしたよ。」

「が、然う云つてお民さんが、ものに托して、貴下を諷したと云ふんぢやありませんかね。」

「そんな、そんな様子は更に……はじめ、家を出る時に、小な風呂敷包一つも必ず持つて来ちやならんぞ、と云つて置きました。昨夜もたしか袖の下へ隠されるほどの品も持つちやあ居ません。見ると、月明には寂しいほど空身で居ました。何かに託けて私を教へるくらゐなら、故とに

「が、然う云つてお民さんが、ものに托して、貴下を諷したと云ふんぢやありませんかね。」

「そんな、そんな様子は更に……はじめ、家を出る時に、小な風呂敷包一つも必ず持つて来ちやならんぞ、と云つて置きました。昨夜もたしか袖の下へ隠されるほどの品も持つちやあ居ません。見ると、月明には寂しいほど空身で居ました。何かに託けて私を教へるくらゐなら、故とに

も風呂敷包ぐらゐは持つて出たらうと思ひます、駈落すると信じさせるやうに。」

「未だ何ですな、其處らに、むら／＼して、目に餘る人の姿が見えたとつて事でしたな。」

「最う其時にや赫と取逆上て居たんですから、お民ばかりぢやない。木だか、石だか、筵だか、そんなものかも知れませんが、私の目には見えません。」

だから叱りつけた、怪物だつて、幽霊だつて、土百姓なんか恐れはせんのですよ。」

「しかし……」

「ですが、婦を引抱へて、塚を突抜ける力はなかつたんです。口惜いが支へられないで、何故か身體が弱りましたよ。」

「而て見ると、人間ばかりぢや、守る事も守らせる事も出来ない、力さへあれば打破ることの出来る、婦の道なぞと云ふものは、鬼神があつて、自然が命するの分りません——他は今……」

差當り、あの庚申塚が、貴下方を憎んだでせう。」

時に、月天心と思ふあたりを、颯と此屋の棟へかけて、ものの押寄する氣勢がした。はつと言ひ合はした如く顔を見ると——星にも響かう……ひづめの音。

タ、タ、タ、タ、タ、タ、と一壓に間近になつて、ハタ、と其の音が止んだ、と思ふと、戸に打附つた物の響、唐突に山が崩れたか、と二人とも息を詰める、咄嗟の間は動悸も止まつた。

トン／＼と叩いて、

「爺様！」

「お、」

目敏く爺様は應へたが、生矢伸してぼやけた聲。

「誰ぢやい。」

「吉だよ、吉松だよ。大變ぢや。」

「何、大變だ、」

と行者が眞先に飛出した。びしり、と開ける、出合頭に、髭斑な蒼い顔で、

「お民の奴が、のう、」

「うむ、」

「咽喉を突いた。國手、」

「了つた！」

と聲を上げて、爺様の寢床を飛越えようと、

「わい、」

と言つて、むつくり起きたが、世嗣の君は、部屋の方に石の如く立つて居て、



「君、君、」

とばかり言ふ。

「疾いが可い、」

心掛聊ながら——縋帯ぐらるは備へて置く。革鞆を下げて土間へ下りると、早や、爺様が手傳つて、戸口に駒の頭が高い。

「さあ、乗つて駆けさつせえ。」

鐙の踏みやうも知らないのに——裸馬ではあつたけれども、何となく此の驪、其の意を得たらしく思つたので、猶豫はらず、手をかける、と誰だか足を浮かしてくる。鬘に掴まつて、平伏にハタと伏すや、前足がボンと出た。

月下の道は流るゝばかり。

衝と庚申塚を抜ける時、駒に並んだ吉松が、

「御免なせえまし。」

と聲をかける。

「失禮、」

と行者も揖した。

背後から、

「急いで——」

と山の裾に響いたが、其を振返る隙があらうか。

得物は鎌で、手負は咽喉を掻切つたが、玉の緒は未だ絶たれず。切なさに水を求めて、納戸の縁を落ちたさうで、ずるゝ這つて出た處、背戸の流の柳の根に、力なく倒れて居た。あゝ、最う些とで口を濡らしては助かりはせん。勇んで抱起こして、兎角して、縋帯する時、夜が白む。手負は目を塞いだまゝながら、白魚の指に紅さして、頻に山へ向かうと言ふ。背を抱いて向直らせたが、一念が通じたのであらう、女神の前に、小さく黒く、世嗣の君の姿が立つた。と、上から手眞似で聞くやうだった。固より容體を尋ねたのであらう。下では其の答に稍猶豫つたが、此の際頭を掉るべきではない、と考へて、此方は幾度も頷いたのである。

しなしたり！呼吸が絶えたか、と聞いたらしい。

婦の脈を確かめて、引返して來た。庚申塚の此方から、靄を開いて、今朝は、いつもより一入高く、女神の胸が雪を敷く。

唯見ると、鳩にしては稍小さい、鷗は餘り其處まで來ぬ、何の鳥か白いのが、ひらゝと飛ん

で中<sup>な</sup>空<sup>そら</sup>へ舞<sup>ま</sup>上<sup>あ</sup>つた時<sup>とき</sup>、凍<sup>こ</sup>てて青<sup>あ</sup>竹<sup>たけ</sup>の破<sup>や</sup>れた音<sup>おと</sup>して、女<sup>に</sup>神<sup>よ</sup>の胸<sup>むね</sup>の白<sup>しろ</sup>妙<sup>たへ</sup>が鮮<sup>あ</sup>紅<sup>か</sup>に颯<sup>さ</sup>と染<sup>そ</sup>まる。日<sup>ひ</sup>の出<sup>で</sup>  
ぬ前<sup>まへ</sup>よ、あゝ、其<sup>そ</sup>の紅<sup>くわ</sup>——庚<sup>かう</sup>申<sup>しん</sup>塚<sup>つか</sup>の朝<sup>あさ</sup>の霜<sup>しも</sup>。  
女<sup>に</sup>神<sup>よ</sup>を飾<sup>かざ</sup>つた、山<sup>やま</sup>の主<sup>ぬし</sup>は未<sup>い</sup>だに知<sup>し</sup>れぬ。

沼  
夫  
人

「あゝ、奥さん、」

と言つた自分の聲に、ふと目が覺めると……室内は眞暗で黒白が分らぬ。寢てから大分の時が経つたらしくもあるし、つい今しがた現々したかとも思はれる。

其の現々たるや、意味の如く曖昧で、虚氣として居たのか、茫乎となつて居たのか、其とも一寸寢たのか、我ながら覺束ないが、

「あゝ、奥さん、」

と返事をした聲は、確に耳に入つて、判然聞こえて、はつと一ツ胸を突かれて、身體の何處かが、がつくりと窪むだ氣がする。

其處で、此の返事をしたのは、能くは覺えぬけれども、何でも、誰かに呼ばれたのに違ひない。

——呼んだのは、室の扉の外からだつた——即ち、閨の戸を音訪れられたのである。但し閨の戸では、此室には相應はぬ。寢て居るのは、凡そ十五疊ばかりの西洋室……と云ふが、

此の部落に於ける、ある國手の診察室で。

小松原は、旅行中、夏の一夜を、知己の醫學士の家に住つたのであつた。

隙間漏る夜半の風に、ひた／＼と裾の靡く、薄黒い、ものある影を、臆病のために嫌ふでもなく、然ればとて、群り集る蚊の嘴を忍んでまで厭ふほどこぢれたのでもないが、鬱陶しさに、餘り蚊帳を釣るのを好まず。

些や少との、ぶん／＼なら、夜具の襟を被つても、成るべくは、螢、萱草、行拔けに見たい了簡。其には持つて來いの診察室。裝飾の整つたものではないが、張詰めた板敷に、奈様にか足袋跣で歩行かれる絨氈が敷いてあり、窓も西洋がかりで、一雨欲しさうな、色の稍褪せた、緑のカアデン窓帷が絞つてある。これさへ引いて置けば、田圃は近くつても蟲の飛込む惱みもないので、窓も一つ開けたまゝ、小松原は、晝間は其の上へ患者を仰臥かせて、内の國手が聴診器を當てようといふ、寢臺の上。益々妙なのは蚤の憂更になし。

地方と言つても、然まで邊鄙な處ではないから、望めばある、寢臺の眞上の天井には、瓦斯が窓越の森に映つて、薄ら蒼くはつと點いて居たつけが、寢しなに寢臺の上へひよいと突立つて、捻つて、ふつと消した。

「何、此の方が勝手です、燧火を一つ置いて頂けば澤山で。」

此家の細君は、未だ爾時、宵に使つた行水の後の薄化粧に、汗ばみもしないで、若々しい紅い抜帯、浴衣にきちんとしたお太鼓の帯のまゝで、寢床の世話をして、洋燈を其處へ、……

「否、お馴れなさらないと、偶とお目覚めの時、不可いもんですよ。夫でもつい此の間、窓を開けて寝られるから涼しくつて可いてつて、此室へ臥りましてね、夜中に戸迷ひをして、それは貴下、方々へ打附りなんかして、飛んだ可笑しかつたことがござんすの。」

可笑いより、貴下、ひよんな處へ顔を入れて、でもまあ、男でしたから宜しかつたやうなもの、私どもだつたら何うしませう。其處にございます、それですわ。同じやうな切を掛けて蔽にして置くもんですから、暗さは暗し、扉の處が分りませんので、何しろ、何處か一つ窓へ顔を出して方角を極めようとしましてね、窓掛だ、と思つて引揚げましたのが、其の蔽だつたんでせう。箱の中に飾つて置きます骸骨に、ぴつたり打撞つたんでございますとさ、厭ではござんせんかねえ。」

……と寢臺の横手、窓際に卓子があるのに、其の洋燈を載せながら話したが、中頃に腰を掛けた、其の椅子は、患者が醫師と對向ひになる一脚で、

「何ば、男でもヒヤリとしましたさうですよ。」  
と愛嬌よく莞爾した。

「や、そりや、酒田さん驚いたでせう。幾ら商賣道具でも暗やみで打撞つちや大變だ。」

「ですから、お氣を注げなさいまし。夫とは違つて、貴下はお人柄でいらつしやるから、又然うでもない、骸骨さんの方から夜中に出掛けますとなりません。……婦のだつて、言ひますから。」

二

主人の醫學士は、實は健康を損ねたため、保養旁々暢氣を專一に、此處に業を開いて居るのであるが、久しぶりの此の都の客と、對談が發奮んで、晩酌の量を過したので、最う奥座敷で、ごろりと横の、其のまゝ夢になりさうな様子だつた折から、細君も唯其れだけにして、

「何うぞ御緩り。」

と洋燈を差置き、ちら／＼と――足袋ぢやない、爪先が白く、絨氈の上を斜めに切つて扉を出た。

少時して、女中が入つて来て、

「此處へ、冷水をお置き申します。」

人夫召  
聲を聞いたばかり。晝間歩行き廻つた疲勞と、四五杯の麥酒の酔に、小松原は最う現々で、何處へ水差を置いたやら、其は見ず。何時又女中が出て去つたか、其さへ知らず。唯洋燈の心を細

めた事は、一緊胸を緊めたほど、顔の上へ暗さが乗懸つたので心着くと、頓て、すう／＼汐が退く鹽梅に、灯が小さく遠くなり、遙に見え、何だか自分が寝た診察臺の、枕の下へ滅入込んで、ずつと谷底の古御堂の狐格子の奥深く點れたものの如く、思はれた……か思つたのか、其とも夢路を辿る峠から覗く景色か、つい他愛がなくなる。

處を、前に言つた、(奥さん)——で目が覺めたが、眞暗、洋燈は爾時消えて居た。枕を擡げて、

「唯今！」

威勢よく、(開けます)とやらうとする、其の扉の見當が附かぬから、臥床に片手支いたなり、熟と室の内を眺しながら、耳を傾けると、其切り物の氣勢がせぬ。

「はてな、」

自分で、奥さん、と言つたのに、驚いて覺めたには覺めたが、誰に呼ばれたのか、能くは分らぬ。尤も、小松原とも立二とも、我が姓、我が名を呼ばれたのでもなければ、聞馴れた聲で、貴郎、と言はれた次第でもない。

とは言へ、呼んだのは確に婦で……然も目のぼつちりした——  
「待て、待て、」

當人寢惚けて居る癖に、他の目色の穿鑿處か。けれども、其の……ばつちりと瞳の清しい、色の白い、髪濃い、で、何に結つたか前髪のふつくりとある、俯向き加減の、就中、歴然と目に残るのは、すつと鼻筋の通つた……

此處まで來ると、此の家の細君の顔ではない。其は最つと愛嬌があつて、此は其よりも品が優る。

勿論、女中などに似やうはないと、夢か、現か、朦朧と認めた顔の容が、何うやら恚う、目前に、矢張り其の俯向き加減に、ちらつく。従つて、今聲を出した、奥さんは誰だか知れるか。

其上に、夢中で感覺した意味は、誰か知らず、其の女性が、

「開けて下さい。」

と言つたのに應じて、唯今、と直ぐに答へたのであるが、扉の事だらう？ 其の外廊下に、何の沙汰も聞えないは、待て、其處ではなささう。

「他に開ける處と言つては、窓だが、」

扱は正しく魔された？ 此の夜更けに、男が一人寝た部屋を、庭から覗込んで、窓を開けて、と言ふ婦はあるまい。

いや、無いとも限らん——有れば急病人の許から駈着けて、門を敲いても、内で寝入込んで、

車夫をはじめ、玄關でも起きない處から、等閑な田舎の構、何處か垣の隙間から自由に入つて来て、直ぐに脊伸で覗いた奴。

かとも思つたが、何方を視めても、何も居らず、何處に窓らしい薄明りも射さなければ、一間開放した筈の、帷の戦ぎも見えぬ。

カタリとも言はず……剩へ西洋室の、犇とあり、寂として、芥と、腦へ染る、強い、濕つぽい、重くるしい薬の匂が、形ある箔のやうに颯と来て、時にヒイヤリと寢臺を包む。

三

渠は、今更ながら、しとど冷汗になつたのを知つた。

窓を開けたまゝで寝ると、夜氣に襲はれ、胸苦しいは間々ある習で。何うかすると、青い顔が幾つも重つて、隙間から差覗いて、ベソを掻いたり、ニタ／＼と笑つたり、キキと鳴聲を立てたり、中には鼠も居る。——希代なのは、其の隙間形に、怪しい顔が、細くもなれば、長くもなり、菱形にも圓くもなる。夕顔に目鼻が着いたり、摺木に足が生えたり、破障子が口を開けたり、時ならぬ月が出でなどするが、例へば雪の一片毎に不思議の形があるやうなもので、いづれも睡眠に世を隔つ、夜の形の断片らしい。

すると、今見た女の顔は……何に憑いて露れたらう。

「何だか美しかつた。」

と思出して、今度は悚然とした。

「而して、奥さんだ？……奥さんとは何處の奥さんだ。」

確に此家の細君の顔ではない、彼でなし、其でもなし、目がぱつちりして、色が白く、前髪がふつくりと、鼻筋通り……

と胸の裡で繰返して、其の目と、髪と、色艶と、一つ一つ絡まり掛けると……覺がある！

トンと寢臺に音を立てて、小松原は眞暗な中に、むつくと起きた。

「馬鹿な。」

と思はず呟いた。

「何、そんな奴があるものか。」

否、否、若し其の人だとすれば——三年前に別れてから、片時も想はずには居らぬ、寢た間も忘れはしないのであるから、幻も、其の倂は當然で、却つて不審くも凄くもない筈。

「開けて下さい。」

と云つた……然矣々々、扉を開けるつもりで、目を覺したに違ひはない。

且つ現から我に返つた、咄嗟には、内の細君で……返事をしたが、恚の通り、續いて些とも音沙汰のないのを思へ。對手は何でも、小松原自分の目には、皆胸にある、其の人の倅に見えるのかも知れぬ。

「何處を、何を開けて、と云つたんだらう。」

一體——と渠は又熟と考へた。

既に夢だと承知しながら、尙何か現在に、事を連絡させようとして居る内が、其の實、現だつたものらしいが。

窓は開いて居るし、扉の外は音信は絶えたり、外に開けるものは、卓子の抽斗か、水差の蓋……否、有るぞ、有るぞ、棚の上に瓶がある。瓶も……四つ五つ並んで居たらう。内の醫師が手にかけたと云ふ、嬰兒の酒精に浸けたのが、茶色に紫がかつて、黄色い膚に褐斑の汚點が着いて、ぐたりと成つて、狗の兒か鼠の兒か一寸は分らぬ、天窗のひしやげた、鼻と口と一所に突き出た不状なのが、前のめりにぶくりと浮いて、膝を抱いて、呀！と一つ聲を掛けると、でんぐりかへしを打ちさうな、彼は大小もあつたけれども、孰が七月兒か、六月兒か、晝間見た時、醫師の説明を能くは心にも留めて聞かなかつたが、海鼠のやうな、又其の岩のふやけたやうな、厭な膚合、ぶつりと切つた胞衣のあとの大きな疣に似たのさへ、今見る如く目に残る、然も三個。

と考へ出すと、南無三寶、最一つの瓶には蝮が居たぞ、ぐる／＼と蟻局を巻いた、胴腹が白くよぢれて、ぶるツと力を入れたやうに横筋の青隈が凹んで、逆鱗の立つたが、瓶の口へ、ト達く處に、鎌首を擡げた一件、封じ目を突出る勢

「一口何うかね。」  
と串戯に瓶の底を傾けて、一つ醫師が振つた時、底の沈澱がむら／＼と立つて、煙のやうに蛇身を捲いた哩。

場所が場所で、扱ふ人が扱ふ人だけ、其の時は今思ふほどでもなかつたが、扱て恚う枕許にすらりと並べて、穩かな夢の結ばれさうな連中は、御一方もお在なさらぬ。

あゝ、悪い處へ寝たぞ。

中にも件の長物などは、恚る夜更に、兎もすると、人の眠を驚かして、

「開けて下さい。」

を遣りかねまい、と獨りで拵へて、獨りで苦笑した。

四

寢覺の思ひの取留め無さも、酒精浸の蝮が、瓶の口をば開けて給へ、と夢枕に立つた、とまで

になる、と結句可笑く、幻に見た婦の顔が、寝た間も忘れぬ其の人を、平時の通り現に見た、と合點が行くと、孰れ一先づ安心が出来たので、其のま、仰向けに、どたりと寝た。

急に起上つたのであるけれども、左まで慌しくもなかつたらしく、枕は思つた處に丁とある。此處で、枕の位置が極まると、寢臺の向も、室の工合も、方角が定まつたので、何の道暗がりの中を、盲目覗きではあるが、扉、窓、卓子、戸棚の在所などが確乎知れる。

上に、其の六月目、七月目の腹籠、蝮が据置かれた硝子戸棚は、蒼筋の勝つたのと、赤い線の多いのと、二枚解剖の圖を掲げて、隙間一面、晃々と醫療器械の入れてあるのが丁度搔卷の裾の所、二間の壁に押着けて、直ぐ扉の横手に當る。其處には明取りも何にもないから、仄な星明も迎れないが、晝の見覺は違ふまい。同じ戸棚が左右に二個、別に眞中にすつと高いのを挟んで、其には眞白な切が懸つて居た、と寝亂れた浴衣の、胸越に伺ふ……と白い。茫と天井から一幅落ちたが、四邊が暗くて、其の何にも分らぬ……兩方の棚に、犇々と並べた明晃々たる器械のありとも見えず、寂となつて隠れた處は、雪に埋もれた關らしく、霜夜の刑場とも思はれる。

旅行の袂に携へた、誰かの句集の中にもありさうなのを、偶然目に浮べたは可かつたが、忽ち、小松原は胸を打つた。

本尊！ 本尊！ 夢を驚かした本尊は、やあ〜其の中に鎮座します——然も婦の骸骨で、

其の眞白な蔽の中に、襟脚を釣るやうにして、ぶら下げた、足をすつと垂れて、がつくりと俯向いたのが、腰、肩、蒼白く繋がつて、是ばかり冷たさうに、夕陽を受けた庭の紫陽花の影を浴びて、怪しい色を染めたのを見た。

最う此の上には、仇、情、貴下、私も無ささうな形ながら、婦と云ふだけ、骨の細りと、胸の邊も慎ましやかに、顔を搔込んだ姿を、仔細らしく視めたが、然して心した、と云ふでもなかつたに、餘程目に染みたまのらしく、晩飯の折から、何うかした拍子だつた、一風颯と——田舎は是が馳走と云ふ、青田の風が簾を吹いて、水の薫が芬とした時、——膳の上の冷奴豆腐の鉢の中へ、其の骨の何の邊かが、薄りと浮いて出た。

其から前は、……寝しなに細君が申戯に、

「夜中に出掛けますかも知れませんが、婦だつて言ひますから。」

と笑つたが、話が陽氣で、別に氣にもならず寝た。處を、今の其の婦が来て……

「ほい、蝮より、此の方が開けてくれに縁がある。」

いや、南無阿彌陀佛、縁なんぞないのが可い、と枕を横に目を外らすと、此の切が又白い。襟許の浴衣が白い。同一色なのが、何となく、戸棚の蔽に、ふはりと中たるみがしつゝも續いて、峠の雪路のやうに、天井裏まで見上げさせる。



小松原は又肩のあたりに、冷い汗を垂々と流したが、大分夜も更けた様子で、冷々と、聲もない、音もせぬ風が、そよりと来ては咽喉を掠める。

ごほん、乾咳を咳いて、掻卷の襟を引張ると、暗がりの中に、其の袖が一波打つて煽るに連れて、白い蔽に、襷が入つて、何だか、呼吸をするやうに、ぶる／＼と動き出す。

目を塞いでも、こんな時は詮がないから、一層又起直つて、確と、其の蔽が見えるのでもなく、勿論揺れるのでもない、臆病眼が震へるのを、見定めようと思つたが、頭が重いのに、瞼がだるく、耳が鳴る。手足もぐつたりで、其の元氣が出ぬ。

まよ、寝つ了へ！　ぐつと引被ると、開いたのか、塞いだのか、分別が着かぬほど、見えるものは矢張見えて、お刺に、其の白いものが、段々擴がつて、前へ出て、押立つて、まざ／＼と屏風を立てたやうに寄つて来る。

五

さあ、其の、ふは／＼と縦に動く白いものが、次第低に、耐力なく根を抜いて、すつと掻卷の上へ倒れたらしい心地がすると、犇々と重量が掛つて、うむ、と壓された同然に、息苦しく成つたので、急いで、匆退けに懸ると、胸に抱合はせて居る手が直ぐは解けず、緊着けられて居るやうな。

うな。

腕を引つこ抜く勢で、挽いて、掻卷をばつと剥ぐ、と戸棚の蔽は、舊の處に茫乎と下つて、何事も別條はない。が、風が又何處からか吹いて来て、濕っぽい、蒼臭い、汗蒸れた匂が、藥の香に交つて、むら／＼と其處等へ泳ぎ出す。

疲れ切つた脳の中に、其の臭氣ばかりが一つ一つ別々に描かれて、あゝ、濕っぽいのは腹籠りで、蒼臭いのは蝮の骸、汗蒸れたのは自分であらう。

其臭氣を見附けたさうに、投出して居る我が手をはじめ、きよろ／＼と胸す内に、何となくほんのりと、誰だか、婦の、冷い黒髪の香がしはじめめる。

香のする方を、熟と見ると、唯矢張り白い……が、思ひなしか、其の中に、何うやら薄墨で影がさして、亂しもやらず、ふつくり髪が纏つて、濃い前髪の形らしく見分がつく、と下から捲上がる如く、白い切が、くる／＼と小さくなり、左右から、きり／＼と緊つて、細くなつて、其の前髪を富士形に分けるほど、鼻筋がすつと通る。

「奥さん！」

と思はず言つて、小松原は又目を覺した。

トも未だ心着かないで、

「今、開けます。」

と言つて、愕然として我に返つた。

「又、夢か。」

今度は目が覺めつゝも、未だ、其の傍が室の中に朦朧として残つたが、吻と吐く呼吸にでも吹遣られるやうに、棚の隅へ、すつと引いて、はつと留まつて、衝と失くなる。

後が忽ち眞暗になるのが、白の一重芥子がばらりと散つて、一片葉の上に留りながら、ほろほろと落ちる風情。

「こりや、何うかして居るな。」

現と幻との見境さへ附きかねた。其の上、寒氣はする、頭は重し、いや、耐らぬほど體が怠い。夜が明けたら、主人の一診を煩はさうまでは心着いたが、先刻より、今は起直る力がない。

特に我慢のならぬのは、呼吸苦しいので、はあく〜耳に響いて、氣の怯けるほど心臓の鼓動が烈しくなつた。

手を伸ばすか、何うにかすれば、水差に水はある筈、と思ひながら、枕を乗出すさへ億劫で、我ながら隨意にならぬ。

丁ど、此の折だつたが、びしょ〜、と水の滴るやうな音がし出した。遠くで蚊の鳴くのかと

も聞えるし、鼠が溢したかとも疑はれて、渴いた時でも飲みたいと思ふやうな、快い水の音信ではない。

陰氣な、鈍い、濁つた——厭果てた五月雨の、宵の内に星が見えて、寢覺に又糠雨の、其の点滴が微びた壘に浸込む時の——心細い、陰氣でうんざりとなる氣勢である。

「水差が漏るのかな……」

龜裂でも入つて居たらう。

「洋燈から滲出すのか……」

可厭な音だ。が其にしては、石油の臭がするでもなし……恚う精神が濛としては、ものの香は分るまい。

斷念める積にしたけれども、其の癖矢張り、頻りに臭ふ。濕つぽい、蒼くさい、汗蒸れたのが跳廻る。

「ソレ又……」

氣にすると、直ぐに、得ならず、時めく、黒髪の薫が颯と來た。

「又夢か。」

何時まで續く、と最うげんなりして、思慮が、ドドドと地の底へ滅入り込む、と今度は、戸棚

の蔽が纏つて、白い顔には成らない替りに、窓の外か、それとも内か、扉の方角ではなしに、何だか一つ、變な物音……沈んだ聲。

六

其の音は——今しがた聞え出した、何かを漏れて、雫の落ちる不快な響が、次第に量を増して、其の大きく成つたもののやうでもあるし、新たに横合から加はつたもののやうでもある。何しろ、同一方角に違ひない。……開けて寝た窓から掛けて、洋燈が其處で消えた卓子の脚を傳つて床に浸出す見當で、段々判然して、ほたりと、耳許で響くかとする又幽になる。幽に成つて外の木の葉を、夜露が傳ふやうに遠ざかる。——が、絶えたり續いたり云ふよりは、出つ入りつ、見えつ隠れつするかに聞えて、浸出すか、零れるか、水か、油か、濡れたものが身繕ひをするらしい。

少時経つと、重さに半ば枕に埋んで、がつくりとした我が頭髪が、其の激……ともつかぬ水分を受けるにや、じとりと濡れて、粘々とするやうに思はれた。最う、手で拂ふ元氣が無いので、ふる／＼と振ると、これは！ 男の天窓にあるべくもないが、カランと、櫛の落ちた音……例のほた／＼零れる水と、頓て又縁が離れて、直ぐに新しい音がはじまり、寢臺の脚から搔卷の

裾へかけて、恚う、一つ持上げては、踏落す……其も、爪先で擦るでなしに、宙を傳ふ裾から出て、踵が摺れ／＼に床へ觸るらしく、小股に歩くほどの間を措いて、しと、しと、しと。

まさか是切に殺されもしまい、と小松原は投に出て、身動きもしないで居れば、次第に寢臺の周圍を廻つて、ぐるりと一周りして枕許を通る、と思ふと、ぐら／＼と頭を取つて仰向けに引落される——はつとすると、最う横手へ退く。

其の内に、窓下の點滴が、益々床へ浸出すさうで、初手は、件の聲音とは、彼是間を隔てたのが、何時の間にか、一所になつて、一條濡れた路が繋つたらしくなると、歩行く方が、びしよびしよ陰気に、濕つぽくなつて來た。

是では目が覺めて見ると、血の足跡が、飛々に残つて居ようも知れぬ。

飛々處か、何として、一面の血か、水であらう、と思はれたのは、間も無くであつた。

しと／＼云ふ尋常らしい聲音が、今はびちや／＼と聞えて來た。水なら踵まで浴らう深さ、而して小刻に疾くなつたが、水田へ踏込んで渡るのを畔から聞く位の響き。

と卓子の上で、ざつと鳴出す。窓から、どんどと流込む。——扱も扱も夥多しい水らしいが、

瀧の勢もなく、瀬の力があるでもない。落ちて逆捲かず、走つても逆らぬ。假へば用水が畔へ開き、田が一面の湖となる、雨上りの廣田圃を見るやうな、鮎と鱒の洪水めいたが、其のじめじ

めとして、陰氣な、濕っぽい、ぬる／＼した、不気味さは、大河の出水の凄みに増る。  
そんな水が何處へ出た、と言はれたら、此の部屋一面、と答へようと思ひながら、小松原は但し身動きも出来ないのである。

頓て短夜が……嬉しや、最う明けさうに、窓から白濁りの色が注して、どんよりと光つて、卓子の上へ翻つた、と見ると、蹙音が、激しくなつて、ぱた／＼ぱた、と其處等を駈けたが、風か、水か、ざつと鳴る時、婦の悲鳴が、

「あッ」

と云ふ……

「奥さん。」

と勿起さる、と、起きた正面に、白い姿が、髭とある！

「あ、夢か。」

と氣が着いたが、まぎ／＼垂れた其の切が、ふつくりした乳にも見えるし、すつとした手にも見える。其邊が、と思ふと、圓い肩になり、なぞへに白く胸になつて、くびつて腰になつて、すらりと裾のやうになる。

あの、雪に、絲一條も懸らぬか、と疑へば、非ず、ひた／＼と身に着いた霞のやうな衣をぞ絡

ふ。

唯見ると、乳の邊、胸へ掛けて、無慚や、颯と赤くなつて、垂々と血に染まつた。

七

枕に響いた點滴の音も、今さら此の胸からか、と悚然とするまで、其の血が、ほた／＼と落ち、汐が引くばかりに、見る間に、びし／＼と肉が萎む、と手と足に蒼味が注して、腰、肩、胸の隈々に、未だ其の白い膚が消々に、薄らと雪を被いで残りながら、細々と枝を組んで、肋骨が透いて見えた。

「あ、是だな。」

と合點が行く。

途端に、がた／＼と戸棚が鳴つた。

自分で正氣づいたと、心が確になつた時だけ、現の婦の蹙音より、此のがた／＼に最う堪らず、矢庭に寢臺からする／＼と落ちた。

小松原は暗がりを探りながら、鋭くなつた神経に、先刻から電燈で照らしたほど、室内の見當は能く着けて居たので、猶豫ひもせず、ツシンと身體ごと扉の引手に持つて行くと、固より錠

を下ろしたのではない。

ドンと開く。

扉に身體が附着いて、發奮んで出たが、跨いだ足が、然う苦なしには大穴から離れうとはせぬので、地獄から娑婆へ踏掛けた體で、獨で跪いて、どたんばたん、扉の面と、呀、組んだりける。此の物音に、驚破と奥で起直つて、早や身構をしたと見える——慌しい耳にも、尙がつたりと戸棚の前の怪しげな響が又聞えたのに、堪りかねて主人を呼ぶと——向うへ、突當りの縁が折曲つた處に、ぼうと射して居た灯が動いて、直ぐに臺附の洋燈を手にした、浴衣の胸のはだかつた、扱帯のする／＼とある醫師が、右を曲つて、正面へ。

開放した障子を洩れて、だらりと裾を引いた萌黃の蚊帳を横にして、廊下の八分目ぐらゐるな處で、

「便所か。」

と云ふ、髯、口許が明々として、洋燈を翳す。

此の明で、小松原は水浸しになつたほど、汗びつしよりの、我ながら萎垂れた、腰の据らぬ、へと／＼に成つた形を認めたが、醫學士は嘗て一年志願兵でもあつたから、武備も且つある、こんな時の頼母しさ。顔を見ると、蘇生つた心地で、

「やあ。」と掛けた聲が勢なく中途で掠れて、

「夜更けに恐縮。」

と漸と根こそぎに室を離れた。……扉を後さまに突放せば、此處が當館の關門、來診者の出入

口で、建附に氣を注いであるさうで、匆返つて、ズーンと閉る。

と突出された體に悄乎立つて、

「何うも、何だ、夜夜中。」

醫師は亭主關白と云つた足取、深更に及んでも、夜中でも、其段は一切頓着なく、どし／＼と廊下を踏んで、やがて對向になる時、傍の玄關の壁越に凄じい鼻を聞いて、

「壯だ、壯だ。」

と莞爾する。

顔色が、ぐつすり寝込んだ處を、今ので呼覺されて、眠いに迷惑らしい様子もないので、

「何うも氣の毒です。酷い目に逢つてね。」

と聊か落着く。

醫師は立はだかりつゝ、

「何うした、蚊軍の襲來かい。」

なかく、こんな事を解釋する餘裕はなくつて、

「え、」

と如何にも氣が利かない。

「蚊に城を破られたかよ。」

「其處どころか。」

相手の餘り暢氣なのが、此の際怨めしく思はれた。

「此の中は大變だ。」

「大變だ？」

「何か来たんだ。」

「何、入つて来たか、」

と洋燈を上げて、扉の上を、ぐいと仰ぐ。

「がた／＼遣つてる。」

小松原は、すうつと醫師に身を寄せる、と目を返して、今度は其の體をじろ／＼視めて、

「震へてるね、君は。」

八

「何うだい、心持は。最う爽快したらう。」

主人の醫師は、奥座敷の蚊帳の中に、胡坐して、枕許の煙草盆を引寄せた。

「怒う云ふ時は、醫師の友達は頼母しからう。些と處方の療治だがね、同じ葡萄酒でも藥局で

喇叭を極めると、何となく難有味が違つて、自ら精神が爽快になります。しかし怯えたつけ、は

はは。」

と髯を捻つて、牙々しい。

蚊がぶうんと唸つて、齒切も何處かです。灯の暗い、鬱陶しかるべき蚊帳の内も、主人が是

であるから、敢て蒸暑くもないのであつた。

小松原は、裾を細う、横に手枕で氣を休めて居た。

「怯えた處か、一時は其のまゝになるかと思つた。起きるには起きられず、遁げるには遁げられ

ず、寝返りさへ容易ぢやない、實際息が留まりさうだつたものね。」

咽喉を斜に手を入れて、瘦せた胸を壓へながら、

「見給へ、いまだに此の動悸を、」

「色は白くつても、野郎の癩を壓へたつてはじまらない。は、は、いや、然し弱い男だ。」

「ふ、ふ、」  
と力抜けた聲で笑つて、

「奥さんは？」と俯向けに額を壓へる。

「御心配に及びません。君が侵入に及んだために他室へ遠慮したと云ふんぢやない。小兒の奴が又生意氣に、私に些と飲過すと、酒臭い、と云つて一つ蚊帳を嫌ひます。いや、大に臺所の内諭なきにしもあらずだらうが。」

其處で、先刻、君と飲倒れたまゝ、遠島申附かつた譯だ。——空鐵砲の機會もなしに、五斗兵衛むつくと起きて、思入があつたがね。其切目が冴えて寝られないで、聊か蚊帳の廣さかなの感あつた處です。

君も一寸は寝られまい、朝まで此處で話し給へ。」

折から陽氣にと云ふ積りか、醫師の言は、大に諧謔の調を帯びたが、小松原は唯生眞面目で、

「何うか然うしてくれ給へ。此處を追出されたればと云つて、二度と彼處へ行つて寝る氣はしない。どうも驚いた。」

「はじめから奇を好むからです。彼處へ行つて寝るなんざ、何の道好くない。いづれ病人でなく

つては乗つかからない寢臺だもの。尤も、私にや大切な商賣道具だがね。

しかし其にしても餘な怯え方だ。夢を見て遁出すなんざ、苟も男子たるべきものが……と云つて罵倒するわけぢやないが、些と確乎しないかい。申戯ぢやない、病氣になる。

そんなのが嵩じると、何も餅屋がつて、此處で病名は申さんがね、起きて居る眞晝間でも目に見えるやうになる。それ、現在目に見えて、其處に居るから、口も利くだらう、聲も懸けようではないか。傍から見ると、直ぐに最うキの字だぜ、恐るべし、恐るべし。

何も、朦朧と露れたつて、歴々と映つたつて、高が婦ぢやないか。婦の姿が見えたんだつて言ふぢやないか。何が、そんなに恐いものか。」

「別に見えたとつて譯ぢやない。何だか寢臺の周圍を歩行いたんだが、然う、どつちにしても婦らしく思はれた——其が直に、息の詰るほど厭な心地だつたんではいけないけども、恚う、じとくして、濕つぱくつて、陰氣で、其處らに餘でも湧出しさうな、泥水の中へ引摺込まれさうな氣がしたんで、骨まで浸透るほど慄然々々するんだ。」

と肩を細うして、背で呼吸をする。

「男らしくもない、そんな事を言つて梅雨期は何うします、まさか蓑笠を着て坐つてやしまい。」  
「うむ、何、其が唯のじとくなら可いけれど、今云ふ泥水の一件だ、轟と來た洪水か何かで、

一思に流されるなら未だしもです——灯の消えた、あの診察處のやうな眞暗な夜、降るともつかず、降らないでもない、糠雨の中に、ぐしやりと水のついた畔道に打坐つて、足の裏を水田のちよろちよろ流に擦ぐられて、裾からじめく濡通つて、それで動くことも出来ないやうな思ひを一度して見給へ。」

と力強く云つて、又小松原は溜息で居る。

九

醫師は徐に、煙草盆を引寄せて、

「それ、其處が苦勞性だと言ふのです。窓を開けたまゝまで寝たから、夜風が入つて濕つばかつたら唯濕つばかつたで可からう。何も眞暗な夜、田圃の中に、ぐしやりと坐つて、足の裏を擦られて、腰から冷通るとまで、こじつけずとも事だ。其氣でお膳に向つた日にや、お汗の湯氣が濛々と立騰ると、是が毒のある霧になる、其處で咽死に死にかねませんな。」

「然う一概に言つてくれる事はない。何うせ現在お目に懸けた臆病です。其を辯解するんぢやないが、田圃だの、水浸しだの、と誇大に妄想した譯ではありません。

實際、そんな目に逢つて、一生忘れられん思をした事があるからだよ。いや、考へても身の毛

が彌立つ。」

フイと起返つて、蚊帳の中を覗いたが、妙に、此の男にばかり麻目が蒼い。

醫師は落着いて、煙を吹かして、

「何處で野宿をした時だ、今度の旅でか。」

「うゝむ、」

と深く頭を振つて、

「何時かの時さ、あの一件の……」

と言懸けて、頬のこけた横顔になつて打背いた。——小松原の肩のあたりから片面の耳朶かけて、天井の暗さが倒に襲つたのを、熟と見ながら、是が或婦人と心中しようとした男だと領いた。當時其の風説は、友達の間にも誰も知らぬものはなかつたが、醫學士は、折から處を隔てて居たので、其の場合何事にも携はらなんだ。最う三年か四年かと、指を折るほど前に、七十五日も通越したから、更めて思出すほどでもなし、おいそれと言に従いて、極りの悪い思をさせるでもなからう。で、一向無頓着に、

「何だい、何時かの一件とは？」

「面目次第も無い件さ。三年前だ、矢張此の土地で、鐵道往生を爲損なつた、其の時なんです。」



「あゝ、そんな事があつたつてな、危いぢやないか。」  
と云ふ内に自から眞心が籠つて、

「一思ひに好男子、粉にする處だつて。勿論、私が恚うして御近所に陣取つて居れば、胴切にされたつて承合助かる。洒落に一寸轢かれて見るなんぞも異だがね、一人の時は危険だよ。」

故と話に、一人なる語を交へて、小松原が慚愧の念を打消さうとするつもりだつた。  
處が案外！。此の情に、太く動かされた色が見えたが、面を正しう向直つた。

「何とも——感謝する。古疵の惱を覚えさせまい、と然うやつて知らん顔をしてくれるのは眞に嬉しい、難有いが……それでは怨だ。」

ねえ。

あれほどの騒ぎだもの。特に自惚らしいが、私の事を忘れずに居てくれる君が、然も此の土地へ来て居て、知らないと言ふ法はない。承知の上で、何にも知らん振をしてくれるのは、矢張りあの時の事を、世間並に、私が餘處の夫人を誘つて、心中を仕損つた、と然う思つて居るからです。

勝手な事を言ふものには、言はして置いて構はんけれども、君のやうな人に對しては、何とも以て恥入るんだ。」

と俯向いて腕を拱き、

「其の君の情ある心で、どうか譯を聞いて欲しい。くだい事は言はん。何しろ、少なくとも君だけには言譯をする責任があると思ふ。」

醫師は潔く、

「承はらう。今更其の條道を話して聞かせる……惚氣なら受賃を出してからにして貰はうし、愚癡なら男らしくもない、止したまへ——だが、私たちが誤解をして居るんなら、大に辯じて聞かせてくれ、今まで疑つて居たから私にも責任がある。」

「然う、きつぱりとなられては、何うも又言出し憎い。」

「可いぢやないか、其の容體を聞かせ給へ、醫師には祕密を打明けて可いもんだ。」

「……………」

言淀んで見えたので、此處へ來い、と構を崩して、透を見せた頼杖し、ごろりと横になつて、

小松原の顔を覗込みつゝ、

「で、何か、其晩、田圃に坐つたのか。」

と軽く扱つて誘を入れた。

「まあ、坐つたんだ。」

小松原は苦笑して頬を撫でたが、寂しさうに打傾き、

「土下坐をしたと言ふわけでもないが、矢張坐つて居たんだよ。」

「又何うしてだい。」

と醫師は寛いだ身の動作で、搔卷の上へ足を投げて、綴糸を手で引張る。

「其がね、」

と熱と灰吹を見詰めてから、靜かに卷莖を突込みながら、

「はじめは何でもない事だつた。——何の氣なしに、あの人を、其處等へ散歩に誘つたんです。」

「あの人ツて？」

「……………」

「は、あ、對手の貴婦人だね。」

「そんな事を言はないで、」

と吸口を最つと突込む。

「可いぢやないか、何も貴婦人と云つたつて、直ぐに浮氣だ、と云ふ意味ではないから。」

「何、貴婦人に違ひはないが、其の對手が悪い。」

「可し、可し、黙つて聞かう。然う又一々氣にしないでお話しなさい。其處で。」

「御存じの通り、あの前から、私は體が悪くつて二年越此の田舎へ来て居たんだ。あの人、私が世話になつて居る叔父が媒酌人で結婚をしたんだらう。大して懇意ではないが見知越で居ただつた。」

丁ど戦争のあつた年でね。

主人は戦地へ行つて留守中。其の時分、三才だつた健坊と云ふのが、梅雨あけ頃から咳が出て、鹽梅が悪いんで、大した容體でもないが、海岸へ轉地が可い、場所は、と云つて此地を、其の主

治醫が指定したと云ふもんです。小兒の病氣とは云ひながら、旅館と來ると湯治らしく、時節柄人目に立つ。新に別莊を一軒借りるのも億劫だし、部屋借が出す入らず、然るべき空座敷があるまいか、と私が此地に居た處から、叔父へ相談があつたと云ふので、世話をするやうに言つて來た。

其方此方聞合せると、私が借りて居た家から、田圃の方へ一町ばかり行つた處に、村ぢや古店で商も大きく遣つて居る、家主の人柄も可し、入口が別に附いて、一寸式臺もあつて、座敷が二

間、此の頃に普請をしたと云ふ湯殿も新しいし、壘も入替へたのがある。

直ぐに極めて、其處へ世話をして、東京から来る時も、私が停車場へ迎ひに行つて、案内をしたんだつが、七月盆過ぎから来て居て、九月の末の事だつたよ。

五日ばかり降續いて、めつきり寂しくなる。朝晩は、單衣に羽織を被て、些と未だぞく／＼して、悪い陽氣だとばかり、言合つて閉籠つて居た處……其日は朝から雨が上つて、晝頃には雲切がして、何うやら晴れさうな空模様。でもまだ、蒼空は見えなかつたが、多日ぶり、出歩行くに傘は要らない。

小兒を歩行かせるには路が悪いから、見得張らない人だ、又おんぶをして、宿の植込の中から、斜つかひに私の前二階を覗いて、背中の小兒に言はせるやうに、前髪を横向けにして、

(お出掛けなさいませんか。)  
と濱を誘ひに見えるだらう。

(小松……君。)

と原抜きにして、高慢に仇氣なく高聲で呼ぶ、小兒の聲が、最う其の邊から聞えさうだ、と思つたが、出て来ない。其の内、湯に入ると、薄りと湯槽の縁へ西日がさす。覗くと、空の眞白な底に、高くから蒼空

が團扇をどけたやうな顔を見せて、からりと晴れさうに思ふと、團の外を、

(水が出たぞ。)

(田圃一面。)

と饒舌つて通つた。

是を聞くと、何か面白い興行でもはじまつたやうな氣がして、勇んで、そはく／＼して、早く行つて見たくつて、碌に手拭も絞らないで、ふらんねるを引かけたなり、帽子も被らずに、下駄を突掛けて出たんだかね。――

十一

「汎水だ、と云つたつて、此の通り、川らしい川のない處だから、駈出して見物に行くほどの事もなささうなもんだけれど、私は何だ。……

菫、茅花の時分から、苗代、青田、豆の花、蜻蛉、螢、何でも田圃が好で、殊に二百十日前後は、稲穂の波に、案山子の船頭。芋蕒の靡く様子から、枝豆の實る處、些と稗蒔染みた考へで、深山大澤でない處は卑怯だけれど、鯨より小鮎です、白鷺、鶉、鶉、鶉、皆な我々と知己のやうで、閑古鳥よりは可憐い。

山、海、湖などが若し天然の庭だったたら、田圃は其の小座敷だらう。が、何しろ好きでね、  
：其の所爲か、私には妙な事がある。

何時頃からは能く分らんが、床に入つて、可心持に、すつと足を伸す、背が浮いて、他愛なく  
く怒う、其の華胥の國とか云ふ、其處へだ——引入られさうになると、何の樹か知らないが、  
萌黄色の葉の茂つたのが、上へか、つて、其の樺色の根を静に洗ふ。藍がかつた水の流が、緩く  
畝つて、前後の霞んだ處が、枕からかけて、睫の上へ、自分と何かの境目へ露れる。……

ト其の樹の下に、箒か何か手に持つて、まあ、膝ぐらゐるな處まで、其の水へ入つて、そつと、  
目高か鮒か、掬つてる小兒がある。其奴が自分で。——あ、面白さうだと思ふと、我ながら、  
引き入れられて、身節がなえて、嬉しくなる。其の内に波立ちもしないで、水の色が濃くなつて、  
小濁りに濁ると思ふと、すつと深さが増して、ふうはり草の生えた土手へ溢るんだがね、其の土  
手が、城趾の濠の石垣らしくも見えれば、田の畔のやうでもあるし、沼か、池の一角のやうでも  
ある。其の邊は判然しないが、何でも、すつと陽炎が絡る形に、其の水の増す内が、何とも言へ  
ない可い心地で、自分の背中か、其の小兒の脚か、其に連れて雲を踏むらしく糶上ると、土手  
上で、——此處が可訝しい——足の白い、綺麗な褌をしつとりと、水とすれく内端に搔込んで、  
一人美人が行む、と其と自分が並ぶんで……此處まで來ると最う恍惚……

すや／＼寝ます。

枕に就いて、此の見える時は、實際子守唄で賺かされるやうに寝られる。又眞個心持の可い時  
でないと思えんから、見えない時でも見るやうに、見るやうにと心掛ける——其でも、散らかつ  
て、絡まらないで、更に目に宿らん事が多い。然う云ふ時は、屹と寝そびれて悩むんだ。

其處で、大好きな田圃の中でも、選分けて、あの、ちよろ／＼川が嬉しい。雨上りに些と水が  
殖えて、畔へか、つた處が無類で。

取留めのない事だが、我慢して聞き給へ。——本人にも一向摺へ處はない。何時も見る景色だ  
けれども、朝だか、晩方だか、薄曇つた日中だか、それさへ曖昧で、唯見える。

さあ、模様が詠向きと成つたらう——處で、一番近い田圃へ出るには、是非、あの人が借りて  
居た、其の商家の前を通るんだつたよ。

店をはづれて、ひよろ／＼とした柳で仕切つた、其の門を見ると、小兒が遊んで居たらしく、  
めんこが四五枚、散に靴脱ぎのた、きの上へ散つて、喇叭が一ツ、式臺に横飛び。……で、投出  
して駈出したか、格子戸が開放し、框の障子も半分開いて、奥の長火鉢の端が見えた。

其の格子戸の潜の上へ手を掛けて、

(健ちゃん)

と呼んで見たが、黙つて居た。  
(居ないの。お留守)

と遣ると、……其處も矢張開いたまゝの、障子の陰の、湯殿へ通ふ向うの廊下へ、しとくと  
蹙音がして、でも、默然で、一寸顔だけ見せて覗いたが、直ぐに莞爾して、縁側を奥座敷へ上つ  
た姿は……

帯なし、搔取り氣味に襟を合せて、胸で引抱へた手に、濡手拭を提げて居た。二間を仕切つた  
敷居際に来て、又莞爾すると、……

「謹聴」

と醫學士が唐突に云つた。

「眞面目だよ、眞面目だよ。」

十一

「湯上りの、ぱつと白い、派手な、品の可い顔を、ほんのり薄紅の注した美しい耳許の見えるま  
で、人可懐く斜めにして、

(失禮、今ね、お返事の出来ない處だつたの……裸體美人)

と云つて花やかな笑顔になる。如何にも伸々と寛容して、申戲の一つも言へさうな、何の隔て  
もない様子だつたが、私は何だか、悪い處へ來合せでもしたやうに、急込んで、

(田圃へ行つて見ませんか)

と何のあしらひもなく装附けた。

(は、参りませう)

と頷いて、臺所の方を振り返りながら、

(一寸、御免なさいよ)

支度を、と斷るまでもなく、平常着のまゝで出は出たが、——其の時、横向きになつて、壁に  
向ふと、手を離した。裙が落ちて、畳に颯と捌けると、薄色の壁に美しく濡蔦が捌んで繪模様、  
水の垂りさうな濡毛を、くつきりと腋で劃つて、透通るやうに櫛を入れる。丁ど其處の柱に懸け  
て、如何な姿見が一面あつた——勿論、東京から御持参の品ぢやない。是と、床の間の怪しい山  
水は、家主のお愛想なんです——あの人が又旅へ姿見を持つて出るやうな心掛けなら、何に、こ  
んな處で、平氣でお化粧をする事もなからう。

熟と見ても居られますまい。此の際、何處へ持つて行かうか、と背ける目を掠めて、月の中を  
雪が散つた……姿見に映つた胸で、……膚の白い人だつけ。

直ぐに其は消えたけれど、今の其の棲はつれの色合は、何うやら水際に足を白く、すらりと立つた姿に見えたが……

あゝ、其の晩方、幻のやうな形で、二人して、水の上に立つやうになつたんだ。

何に誘はれて出たんだか、——到頭あんな酷い目に逢ふ原因だつたがね。別に怪しいものぢやない、自分が時々見る美しい、嬉しい夢、——否、夢ぢやない、我が心に、誘出されたものかと思ふ。」

小松原は、現のやうに目を睜つて、今向直つて氣を入れた、醫師の顔を瞻りながら、  
「又愚痴だ、と言ふだらうが、後で考へれば、私は今までの経験に因ると、何時でも、湯の中で  
フィと氣が立つて、何だか頻りにそはつて、よくも洗はないで飛出した時に限つて、餘りめで  
たい事がない。一度も小兒の時だつた、矢張然う云ふ折に大怪我をしたのを覚えて居る。」

其にね、そんな風で停車場へ迎ひに行つて、連れて来て、家も案内する、近所で間に合せの買  
物まで、一所に歩いて、臺所の俎、摺鉢の恰好まで心得てるやうな關係に成つて居たから、  
夏の中も随分毎日のやうに連立つて海岸へ行つたんで——又小兒のために、其が何よりの目的な  
んでね。  
来たてには、手荷物の始末、掃除の手傳ひかたく、馬丁と、小間使と女中と、三人が附いて

来たが、煮炊が間に合ふやうになると、一度、新世帯のお手料理を御馳走になつた切り、其の二  
人は歸つた、年上の女中だけ残つて。其も戦時の遠慮からです。

一人に成つたが、女中には大した用があるんぢやない。何うせ旅の事で、何を極つて、きちや  
うめんになければならんと云ふでもなし、一向氣取らない女主人で、夜も坊ちやんを眞中へ、  
一ツ蚊帳に寝るほどだから、お茶漬をさらくで、ぢやかくと洗つて了へば埒は明く。女中も  
物珍らしく遊びたいから、手廻しよく、留守は板戸の開閉一つで往來の出来る、家主の店へ頼ん  
で、一足後れ馳せにでも、

(坊ちやん)……か何かで、直ぐに追着く。

だから、何時でも女中が一所で、其の健坊と四人連れ立たないのは珍らしい、まあ、殆ど無か  
つたらう。

濱に人影がなくなつて、海松ばかり打上げられる、寂しい秋の晩方なんぞ、誰の發議だつたか、  
小兒が、あの手遊のバケツを振提げると、近所の八百屋へ交渉して、豌豆豆を二三合……お三ど  
んが風呂敷で提げたもんです。磯へ出ると、砂を穿つて小さく圍つて、其處等の燃料で焚附ける。  
バケツへ汐波と云ふ振事があつて、一件ものをうでるんだが、波の上へ薄りと煙が靡くと、富士  
を眞正面に、奥方も些と參る。が、落日に對して眞に氣高い、蓬萊の島にでも居るやうな心持の

する時も、何時も女中が隨いて居たのに。」

十三

「其が、其時に限つて二人切だつた。尤もね、

(健ちゃんは?)ツて聞いたんだ。

(其處等に居ませう。)

と藤色の緒の表附の駒下駄を、紅の潮した爪先に引掛けながら、私が退いた後へ手を掛けて、格子から外を覗いた、門を出てからで可ささうなものを、矢張雨に閉籠つた處を、四五日振りの湯上りで晴々して、戸外へ出るのが嬉しくつて、氣が急いたものらしかつた。

帯も雑とした引掛結びで、

(おや、居ませんか?)

ツて蓮葉に出て、直ぐ垣隣りの百姓屋の背戸を覗込んで、

(健ちゃん、健ちゃんや。)

と呼ぶと、急に、わや〜と四五人小兒の聲がして、向うの梅の樹の蔭で、片手に棒千切を持

つて健坊が顔を出した。田圃へお出で、と云ふと、

(厭だべい。)

で突掛るやうに刎附ける、同じ腕白夥間に大勢馴染が出来たから、新仕込のたんべいか何かで、色も眞黒に成つた。母様が又是を大層喜んで居たもんです。

(ぢや遊んでるか。母様は運動に行つて来るよ。)

(うむ。)

と云ふと、わつと吶喊を上げて、垣根の陰へ隠れたが、直ぐにむら〜と出て、鶏小屋の前で、健ちゃんは素飛ぶ。

(お庇様で、此の頃の悪い陽氣にも障らなくなりましたよ。)

と嬉しさうに見えて、

(何方へ?)と聞く。

(踏切の方へ行つて見ませう。水が出たさうですから。)

百姓家二三軒で最う賑だが、彼處は一方畑だから、じと〜濡れてるばかり。片方に田はあつても線路へ掛けて路が高い。爲に別に水らしい様子も見えん。踏切を越して土手を畦傳ひに海岸の方へ下りると、なぞへに低くなるから、其處へ行けばちよろ〜見えよう——尤も汎水と云ふほどの事は何の道ないのだから、賑を歸る百姓も、私たちのぶら〜歩行を通過す大八車の連中

も、水とも、川とも言ふものはなく、がつたり通る。

路は悪かつた。所々の水溜では、夫人の足がちら／＼映る。眞中は泥濘が甚いので、裾の濡れるのは我慢しても、路傍の草を行かねばならない。

停車場は、それ彼處だからね。柵の中に積んだ石炭が見える、妙に白光に光つて、夜になると蒼く燃えさう。又あの町の空を、山へ一面に眞黒な、其の雲の端が、白く流れ出して、踏切の上を水田の方へ、むら／＼と斑に飛ぶ。が海を抱いた出崎の隅だけ朗かな青空……でも、何だか、もう一拭ひ拭を掛けたいやうに底が澄まず、丁ど海の果と思ふ處に、あるかなし墨を引いた曇が互つて、驚破と云ふとづん／＼押出して、山の雲と一絡めに又空を暗闇にしさうに見える。尤も其なり夜にならうが、其だけに、尙陰氣で、星は出さうにもなし、雨になると戸を閉めるから、遠い灯の影も見られなさうな夕暮だつた。

(最う、お天氣になりませうね。)

(さあ、)

とは云つたが何うも請合ひかねる。……明白に云ふと、此の上降續いちや、秋風は立つて來たし、嘸厭き厭きして、最う引上げやしまいか、と何だか其が寂しかつたよ。

風はなかつた。稻葉がそよりともせぬ。けれども何となく、ざわついて海の波が響くやうなは、

溢れた水が田へ被る其らしかつた。

踏切を渡ると、鴉が一羽……其の飛んだ事つたら——吃驚したほど、頭の上を矢を射るやうに、目を遮つて、低い雲か、山の端か、暗い處へ消えたつけ……早や秋だつたねえ。雨氣が深く包みはしたが、何の峰も姿が薄い。

最う少し隧道の方へ行くと、彼處に、路の眞中に、縦に掛けた一寸した橋がある。棒杭のやうに欄干がついて、——彼を横切つて、山の方から濱田へ流れて出る小川を見ると、是は又案外で、瓦色に濁つたのが、どう／＼と唯一幅だけれども畝を立てて、橋の底へすれ／＼に凄じいほど流れて居る。平時は俯向いて、底を見るのが、立つて、伸上つて見送るほど、嵩増して、薄の葉が瀬を造つて、もう是で充満と云ふやうに、川柳が枝を上げて、あぶ／＼遣つてた。

#### 十四

人夫沼

「此の水が、路端の芋大根の畑を隔てた、線路の下を抜ける處は、物凄しい渦を巻いて、下田圃へ落ち懸る……線路の上には、ばら／＼と人立がして、明い雲の下に、海の方へ後向に、一筆畫の墨繪で突立つ。蓑を脱いで手に提げて鍬を支いた百姓だの、小兒を負つた古女房だの、如何にも水見物をして居るらしい。



見ると、堪らなく嬉しくなつた。

(さあ、恠うしておいでなさい。)

と畦を踏分けて跡をつけては、先へ立つて、畠を切れて、夜は蟲が鳴く土手を上つたが、此處等は未だ棲を取るほどの雫ぢやなかつた。

線路へ出て、ずつと見ると、一面の濱田が何處となく、ゆさ／＼動いて、稲穂の分れ伏した處は幾ヶ所ともなしに細流が蜘蛛手に走る。二三枚空が映つて、田の白いは被つたらしい。松があつて雑樹が一叢、一里塚の跡かとも思はれるのは、妙に低くなつて、沈んで島のやうに見えた、其處等も水が溢れて居よう。

(最う是だけかね。)

甚だ怪しからん次第だつたけれども、稲の上を筏ででも漕いでくれたら、と思つて、傍に居た親仁に聞くと、

(汐が上つたら、まつと溢るべい。)

と、腕組をして熟と視める。

成程、漁師町を繞つたり、別荘の松原を廻つたり、七八筋に分れて、又一ツに成つて海へ灌ぐが、其處へ行くとは是でも幅が二十間ぐらゐる、山も賦になれば、船も歌へる、此の様子では汐が注

さう。

と二人で見て居るうち、夕日のなごりが、出崎の端から燈と雲を射たが、親仁の額も赫となれば、線路も颯と赤く染まる。稲を潜つて隠れた水も、一面に俯立つて紫雲英が咲満ちたやうに明るむ、と心持、天の端を、ちら／＼白帆も行きさうだつた。

又是に浮かれ立つて、線路を田圃へ下りたんだが、やがて、稲の葉が黒くなつて、田が溝染めに暮れかゝると、次第に褪せて行く茜色を、宛然剥ぎたての牛の皮を擡げた上を、爪立つて歩行くやうな厭な心持がするやうに成つた。

丁ど、田圃道を、八分目ほどで、一本橋がある。其を危つかしく、一度渡つて、二度目に又引返してからだつた……最う一跨ぎで、漁師町の裏へ上らうとする處で、思ひがけなく行きついたらうではないか。

「ふん、何うしてだい。」

と醫師は枕を抱く。

小松原は一息ついて、

「何うして？ ツて、見給へ、平時は、手拭を當ても堰留められさうな、田の切目が、薬研形に崩込んで、二ツ三ツぐる／＼と濁水の渦を巻く。此處では稲が藻屑になつて、どう／＼流れる。」

尤も線路から段々下りに低いからね。山の裾で取圍んだ濱田ありたけの溢れ水は、瀬に成つて落ちて来るんだ。但し大した幅ぢやない、一間には足りないだけども、深さは、と云ふ日になると、何と何うです、崩れ口の畦の處に、漁師の子が三人ばかり、素裸で浸つて居たらう。

(何うだ深いか。)

と一ツ當つて見ると、己達は裸で泳がい……聞いただけ野暮だ、と突懸り氣味に、

(深え。)

(二丈の上あるぜ。)

と口を尖がらかしたも道理こそ。此方づれの體は、と見ると、私が尻端折で、下駄を持つた。あの人も又遣附けない棲を取つて、同じく駒下駄をぶら提げて、跣足で、びしょくくと立つた所は、煤拂の臺所へ、手桶が打覆つた鹽梅だらう。」

此の時一所に笑ひ出したが。

「ね、小兒だつて、本場の苦勞人が裸で出張つて居る處へ、膝までも出さないんだ、馬鹿にするないで、以て、一本參つたもんです。

が、まだ威かしでは無いか、と思ふ未練があつた。——處へ、ひよつこり久らく潜つて居たのが、鼻の前へ、ぶつくり浮いた河童小僧。

おやと思ふと、ぶるくと顔をやつて、ふつと一條仰向けに水を噴いた……深いです。何うも此にや逡巡いで、二人で顔を見合せたんだ。」

十五

「其處さへ越せば、漁師町を一廻りして歸れるんで、丁ど可いくらるな散歩の積だつたんだが、其だもの、何うして、渡る處の騒ぎぢやない。

さあ、引返すとなると、線路から此處までの難儀さが思出される。難儀だつて程度問題、覺悟をしての草鞋掛でもあれば格別、何しろ湯あがりのぶらく歩き。

それ、今言つた通り跣足です。成だけ水の上の高い處を、と拾つて畦を傳へば、雨續きで、がばがば崩れる、路を踏めば泥濘で迂る、乾いた處些ともなし。……

(お危なうございませすよ。)

(は、大丈夫。)

と聲を掛けて、漸と辿つたのだつた。また厄介なのは、縦横に幾ヶ處ともなく、畦の切目があつて、一寸薪を倒したほどの足掛が架つて居るが、唯さへ落す時分が、今日の出水で、ざあく／＼瀬になり、どつと溢れる、根を洗つて稻の下から湧立つ勢、飛べる事は飛べるから、先へ飛越え

ては、おもしろ半分、

(お手をお取り申しませうかね。)

と一畦離れて居て云ふと、

(是非、何うぞ。)

なんて笑ひながら、ま、何うにか通つたんだつけ。浅いと思つた水溜へ片足踏込んで、私か前へ下駄を脱いだんで、あの人も、其から跣足、湯上りの足は泥だらけで——あ、氣の毒だと思ふ内に、何處かの流れで、歩行してる内に綺麗に落ちる、其の位皆水です。

で三町ぐらゐる、又引返さなけりやならないんでね、其に段々暗くはなる、足許も悪からう、うんざりしたが、自分は、まあ、何うなり、囁困つた顔をして、と振返る……

と此の時……

薄り路へ被つた水を踏んで、其の濡色へ眞白に映つて、蹴出し棲の搦んだのが、私と並んで立つた姿——そつくり何時見る、座敷の額の畫に覺えのあるやうな有様だつた——はてな、夢か知らん……と恍惚となつた。

ざあく、地の底を吹き荒れる風のやうな水の音。

我に返つて、密と顔を見ると、何大して困つたらしくもなかつた。

(此處は通れません。)

(引返しませう。)

(飛んだ御案内をしてお氣の毒です。)

(否、おもしろうござんすよ。こんな奇い態をして。)

と美しく微笑みながら、

(一層袂を擔ぎませうか。)

此の元氣だから。何うやら水嵩も大分増して、橋の中ほどを、蝦蟇が覗くやうに水が越すが、兩岸の杭に結へつけてあるだけか便りで、渡ると、ぐらぐらした、が、まあ、あの人も無事に越した。でも、私の帯へ背後から片手をかけて。

それから——前を見ると、此方が低い所爲か、ぐるぐる廻りに畝つて流れる、小川の両方に生被さつた、雑樹のざぶざぶ揺れるのが、累累り、所々煽つて、高い所を泥水が走り懸つて、田も畑も山も一色の、最う四邊が朦朧として来た、稻なんぞは、手で觸るぐらゐるの處しか、早や見えぬ。

人夫沼

人は一人も居らず、……今渡つた橋は、魚の腹のやうに仄白く水の上へ出て居るが、其の先の小兒などは、何時の間にか影も消えて居た。

(小松原さん。)

とあの人が、摺寄つて、

(最う一つの路は何うでせうか知ら。)

と云つた、様子には出さんでも、以前の難澁は、同然に困つたらしい。

最う一つと云ふのは、小川が分れて松原の裏を行く、其の川縁を蘆の根を傳ひく、廻りには成るが、踏切の處へ出る……支流で、川は細いが、汐は此の方が餘計に注すから、何うかとは思つたものの、見すく厭な路を繰返すよりは、

(行つて見ませう。)

と歩行き出して、向を代へて、最う構はず、落水の口を二三ヶ所、ざぶく渡つて、一段踏んで上ると、片側が蘆の茂りで。

十六

「透かした前途に、蘆の葉に搦んで、一條白い物がすつと懸つた。——穂か、否々、變に仇光り

のする様子が水らしい、水だと無駄です。(此處に在らつしやい。)

と無駄足をさせまいため、立たせて置いて、暗くならん内早くと急ぐ、跳越え、跳越え、倒れかゝる蘆を薙立てて、近づくに従つて、一面の水だと知れて、落膽した。線路から眺めて水浸の田は、此處だらう。……

が、蘆の丈でも計られる、然まで深くはない、其に汐が上げて居るんだから流れはせん。薄い水溜だ、と試みに遣つて見ると、ほんの踵まで、で、下は草です。結局、泥濘を迂るより樂だ。占めた、と引返しながら見ると、小高いからすつと見渡される、いや夥しい、畦が十文字に組違つた處は残らず瀬になつて水音を立てて居た。

早や暗くなつて、此の田圃に唯一人の筈の、あの人の影が見えない。

濱で手鍋の時なんかは、調子に乗つて、

(お房さん。)

と呼んだりしたが、最う眞になつて、

(夫人！)

と慌てて呼んだ。

(はいい。)と云ふ、厭に寂しい。

聲を便りに駈戻つて、蘆がくれなのを勇んで誘ひ、

(大丈夫行かれます。早くしませう、暗くなりますから。)

誰も落着いては居ないので、汝が周章して捲立てて、其から、水にかゝると、あの人が、又渡るのか、とも言はないで、踏込んでくれたんだ。

路も何うやら広いから、尙ほ力になる。押並んで急いだがね。浅くて一面だから、見た處は沼の真中へ立つた姿で、何だか幻の中を行く、天の川でも渡るやうで、爾時ふと又美しい色が、薄濁つた水に映つた——

小松原は齒を嚙んで言漉つたが、

(先方でも、手を出した……其を曳かうと思つた時……)

私はぎよつとした。

つい目の前を、足に絡んだ水よりは色の濃い、重つくるしい底力のあるのが、一筋、褐色の鱗を立ててのたつて居るのが、向う岸の松原で、くつきりと際立つて、橋の形が顯れたんだ。

此處に、一寸した橋があるんだが、其の勢だから最う不可い。水の上で持上つて、だぶりだぶりと煽を打つと、蘆がまた根から穂を振つて、光來々々を極めてるなんざ、情なからうではないか。

然も幅一間とは無いんだよ。

(不可ないのねえ。)

(駄目です。)

と言つた切。だつて口惜しからう。其の川一條の前途は、麗々と土が出て、薄りと霧が這つて、蟲の聲がするんだもの。最う近いから、土手ぢや車の音はするし、……少時睨み詰めて立つて居た。

醫師はむくくと起きて、平胡坐で、枕を頤に突支つて、

「いや、散々、散々、お察し申すな。」

「處で、何時の間に來たか、ぱくく遣つてる其の橋向へ、犬が三疋と押寄せて、前脚を突立てたんだ。吠える、吠える！ うゝ、と唸る、びやうく齒向く。變に一面の水に響いて、心細くなるまで凄かつた。

(彼方へ参りませう、人が見ると悪いわ。)

と低聲で、あの人が言ふ。

(何故。)

と思はず口へ出たが、はつと気が付いて、直ぐびちやうくと歩行き出した。

現在犬に怪まれて居るんです……漁師村を表に、此の松原を裏にして、別荘があつて、時々ピ

アノが聞えたんで、聞きに来た事もある。……奥座敷とは餘り離れないから、犬の聲を變がつて、人でも出て来ると成程悪い。

が、何だか今の一言が妙に胸底へ響いて、時めいた、爲めに急に元氣づいて、

(一奮發遣附けませう。)  
と勇が出た。

十七

「其の努力で、蘆の中だけは潛り抜けて、舊の方へ引返したが、最う、暗くなつて、足許は分らないで、踏むほどの場所がざぶくする、およろしく聞える、ざんざと云ふ。ただか畦だか覺束なく、目印ともならうと云ふ、雑木や、川柳の生えた處は、川筋だから轟と鳴る、心細さと云つたら。

川筋さへ避けて通れば、用水に落込む事はなかつたのだが、然う恚うする内、唯其の飛々の黒い影も見えなくなつて、後は水田の暗夜になつた。

時に……急つた所爲か、私の方が眞先に二度に渡つた、ドンと手を突いてね、はつと起上る、と一のめりに見事に這つた。

(あれ、お危い。)

と云ふ人を、此方が、

(お氣を注げなさらないと、)

此の通り、ト仕方で見せて、だらしく起つ拍子に、あの人もつると足を取られた音で、あとは默然、そら解がしたと見える、ぐい、ぐい帯を上げてるが陰氣に聞えた。

氣が付いて、

(穿物を持つて上げませう、)

と注意すると、

(はい、否、可うござんす。)

と云つたが、少時して、

(流れて了つたやうですよ。)

成程、畦の切口らしい、どつと落ちるんだ。

(飛んだ事をなさいました。)

(否、何うせ荷厄介なんでも。さあ、參りませう。)  
愚圖々々して居たので、

(可いんですよ、構やしない。)

と其でも笑つた。此の方が私より未だ元気が可い。が、私が猶豫つたのは、駒下駄に、未練なものか。自分のなんざ何時の昔失くなして居る。——實は何方へ踏出して可いか、方角が分らないのです。尤も線路の見當は大概に着いてたけれども、踏處が悪いと水田へ陥る。

果して遣つた！ 意地にも立つた切ぢや居られなくなつて、まゝよ、と膽を据ゑて、つかくと出ようとすると、見事に膝まで突込んだ。

(あつ)と抜かうとして、畦へ腰を突いたつけ、木曾殿落馬です。

お察し下さい、今でこそ話すが、こりや冥土へ来たのかと思つた。あの廣場を手探りで何うするもんかね。……

背後の足弱が段々呼吸づかひが荒くなつてね、たうとう、

(些と休みませう。)

と言ひ出した。雪路以上、随分へとく揉抜いたから。

私は凭懸るものもなく、茫乎暗の中に立つたがね、あの人は、と思ふと、目の下に、黒髪が俤立つ。

(腰を掛けたんですか。)

(え、)と云ふ。

(濡れて居ませう。)

(え、何ですか、瀬戸物の缺がざくくして、)

私は肚胸を突いたんだ。

(不可い！ 貴女、そりや塵塚だ。)

と云ふ内にも、襪襪切や、爪の皮、ボオル箱の壞れたのは未だしもで、いや何うも、言はうやうのない芥か目に浮ぶ。

(でも水の上よりは増ですわ。)

と斷念めたやうに、何の不足もないらしく薩張と言はれたので、死なば諸ともだ、と私もどつかり腰を落した。むつくり持上つて、跡は冷たい。犬の死骸ぢやなからうかと、摺抜けようとしたけれども、頬擦るばかりの鬢の薫に。……

此處で、眞に相濟まない、餘計な處へ誘つたばかりで、何とも飛んだ目にお逢はせ申す、嘸身體に觸りませう、汚させ、濡れさせ、跣足にさせ、夜露に打たせて……羅綾にも堪へない身體を、と言はうとして、言ひやうがないから、

(荒い風にもお當りなさらない。)

とヘマを言つて、あゝ厭味だと思つて、冷汗を掻いた處を、

(お人が悪いよ、子持だと思つて、)

是に又ヒヤリとしたやうに覺えて居る。」

十八

「其と同時に小兒の事が氣になつて……言ひ出すと、女中と最う寝たらう。で、大して心配もしない様子、成程寝る時刻、九時些と過ぎたかも知れない。汽車が二三度上下した。

此の汽車だが……果しの知れない暗闇の廣野——迎も爾時の心持が、隅々まで人間の手の行届いた田圃とは思はれない、野原か、底知れぬ穴の中途——其の頼りなさも、汽車の通るのが、人里に近くつて嬉しかつた。其が——後には可悪い偉大な獣が、焰を吹いて唸つて來るか、と身震をするまでに、成つて了つた。

第一、足の出しやうがない。それに……

最う恚う夜も遅くなつては、何事もなく無事に家に歸るとして、唯二人で今までなんだから、女中はじめ變に思はう。特に出征中の軍人の夫人だ。然うでもない、世間ぢや餘計な風説をして居る折からだから憂慮はしい。

(何うでせう。)

と甚だ言兼ねた事ではあつたが、既に——人が見ては悪いわ——と言つてくれた人だから、恚う聞いた。が、其の實、否、人は何とも思ふまい、と此の人だけに、心配をせずに居ようと期したんだ。すると些と案外で、

(さあ、私も其が氣になります。)

返事が此で。何とも言ひやうがなくつて溜息が出た。あの人もほつと言ふ。話だけは色めかしい中に、何ともお話にならん事は、腹が、ぐうと鳴る、あゝ、情ない何事だらう、と氣にするほど、ぐうぐう言ふ。

あの人にも聞えたか。

(お腹が空いたでせうね。)

と來たのにや、赫としたよ。但し然う云ふ方も晩飯前です。……

詮方がない、大聲を揚げて見ようかとも言ひ出したが、こりや直ぐに差留められた。勿論、お怒鳴んなさいと命令をされたつて、此奴ばかりは、死んでもあやまる。早い話が、何と云つて救を呼びます、助船でもないだらう、人殺し……串戯ぢやない。」

醫師は聞く中にも笑出した。



言ふものも釣込まれたが、

「今こそ苦笑ひも出るけれど、……實際だ、腹のぐうぐう鳴つた時は、我ながら人間が求める糧は、何爲恚う淺ましい物だらうと熟々思つた。」

處で……

「ぢや、何を便りに塵塚に腰を抜いて居たか、と言ふに、此處も娑婆だから、其の内には、月が出ようと空頼み、あの人も恐らく然うでもあつたらう、尤も何かの拍子に、

(戦争に行つて居る方の事を思へば、恚うやつて一晩ぐらゐる。)

とは言つたがね。まさか夜の明けるまで然うして居られるものとは思ふまい。

糠雨が降つて來たもの。其の天窓から顔へかゝるのが、塵塚から何か出て、冷い舌の先で嘗めるやうです。

水の音は次第々々に、或ひは嘲り、或は罵り、中にや獨言を云ふのも交つて、人を憤り世を呪つた聲で、見ろ、見ろ、汝等、水源の祕密を解せず、灌漑の恩を謝せず、名を知らず、水らしい水とも思はぬ此の細流の威力を見よと、流れ廻り、駈け繞つて、黑白も分ぬ眞の闇夜を縦に蹂躪る。と時々どどどと勝誇つて、躍上る氣勢がする。

其の流れるに従うて、我が血を絞り出されるやうで、堪へ難い。

次第に雨が溜るのか、水が殖えたか、投出して足許へ、縮めて見ても流が出來て、ちよろちよろと搦みつくと、袖が板のやうに重くなつて、塵塚に、ばしや〜と沫が掛る、雫が落ちる。地鳴が轟として、ぱつと一條の焰を吐くと、峰の松が、颯と其の中に映つて、三丈ばかりの眞黒な面が出た、眞正面へ、はた、と留まつたやうに見えて、ふつと尾が消える。

下りの終汽車らしい、と思つた時、

(あ痛、痛。)

ぱつと擦寄ると、あの人かぶる〜震へて、

(胸が。)と云ふ、齒の根が合はない。

(冷えたんです。)

と言ひながら、私もわな〜し出した。」

十九

「一生懸命の聲をして、

(さ、お摺んなさい。)

とすつと出すと、びつたり額を伏せて、緊乎と膝を摺んだが、苦痛を堪へる恐い力が入つて、

痺れるばかり。

(確り……確りして下さいよ。)

背中を擦らうとした手が這つて、ひやくと後毛を潜つて、柔かな襟脚に障つたが、やがて水晶のやうに冷たいのを感じた。

爾時ふつと又、棲の水に映るのが、薄彩色して目に見えたが、其ならば、夢にならう、夢ならば、此處で覺める！

膝に倒れたのは、あの人だ。

私は猛然として、思はず抱きながら、引立てながら起上つた。

(我慢なさい。こんな事をして居ちや、生命にも障りませう。血の池でも針の山でも構はず駈出して行つて支度して迎に來ます。)

と聲も震へながら云ふと、

(一人で、何うして居られませう、一所に。)

ツて、ぐいと袂に掴まつたが、絞ると見えて水が垂つた。

(田も畦も構はない、一文字に駈け抜けるんです、怪我があると不可ません。)

(可いの、貴下、婦は最期まで、殿方が頼りです、さ、連れて行つて！)

と縫つた手を、緊手と取合つた。

(ぢや、悪魔に攫はれたと、斷念めて、目を瞑つて、覺悟をして……)

(は、瞑りました。)

と言はれたのによ、ほろりと熱い涙が出た。

と、小松原は拳を握つた手首をかへして、目を壓へて、火入とも言はず、片手を煙草盆にはたと落した。

「考へて見れば怪しい。

はじめから其の覺悟をすれば、何も冷え通るまで畦に踞るにも當らず。不斷見れば掌ほどの、あの踏切田圃を、何に血迷つてたんだか、正氣では分りません。平時の幻と言ひ、をかしたものに弄ばれてでも居たかと思ふ……尤も其の堪へられない水の中でも、時々變に恍惚となると、何故か雲にでも乗せられたやうな氣がする、其時は、あの人と然うして居るのが嬉しかつた。

畢竟するに、言譯澤山の戀かも知れん。

其の罰です。

人夫沼  
後は御存じの通り、空を飛ぶやうな心持で、足も地につかず、夢中で手を曳合つて駈出した處を、阿と云ふ間もなく、終汽車で勿飛ばされた。

気が付いた時は、眞蒼な何かの灯で、がつくりとなつて、人に抱へられてる、あの人の姿を一目見たんだがね、衣を脱がしてあつた。唯一束ねの滑かな雪で、前髪と思ふのが、亂れかゝつて、唯其の鼻筋の通つた横顔を見たばかり……乳の邊に血が染んだ、——此の方とても、御多分には漏れぬ、應擧が描いた七難の圖にある通り。まだ口も利けない處を、別々に運ばれた、それが見納め。

君も知つてる、生命は、あの人も助かつたんだが、其の後影を隠して了つて、未だに杳として消息がない。

是が風説の心中仕損。言譯をして、世間が信するくらゐなら、黙つて居ても自然から明りは立つ。面と向つて汝が、と云ふものがないのは、君が何にも言はないと同一なんだ。

お房さんも、大方同じ考へだつたものだらう。が、これは夫に顔の合はされないのは、道理です。……何も私ばかりが澄まして生きて居るのぢやない、今此處に、君と慫うやつて居る時を、行方知れず、と思つて居るものもあらう。あの人も又、同じやうに、何處かで心合ひの友に、述懐をして居ようも知れない。——唯もう一度逢ひたいよ。

と團扇を膝につくと、額を暗うした。  
醫師は黙つて居る。

「しかし、」

と、小松原が額を上げた。

二十

「未練だね。世間ぢや、誰もあの人が生きて居るとは思はない。——私だつて、實際生存へて居ようとは考へないが、随分其當時、表向きに騒いで、搜索もしたもんだけれども、其らしい死骸も見附からないで、今まで過去つたんだ。だから、もしか頼まれる……」

其かつて、今此處に、君の内に其の人が居るから逢へ、と云はれたつて逢はれるわけでもないんだが。

「しかし逢ひたいんだ？」

と醫師は笑ひながら口を入れた。

「……………」

沼夫人

「成程、其處で魔されたんだ。其の令夫人に魔されたのは、却つて望む處かも知れんが、あとの泥水は厭だつたらう、全く氣の精だな。遁出したも道理だ。よく、あの板廊下が鐵道の線路に化けなかつた。」

「時に、」

小松原は、気が着いたらしく更まつて、

「あの、白骨だがね、」

と皆まで言はせず、手を掉つて、

「大丈夫、其の令夫人の骨ぢやない。」

「骨ぢやない、」

と鸚鵡返しで、

「けれども、婦のだと言ふぢやないか。何年経つたんだか、幾十年過ぎたんだか、知れないが、婦には變りはなからう。骨になつても小町は小町だ。」

婦か、あの姿を人目に曝されたら、どんな心持だと思ひます——君にこんな事を云ふのは、解剖室で命乞をするやうなものだが、例ひ骨でも、一室に泊り合はせたのは、免れない縁だと思ふ。見えん處へ隠してくれんか。——私は最う、あの人が田圃で濡れた時の事を思つても、悚然とする。何うだね、可哀想だとは思はないかね。」

「然うさな。まさか私だつて、縁日の賣藥見たいに、あれを看板に懸けちや置かん、骨を拾つた氣なんだから、何も品物を惜みはせんが、打棄つて置き給へ。そんな事を氣にするのは宜くない

から止したが可からう。」

「貴郎、」

と優しい聲がしたので、小松原は身を縮めて、次の室の暗い中を透かした。暑いので襖は無いが、蚊帳が重ねて釣つてある。其の中に、浴衣の模様が、蝶々のやうに掠れて見えたは細君で、然も坐つて、紅麻に裳を寄せ、端近う坐つて居た。

「何だ、起きて居たのか。」

「はい、つい、あのお話に聞惚れまして、」

と云ふのに、しんみりと涙が籠る。

「何うも、」

とばかりで、小松原は額を壓へた。醫師は事も無げに、

「聞いたのは構はんよ、澤山泣いて上げる。だが、其處らへ溢しちや不可んぜ、水が出ると大變だ。」

「あれ、可厭な。」

「馬鹿だな、臆病。」

「だつて、」

と蚊帳の裾を引被ぐ、腕が白く、扱帯の紅が透いた時、わつと小兒が泣いたので、  
「おゝ。」

と云つて添臥したが、二人も黙る内、すやくと又寝入つた。

「ねえ、貴郎、然うして、小松原さんのおつしやる通りになさいよ。何だか可恐いんですもの。」

「此の人が壓されたつて、お前が恐しがる事はないぢやないか。」

と弄かふ如く、團扇を膝でくるりと遣る。

「否、ですがね、あの御骨……」

「一寸待て、御骨は氣になる。は、は、は。」

「御免なさいませよ。」

と客に云つて、細君は、小兒に添乳の胸白く、搔卷長う、半ば起きて、

「串戯ではなくつてよ。貴郎が持つて来て、彼處へ据ゑてから、玄關の方なんぞも、此の間中  
種々な事を言つてるんですよ。」

話聲がするの、登音が聞えるのつて——大方女中なんかを徒に威すんだらうと思つて、氣にも  
しないで居ましたけれども、今のお話の様子だと、何だか、何うとも言へませんわ。」

二十一

「ねえ、小松原さん、」

とぼかしたやうな顔が、蚊帳の中で臙に動いて、

「あの御骨だつて、水に縁があるんですもの。」

「婦女子の言です。」

と醫師は横を向く。小松原は、片手を敷布の上、隣室へ摺寄る身構へで、

「水に縁と……仰有ると？」

「あれは貴下、何ですわ、つい近い頃、夫が拾つて来て、彼處へ飾つたんですがね。其の何です  
よ、舊あつた處は沼なんですつて。」

「沼！」

「おつと直ぐに、然う目の色を變へるから困る。鯰に網を打ちはしまし、誰が沼の中から、掬  
上げるもんか。」

「だつて、そりや沼からぢやありませんまいけれど、梅雨あけに水が殖えたので、底から流出した  
んだらうつて、貴郎が然う言つて在らしたではありませんか。——小松原さん、此の梅雨あけ

にも田圃へ水が出ましてね、先刻おつしやいました、踏切の前の橋も落ちたんですよ。蒼沼が溢れたんですよ。田圃の用水は、皆其處から来るんだつて申します……

其の近處の病家へ行きました時に、其家の作男が、沼を通りがかりに見て来たつて、話したもんですから、夫が貴下、好事に其の男を連れて歸りがけに、廻道をして、内の車夫に手傳はして、拾つて来たんですよ。

御骨は、沼の縁に柔な泥の中にありましたつて、何處も不足しないで、手足も頭も繋つて、膝を屈めるやうにして居たんださうです。」

「妄誕臆説！」

と稱へて、肩を一つ團扇で敲く。

「臆説つて、貴方がお話しなすつた癖に。而して恠う骨に成つてから、全體具つて居るのは、何でも非常な別嬪に違ひない。何骨とか言つて、佛家では菩薩の化身とさへしてある。……第一膝を折つた身躰の可い處を見ろつて、散々效能を言つたではありませんか。」

と、最う小兒も寝たので、搔卷からするりと出て棲を合はせる。

醫師喟然として、

「宜しく頼む。あとは君にまかせるから、二人して、あの骨を其の人だとも何とでも御意なさ

い、此方へ来て講中にならんか。」

と笑ひながら、無手と蚊帳を出て、廊下へ寝衣で突立つた。

が横向に隣を見て、

「何だ、お前も手水か。馬鹿な、今の話して不氣味だからつて。お客様の居る處を、連立つて便所へ行く奴があるかい。」

と言ふ。

小松原が、ト透すと、二重遮つて仄ではあるが、細君は蚊帳の中を動かずに居たのである。

「貴郎、」

と此の時、細君の聲は、果せる哉、太く震へて、

「貴郎……」

「應、」

小松原も蚊帳の中に悚然として、

「酒田。」

と變な聲をする。

「誰か居ますか。」

「おゝ……」

と醫師は、蹠踏けたやうに、兩戸を背に、此方（こなた）を向き替へ、斜（な）めに隣室（となりむろ）の蚊帳（かや）を覗いた。

「私は此處（こゝ）に居ますんですよ。」

「誰だ、今のは？」

うつかり醫師が言ふや否や……

「厭……」

と立つて、ふらくくと、淺黄（あさぎ）に白地（しろぢ）で蚊帳（かや）を潛ると、裙（すそ）と裙（すそ）とにばつと袂（たもと）まる、と蜘蛛（くも）の巢（す）に掛つたやうに見えたが、一つ煽（あふ）つて、すつと瘦（や）せたやうになつて、此方（こなた）の蚊帳（かや）へ——廊下（らうか）に事（こと）はあるものを、夫（をと）を力（ちから）に其處（そこ）へは出（で）られぬ——腰（こし）を細（ほそ）く、乗（の）るばかり、胸（むね）に縋（すが）つた手が白（しろ）く、小松（こまつ）原（はら）の膝（ひざ）にしがみついた。

——此（こ）の状（さま）を……後（のち）に、醫學士（いがくし）が人（ひと）に語（かた）る。——

「蒼沼（あなま）の水（みづ）は可（おそ）恐（ろ）しい、人（ひと）をして不倫（ふりん）の戀（こひ）をな（な）さしむるか、私（わたし）は嫉（ねた）まうとした。」

二十二

爾時（そのとき）醫師（せんせい）は肩（かた）を昂（あ）げて、

「雨（あめ）かな。」

と仰（あ）向けになつたが、又（また）、俯（うつむ）向（む）いて胸（むね）を拂（はら）つた。

「何（なん）だ、廊下（らうか）は水（みづ）だらけだ。」

細君（さいくん）は何（なん）にも言（い）はぬ。小松原（こまつばら）も居（い）るまゝ、忙（せ）しく息（いき）をす（す）るばかり。

鶏（とり）が鳴（な）いたので、徐（ゆつ）と細君（さいくん）が顔（かほ）を上げ（あ）げ（あ）げ（あ）げ、廊下（らうか）に突（つ）立（た）つた夫（をと）を見（み）た時（とき）、聞（き）耳（みみ）を立（た）てて、

「何（なん）です……がた／＼、がた／＼言（い）つて、」

小松原（こまつばら）が、

「あ、」

「彼（あれ）か、」

と醫師（せんせい）も其處（そこ）で聞（き）取（と）つた。

「酒田（さかた）……先刻（さつき）のも、」

「む、診察處（しんさつじよ）だ。」

「あれえ。」

「開（あ）けて見（み）ると何（なん）にも居（い）ないのだ。が、待（まち）てよ。」

と言（い）つて、蚊帳（かや）の周（ま）圍（り）をぐるりと半（はん）分（ぶん）、床（とこ）の間（ま）をがたりと遣（や）ると、何（なん）か提（ひ）げ（た）、其（そ）の一（ひと）腰（こし）、片（かた）

手に洋燈を翳したので、黒塗の鞘が、袖をせめて、つらりと光つた。

「危い、貴郎、」

「大丈夫だ。」

「否、」

細君は一聲、誰かを呼んで、

「玄關の方を起して下さい、正吉——」

最う醫師の姿はなかつた。

ばたん、と扉の開いた音。

二人が揃つて、蚊帳の中を廊下際で、並んで雨宿りをする姿で立つた處へ、今度は靜に悠々と取つて返す。

「何うした。」

「驚だ。」

「え。」

「籠が三個よ。」

「何處に、ですえ。」

と細君は齒の音も合はぬ。

醫師は眞面目な顔して、

「場所は些と悪い、白いもの前だ。」

「あれ。」

「嗚また蒼沼から、迎に來たと言ふだらうなあ。」

と雨戸を一枚、颯と風が入つて、押伏せて、其處に置いた洋燈が消えた。

が、鶏が又鳴いて、臺所で誰か起きた。

白骨が舊の沼へと立返ることになつて、此の使者は、言ふまでもなく小松原が望むで出た。一夜の縁のみならず、其處は、自分とあの人が爲に浮名を流した、濱田の水の源ぞと聞くから、顔を知らぬ許嫁に初めて逢ひに行く氣もすれば、神仙の園へ招待されたやうでもあつて、いざ、立出づる門口から、早や天の一方に、蒼沼の名にし負ふ、緑の池の水の色、峰續きの松の梢に、髣髴として瑠璃を湛へる。

其の心は色に出て、醫師は小松原一人は遣らなかつた。道しるべかたぐ、介添に附いたのは、正吉と云ふ壯い車夫。

國手お抱への車夫とあると、一寸聞きには俠勇らしいが、いや、山育ちの自然生、大の淨土宗。



お萩が好の酒嫌ひで、地震の歌の、六ツ八ツならば大風から、七ツ金ぞと五水りやうあれ、を心得て口癖にする。豪いのは、旅の修行者の直傳とあつて、『姑蘇啄麻耶啄』と呪して疣黒子を抜くと言ふ、使ひがら以つて來いの人物。

是が、例の戸棚掛の白布を、直ぐに使つて一包み、昨夜の一刀を上に乗せて、も一つ白布で本包みにしたのを、薄々沙汰は知つて居ながら、信心堅固で、怯氣ともしないで、一件を小脇に抱へる。

此の腰の物は、魔除けに、と云ふ細君の心添で。細君は、白骨も戻すと極り、夜が明けると、ぱつと朝露に開いた風情に元氣になつて、洗面の世話をしながら、縁側で、向うの峰を見て顔を洗ふ小松原に、

「昨晚はお樂み……何故つて。まあ、憎らしい。奥さんが逢ひに來らつしやつたではありませんか。」

など遣つたものだが、敢て是は冷評したのではない。其證據には、小松原と一足違に内を出て、女子扇と御經料を帯に挟んで、じりじりと蟬の鳴く路を、某寺へ。供養のため――

二十三

「沼さ行く道は此を入るだよ。」

と正吉が言ふ處を、立直つて見れば、村の故道を横へ切れる細い路。次第高の棚田に架つて、峰からなぞへに此方へ低い。田の青さと、茂つた樹立の間を透いて、六月の空は藍よりも蒼く、日は海の方へ廻つて、背後から赫と當るが、此處からは早や冷たい水へ入るやう。

三方、山の尾が迫つた、一方は大なる楓の梢へ、青田の波が越すばかり。それから青芒の線を延して、左へ離れた一方に、一叢立の藪があつて、夏中日も當てまい陰暗く、涼しさは緑の風を雲の峰の如く、さと揺出し、揺出す。其の上に、萱で包んだ山が見えたが、遠いと覺しく、峰の松が、鹿のイんだ姿に小さい。藪に續いた一方は雑木林で、颯と黒髪を捌いた如く、梢が亂れ、根が茂る。

路は其の雑木の中に出つ入りつ、糸を引いて枝折にした形に入る……赤土の隙間なく、凹に蔭ある、樹の下闇の鱗爪の跡、馬は節々通ふらしいが、處から、龍の鱗を踏むとも思へば、鼈の足痕を辿るよとも疑はれた。

次第に山の裾を分け上ると、件の楓を左の方に低く視めて、右へ折曲つて最う一谷戸、雑木の中を奥へ入らうとする處の、山懐の土が崩れて、目の下の田までは落ちず、徑の端に、抜けた岩ごと泥が堆かつた。

「泥は此の先でがんす。」

と正吉は前へ立つた。……山崩れで、爰に路の切れたのも、何となく淨世を隔てた、意味ありげにぞ額かるゝ。

「梅雨あけに、醫師と、此の骨さ拾ひに来つけ。其頃の雨に緩んだだね。腕車もはい、持立てるやうにして此處までは曳いて来ただが、前あ挺でも動きましねえでね。」

と言ふ。

此邊……何處かで何の鳥か一つ鳴出した。何、正體を見れば、閑古鳥にしろ、直其處等の樹の枝か葉隠れに、翼を搔込んだのが、けろりとした目で、閑に任かして、退屈まぎれに獨言を言つて居るのであらうけれども、心あつて聞く者が、其の境に臨むと、山から谷、穴の中の蟻までが耳を澄ます、微妙な天樂である如く、唳々として調べ奏でる。

……きよ、きよら、くらら、くららつ！

と轉がして、發奮み掛つて、一寸留めて、一つ撓めて置いて、ゆらりと振つて放す時、得も言はず銀鈴が袂に響く。

小松原は、魂を取つて扱かれるほど、犇々と身に堪へ、

「……京から、今日ら……来るか、来るか！」

と言はれるやうで、

「來ました、東京から今日來ましたよ。」

と胸の裡で言つた。

其の蒼沼は……

小高い丘に、谷から築き上げた位置になつて、對岸へ山の青簾、青葉若葉の緑の中に、此の細路を通した處に、冷い風が面を打つて、爪先寒う湛へたのである。

水の面は秋の空、汀に蘆の根が透く邊りは、薄濁りに濁つて、二葉三葉折れながら葉ばかりの菖蒲の伸びた蔭は、どんよりと白い。木の葉も、ばらばらと散り浮いて、ぬらりと尊茶の蔓が、水筋を這ひ廻る——空は、と見ると、覆かゝるほどの樹立はないが、峰が、三方から寄合つて、遠方は遠方なりに遮つて、池の周囲と同じ程より、多くは天を餘さぬから、押包むた山の緑に藍を累ねて、日なく月なく星もなく、倒に沼の中心に影が澄んで、其處にこそ、蒼沼の名に聞ゆる威嚴をこそ備へたれ。何となく涸れ荒びて、主やあらむ、其の、主の留守の物寂しい。

二十四

濃い緑の雜樹の中へも、枝なりにひらりと日の光が折込んで、縁を淺黄に、木の葉を照らす。

此の影に、人は蒼白く一息した。

何故か、葬禮の式に列つたやうで、二人とも多く口數も利かなかつたが、やがて煙草も喫まな  
いで、小松原は踞つた正吉を顧みて、

「何處で拾つたね。」

「やあ、其だがね……先刻から氣い付けるだが、何うも勝手が違つたぞよ。確、其處だつけど勘  
考します、其れ、其の隅つこの、こんもり高な處さ、見さつせいまし、已あ押魂消ただ。其の節  
あんな芭蕉はなかつけ。」

と言ふ。

目覺しいのは、其處に生えた、森を欺くやうな水芭蕉で、沼の片隅から眞蒼な柱を立てて、峰  
を割り空を裂いて、ばさ／＼と影を落す。ものの十丈もあらうと見えて、恰も此の蒼沼に颯と萌  
黄の窓帷を掛けて、倒に裾を開いたやうな、沼の名は、或は是あるがためかとも思はれた。

正吉が知らずと云ふ、梅雨あけの頃は、未だ丈伸びぬ時節であるから、今日見付けたのを、訝  
しむ仔細は無い。

却説、家を出る時から、拾つた場所へ舊の通り差置かうと言ふではなく、兎もあれ、沼の底へ  
葬り返さうとしたのであるが、いざ、となると汀が浅い、唯白骨は肋の數も隠されず、蝶々蜻蛉

の影はよし、鳥の糞にも汚されよう。勢ひ諸手高く差翳して、曳！と中心へ投込まねばならぬと  
なつた。

「そんな事が出来るものか。」

と小松原が猶豫ふと、

「成程、へい、手荒だね。」

と正吉さへ頷くのである。

此處で、小松原が心着いたのは、其の芭蕉で……

「まあ、其を解け。」

と手傳つて、上包の結目を解くと、づしりと壓にある刀を取つたが、其のまゝ、するりと抜き  
かける。——虹の如く、葉を漏る日の光に輝くや否や、

「わッ！」

と正吉が飛退つた。途端に白布の包は、草に乗つて一つ動く。

「旦那、氣イ確に持たつせえ。」

昨夜からの小松原の容子は、眞個人目には變だつた。是は氣が違つた、と慌てたらしい。  
やがて孫吳空が雲の上を曳々聲で引背負つたほどな芭蕉を一枚、づる／＼と切出すと、芥と眞

蒼な香が樹の中に籠つて、草の上を引いて来たが——全身引くるまつて乗つかつた程に大いのである。

小松原は莞爾々々しながら、

「さあ、これへ乗せよう。」

まざく／＼と見るには堪へぬから、其の布で包んだまゝ、但結目を解いただけで、密と取つて、骨を廣葉の只中へ。

葉先を汀へ、蘆摺れに水へ離せば、ざわ／＼と音がして、づるりと迂る、柄を向うへ……

「南無阿彌陀 南無阿彌陀。」

と殊勝に正吉が、せめ念佛で疊掛けるに連れて、裂目が鱧のやうに水を捌いて行く、と小波が立つて、後を送つて、やがて沼の中ばに、靜と留まる。

其ま、葉が垂れると、縋りつく状に、きら／＼と水が乗る、と解けるともなしに柔かに、ほろほろと布が弛んで、細長い包みの裾が、ふツくりと胸になり、婦が臥した姿になる。

思出して、はつと目を塞いだ、頓て見れば、最う沈んだ。

途端に、ざら／＼と樹が鳴つて、風が走る。そよ風が小波立てて、沼の上を千條百條網の目を絞つて掛寄せ掛寄せ、沈んだ跡へ揺かけると、水鳥が衝と蹴た如く、芭蕉の廣葉は向うの汀へ、

する／＼と小さく片寄る。

二十五

……きよ、きよら、きよきよら、くららつ……

と、しばらくは唯鳥の聲。

熟と沼の面を見て居ると、何處かに、其の人の顔がある。が、水の皺が揺つては消し揺つては消す——然うかと思ふと、其の水紋の揺めく綾が、ちら／＼と目になつて、瞳が流るゝやうでもある。ソレ鼻、ソレ口、と思ふ處が、ふら／＼と浮いて來ては、仰向けに沈んで消える。もう些とで、もう些とで……と乗出すけれども、もう些とで絡らない。

急つて、腕いて、立つたり居たり、汀も其方此方、場所を變へてうろついて見込んだが、不圖心づいて胸せば、早や何が染るでもなく、緑は緑、青は青で、樹の間は薄暮合。

「旦那最う晩方だよ。」

と云つて、正吉が歸途を促がしたのは餘程の前で、其を、無理遣りに一人歸してからさへ、早や久しい。

獨になつて、思ふ隨、胸にたゝんだ空想に耽らうと、待構へたのは是からと、先づ、ゆつくり

腰を卸して、衣紋まで直して、其から横になつて見たり、起返つて見たり。

兎角して沼の中を、身動きもしないで覗込んだ……

あはれ水よ、偉なる宇宙を三分して、其の一を有する汝、瀬となり、瀧となり、淵となり、目のあたり我が怪しき戀となりぬ。

いで、霧となつて虹を放ち、露と凝つて珠ともなる。爰に白骨を包んでは、其の雪の如き膚とならずや、あの濡れたやうな瞳とならずや。

と思ひ思ふ、正しく、其處に、水底へ、意中の夫人が、黒髪長くかゝつて見ゆる。

見ようとすると、水が動く。否、否、我が心の動くために、人の姿が散るのであらう。

胸を打つて、襟を掴んで、咽喉をせめて、思ひを一處に凝らさうとすれば、猶ぞ、千々に亂れる、碎くる。一層諸共に水底へ。

が、確に其の人が居ようか怪しい。……否、正しく、其處に、乃し葬つた骨がある。骨は確に……

……確に骨は、夫人が此處に身を投じて、朽ちず、消えず、碎けぬ——白き珊瑚の玉なす枝を、

我がために残したことは、人にこそ言はね、昨夜より我は信じて疑はぬ。

何が不足で一所に死ねぬ——

「其の肉身か。」

と己が頭髮を掴んで、宙に下がるばかり突立つた。

「卑怯だ、此奴！ 始から其は求めぬ誓であつた。又其を求むる位なら、何故、行方も知れず捉

ふる影なき其の人を、慙くまで慕ふ。忘れられぬは其の靈であらう。……其の靈は、其處にある、

現在骨まである。何が、何が不足で飛込めない。

肉身か、或は其もある。沼の水は、即ち骨を包む膚、溺れて水を吸ふは、尙ほ其の人の唇に觸

れるに違はん！」

入れ、入れ、入れ、さあ〜〜〜、と水が引き引き、ざわざわと蘆を誘つて、沼の眞中へ

引寄せる。

小松原は立つたま、地鞆を踏んだが、

「えゝ！ 腑効ない。」

どつかり草へ。

蘆の葉末に水を載せて、晝の月の浮いて映るが如く、沼の其處に、腕か、肩か、胸か、乳か、

白々と漾ひ居る。

ソレ〜手に取るばかり、其の人が、と思ひながら、投出して見ても足が未だ水へは達かぬ。

何をか疑ひ、何をか猶豫ふ。

餘の事に、此處へ来るは今日には限らないと思切つて、はじめて悚然として、歸らうとして、骨を送つた船の漾ふ處を視むれば、四五本打つた、杭の根に留つたが、其の杭から、友染の切を流した風情で、黄昏を翳翠が一羽。

二十六

其を憊う視めた時、平時とろくくと、眠りかけの、あの草の上、樹の下に、美しい水を見る、描いたる如き夢幻の境、前世か、後世か、或處の一面の繪の景色が、彩色した影の如くに浮んだので、あゝ、此のまゝ、此處へ寝るかも知れない。

其も可、まゝよ、成るやうに成れと成つた。……

其の内に、翳翠の背らしいのが、向うで、ぼつと大きくなり、従つて輪郭は臙になつたが、大きくなつたのは近づくので、臙になるのは、山から沼の上を暮増るのである。其の暮れるのと、來懸るのが、蘆の汀を段々傳ひに、そよくと風に、背後を、吹かれ、送られ、近づいて、何の聲音も聞えなかつたが、上からか下からか、小松原の目に、婦の色ある衣の裾が見えて、傍に來て、しつとり留る。……

「奥さん。」

と、我知らず叫んだが、はつと氣が附いても枕はして居ず、此の時は、診察室の寢臺でなかつた。其處で、

「……………」

誰かが何か言ふ。唯赫として、初手のは分らなかつた。瞳を凝らして、其のすつと通つた鼻筋と、睫毛が黒く下向に其處にイんだのを見出した時、

「立二さん。」

と胸を抱いた手が白く、能くは分らぬけれども、着たものの柄にも因るか、久らくの間に、稍太肉だつた人が、げつそりと瘦せて小さくなつた。

「おゝ！」

とばかりで、肩で呼吸して、草に胡坐したまゝ、己が膝を引摺むで、せいゝ言つて唇を震はす。

上では、俯向きさまに、髪が揺れたが、唇の色が燃え、得も言はれぬ微笑みして、

「變つた處で……餘りだから、お化だと思ふでせう。」

と相變らずしとやかなものの言ひやう哉。

其れどころか、お化……なら、お化で、又其の人なら其の人で、言ひたいことが一切經、あり

つ丈の本箱を引くり返したのと、知つた丈の言を大絡にしたのが、一齊に胸へ込上げて、咽喉で支へて、ぎうとも言へず、口は開かず、目は動く。

「それでも、」

と鬢へ一寸手を遣つたが、櫛、笄、簪、リボン、一ツもそんなものは目に入らなかつた。

「まさか、墓へは連れて行かないから、私の許へ御一所に。」

指して、指の先で、男が只瞻りに瞻つた瞳を、沼の片隅に墨で築いた芭蕉の蔭へ、觸つて瞬かせるまで、動かさせて、

「彼處を通つて、岨傳ひに出られる里。……立さん、そんなに吃驚なさらなくても、貴下が昨日、

お醫師様の許へおいでなすつた事は、私最う知つて居ます。

何時かの時の怪我でねえ、まだ時々、時候の變り目に悩みますから、梅雨時分、あのお醫師様にお世話になつたの、……私のね、今隠れて居る百姓屋へ来て貰つて……

立さんが、先刻葬式に來らした、此の沼の白骨も、爾時私の許で聞いて、あの方が此處へ來て拾つて行つたんです。

此の頃、又、些と鹽梅が悪いので、醫師へ通つて居ますから、今日此方へお出でなさる事も、貴下がお出掛けの直ぐあとへ行つて聞いて來ました。

先刻から、彼方此方で、様子を見て居ましたけれども、傍に人が居るから、見られるのが可厭で來ませんでしたよ。

さあ、入らつしやい。」

「……参ります！」

とだけは決然として氣競つて云つたが、膝が萎えて、がくついて、ついした事には行かないで、

「貴女、貴女、」

とばかり言ふ。

「まあ、何にもおつしやらないで。何事も、あの、内へ行つてから、ゆつくりお話をしませうね。」

と軽く頷く、頬がつくと、襟の處が薄く曇つて、きらきらと露が落ちた。

二十七

其の涙を拂ふ状に、四邊を見つ、

「御覽なさい、可厭な。何處より前に、沼の上が暗くなりました。是が、あの田の水の源なんですもの。又何時かの時のやうな事があつては悪い。」

と調子はおつとり聞こえたが、是を耳にすると齊しく、立二は焼火箸を嚙んだやうに突立つた。唯、佳い薫が、すつと横を抜けて通つて、其のまゝ後姿で前へ立つて、尋常に汀を行く。……お太鼓の帯腰が、弱々と、空から釣つたやうに、軽く、且つ薄い。

其處へ、はらくと、かゝる白絹の袂に、魂を結びつけられたか、と思ふと、筋骨のこんがらかつて、捌のつかないほど、揉み立てられた身體が、自然に歩行く。……足は何處を踏んだか覚えなし。

しばらく行くと、其の人が、偶と立停つて、弱腰を捻ぢて、肩へ、横顔で見返つて、

「氣をつけて頂戴、沼の切れ目よ。」

と案内する……處に……丸木橋が、斧の柄の朽ちた體に、ほろりと中絶えがして折込んだ上を、水が糸のやうに淺く走つて、おのれ、化ける水の癖に、ちよろくと可憐やか。こゝには葉ばかりでなく、後れ咲か、返り花が、月に咲いたる風情を見よ、と紫の霧を吐いて、杜若が二三輪、ぱつと花瓣を向けた。其の山の端に月が出た。

「今夜は私が、」

すつと跨ぐ、色が、紫に奪はれて、杜若に裙が消えたが、花から抜ける捌いた裳が、橋の向うで納まると、直ぐに此方へ向替へて、

「手を引いて上げませう。」

婀娜に出されたので、つい其の、伸せば達く、手を取られる。其手が消えたさうに我を忘れて、可憐い薫に包まれた。

未だ耳の底に絶えなかつた、あの、きよ、きよら、くらら鳥の聲が、此の時急に變つた。野太く、圖抜けた、ぼやつとした、のろまな、然も悪く底響きのするのに變つて、

……おのれら！ おのれら！……  
と鳴く。

ぎよつとして、仰いで見る、月影に、森なす大芭蕉の葉の、沼の上へ擡んでたのが、峰から伸出して覗くかと、頭に高う、宛然馬の鬣の如く、譬へば長髪を亂した體の、婆娑とある附元は、何うやら瘦こけた蒼黒い、尖つた頤らしくもある。

あれ／＼裂けた處が、そつくり口で、

……おのれら！……

と又鳴いた。其の體は……薄汚れた青竹の太杖を突いて、破目の目立つ、蒼黒い道服を着に及んで、丈高う跳ばつて、天上から瞰下しながら、ひしやげた腹から野良聲を振絞つて、道教ふる仙人のやうに見えた。



其の葉が大きく上にかぶさる、下にイんで熟と見た、瞳が濡んで溜息して、  
「立さん、立さん、」

と手を取つたまゝ、勵ますやうに呼掛けて、

「憎らしいではありませんか。あの芭蕉が伸擴がつて、沼の上へ押覆さるもんですから、御覽なさい。出汐を恚うして隠すんですもの。空へ上れば峰へ伸る、向うへかゝれば海へ落ちて、何時見ても、此の水に、月の影が宿りません。」

可哀相に。何時かの、あの時、月の影さへ見えたらばと、どんなに二人で祈つたでせう。身に  
つまされて涙が出る。まあ、此の沼の暗いこと！ 外は、あんなに月夜だのに。……」

翳せば其の手に、山も峰も映りさう。遠い樹立は花かと散り、頬に影さす緑の葉は、一枚毎に  
黄金の覆輪をかけたる色して、草の露と相照らす。……沼は、と見れば、此處からは一面の琵琶  
を中空に据ゑたやうで、蘆の葉摺れに、りん／＼と鳴りさうながら、一條白銀の絲も掛らず、暗  
暗として漆して鼠が駈廻りさうである。

「先刻、貴下がなすつた次手に、最う些と切拂つて下されば可かつたのねえ。」

唯等閑に言ひ棄てたが、小松原は思はず拳を握つた。生れて以來、かよわき此の女性に對して、  
男性の意氣と力を未だ嘗て一度も爲に露はし得た覺がない。腑效なさも其のドン詰に……

「おのれ！」

「おのれ！」

と横薙、刃が抜けると、其のもの、長髪をざつと捌く。驚破天窓から押潰すよと、思ふに肖ず、  
二丈ばかりの仙人先生、ぐしやと挫げて、ぴしやりとのめする。

是にぞ、氣を得て、返す刀、列位の黒道人に切附けると、ぐわさりと葉尖から崩れて来て、蚊  
帳を疊んだやうに落ちる。同時に前へ壁を築いて、蟲乎と立つ青仙人を、腰車に斬つて落す。拜  
打、輪切、袈裟掛、はて、我ながら、氣が冴え、手が冴え、白刃とともに、抜けつ潜りつ、刎越  
え、飛び交ひ、八面に渡つて、薙立て薙立て、切伏せると、ばさ／＼と倒れる毎に、凡そ一幅の  
黒い影が、山の腹へひら／＼と映つて、煙が分れたやうに消える、と其處だけ、はつと月が射し  
て、芭蕉のあとを、明るくなる。

果は丘の如く、葉を累ねた芭蕉の上に、全身緑の露を浴び、白刃に青き雫を流して、逆手に支  
いてほつと息する。

棲取りながら、其處へ来て、其の人が肩を並べた。

白刃を落して、其の時腕をさすつて憩ふ、小松原の手を取つて、

「昔だと、佛門に入る處だが、君は哲學を學つとる人だから、其にも及ぶまい。しかし、蒼沼は可怪しいな。」

「あゝ、嬉しい。」

と、山の端出でたる月に向つて、心ゆくばかり打仰いだ。背撓み、胸の反るまで、影を飲み光を吸ふやう、二つ三つ息を引くと、見る／＼衣の上へ膚が透き、眞白な乳が膨らむは、輝く玉が入ると見えて、肩を傳ひ、腕を繞り、遍く身内の血と一所に、月の光が行通れば、晃々と裳が揺れて、兩の足の爪先に、美しい綾が立ち、月が小波を渡るやうに、滑かに襷積を打つた。

啊呀と思ふと、自分の足は、草も土も踏んでは居らず、沼の中なる水の上。

今は憊うと、未だ消え果てぬ夫人に縋ると、靡くや黒髪、潑と薫つて、冷く、涼く、たら／＼と腕に掛る。

……小松原は、俯向けに蒼沼に落ちた處を、歸宅のほどが遅いので、醫師が見せに寄越した、正吉に救はれた。

車夫は沼の隅の物音に、提灯を差出したが、芭蕉の森に白刃が走る月影に恐をなして、暫時様子を見て居たと言ふ。

小松原が恢復して、此の話をした時、醫學士は盃を舉げて言つた。

星  
女  
郎

俱利伽羅峠には、新道と故道とある。所謂一騎落から礪波山へ続く古戦場は、其の故道で。是は大分以前から特別好物な旅客か、山伏、行者の類のほか、餘り通らなかつた。——處で、今度境三造の過つたのは、新道……天田越と言ふ。絶頂だけ徒歩すれば、俾で越された、其も一昔汽車が通じてから雑と十年になるから、此の天田越が、今は既に随分、好事。

暑中休暇に、何處か其の邊を歩行いて見よう。以前幾度か上下したが、其の後は多年麓も見舞はぬ、俱利伽羅峠を、と言ふに過ぎぬ。

けれども徒勞でないのは、境の家は、今こそ東京にあるが、もと富山縣に、父が、某の職を奉じた頃、金澤の高等學校に寄宿して居た。従つて暑さ寒さのよりくごとくに、度々俱利伽羅を越えたので、此の時志したのは、謂はば第二の故郷に歸省する意味にもなる。

汽車は津幡で下りた。市との間に、最う一つ、森下と云ふ町があつて、其處へも停車場が出来

るさうな、が、未だ其の運びに到らぬから、津幡は金澤から富山の方へ最初の驛。

間四里、聞えた加賀の松並木の、西東彼方此方、津幡までは殆ど家續まで、蓮根が名産の、蓮田が稲田より風薫る。で、然まで旅らしい趣はないが、此の驛を越すと竹の橋——源平盛衰記に

源氏の一手は樋口兼光大将にて、笠野富田を打廻り、竹の橋の搦手にこそ向ひけれ——とある、丁ど峠の眞下の里で。俱利伽羅を仰ぐと早や、名だたる古戦場の面影が眉に迫つて、驚破、松風も鯨波の聲、山の緑も草摺を揺り揃へたる數萬の軍兵。伏屋が門の卯の花も、幽靈の鎧らしく、背戸の井戸の山吹も、美女の名の可懐い。

これは舊とても異りはなかつた。しかし其頃は、走らす車、運ぶ草鞋、いざ峠にかゝる一息つため、此處に麓路を挟んで、竹の橋の出外れに、四五軒の茶店があつて、何處も異らぬ茶染、藍染、講中手拭の軒にひらりとある蔭から、東海道の宿々のやうに、きちんと呼吸は合はぬながら、田舎は田舎だけに聲繕ひして、

「お掛けやす。」

「お休みやす。」

それ、馬のすゝに調子を合はせる。中には若い媚めかしい聲が交つて、化粧した婦も居た。境も、往き還り奥の見晴しに通つて、縁から峠に手を翳す、馴染の茶店があつたのであるが、

此度見ると、可なり廣い其の家構の跡は、草茫茫、山を見通しの、つつと裏の小高い丘には、松が一本、野を守る姿に立つて、小さな墓の累つたのが望まれる。

由緒ある塚か、知らず、其處を旅人の目から包んで居た一叢の樹立も、大方切拂はれたのであらう、何處か、あからさまに里が淺くなつて、吾一人、草ばかり茂つた上に、影の濃いのも物寂しい。

其に、藁屋や垣根の多くが取拂はれた所爲か、峠の裾が、づらりと引いて、風にひだ打つ道の高低、畝々と畝つた處が、心覚えより早や目前に近い。

が、其處までは並木の下を、例に因つて、曝の松が高く、蔭が出来て涼いから、洋傘を疊んで支いて、立場の方を振返ると、農家は、さすがに有りのまゝで、遠い青田に、俯向いた菅笠もちらほらあるが、藁葺の色とともに、笠も日向に乾びて居る。

境は急に心細いやうになつた。前にも後にも、往來の人はなかつたのである。

偶と思出したことがあつて、三造は並木の梢——松の裏を高く仰いで見た。鶺鴒の尾の、しだり尾の靡きはせずや。……

往年、雨上りの朝、丁ど此の邊を通掛つた時、松の雪に濡色見せた、紺青の尾を豊に、樹の間の蒼空を潛りく、鶺鴒が急ぎもせず、翼で眞白な雲を泳いで、すいと伸し、すいと伸して、並木の梢を道づねになつた。可憐い其の姿を見るのも、又此の旅の一興に算へたのであつたから——其を思出して窺つたが……今日は見えぬ。

尙ほ前途の空を視めく、怒る日の高い松の上に、蟬の聲の喧しい中にも、峙して其の鶺鴒が居はせぬかと、仰いで幹をたゞきなどして、右瞻左瞻ながら、うかくと並木を辿る——大な蜻蛉の、眼をつけて行くのも知らずに。

やがて樹立が疎らになつて、右左兩方へ梢が展くと、山の根が迫つて來た。俱利伽羅の其風情は、偉大なる雲の峯が裾を擴げたやうである。

處へ、横雲の漾ふ狀で、一叢の森の、低く目前に顯はれたのは、三四軒の殖生の小屋で。路傍に沿うて、枝の間に梟の巢の如く並んだが、何處に礎を据ゑたとしもなく、元村から溢れて出たか、崖から墜ちて來たか、未來も、過去も、世は只假の宿と斷念めたらしい百姓家——其の昔、大名の行列は拜んだかはりに、汽車の煙には吃驚しさうな人々が住んで居よう。

朝夕の糧を兼ねた生垣の、人丈に近い若荷の葉に、野茨が白くちらく交つて、犬が前脚で屈きさうな屋根の下には、羽目へ掛けて小枝も拂はぬ青葉枯葉、松薪を幹と積んだは、今から冬の

用意をした、雪の山家と頷かれて、見るからに佻しい戸の、其の蜘蛛の巢は、山姥の髪のみだれなり。

一軒二軒……三軒目の、同じやうな茗荷の垣の前を通ると、小家は引込んで、前が背戸の、早や爪尖あがりになる山路との劃目に、桃の樹が一株あり、葉蔭に眞黒なものが、牛の背中。

此の畜生、仔細は無いが、思ひがけない、物珍らしさ。其のすんど切な、たら〜と濡れた鼻頭に、まざ〜と目を留めると、あの、前世を語りさうな、意味ありげな目で、熟と見据ゑて、むぐ〜と口を動かさず、ぺろりと横なめをした舌が圓い。

其の舌の尖を摺つて、野茨の花がこぼれたやうに、眞白な蝶が驟然と飛んだ。が、角にも留まらず、直ぐに消えると、ぱつと地の底へ潜つた状に、大牛がフイと失せた。……失せた……と思ふ暇もなしに、忽然として消えたのである。

「呀！」

聲を出して、三造はきよとんととして、何かに取摺まつたらしく、堅くなつて其處等を捻向く……と、峠とも山とも知れず、唯樹の上に樹が累なり、中空を蔽うて四方から押被さつて聳え立つ——其の向つて行くべき、まざ〜の縁の端に、のこ〜と天窓を出した雲の峯の尖端が、恰も空へ飛んで、幻にぼち〜残つた。牛頭に肖たとは愚か。

三造は悚然とした。

が、遁げ戻るでもなし、進むでもなく、無意識に一足出ると、何、何、何の事もない、牛は依然としてのつそりと居る。

一體、樹の間から湧いて出たやうな例の姿を、通りがかりに一見し、瞻り〜、つい一足歩いた、……其の機會に、件の桃の木に隠れたので、今でも眞正面へ一寸戻れば、立處に又消え失せよう。

蝶も牛の背を越したかな……左の胴腹に、ひら〜ひら。

「は、は、は。」

獨りで笑出した。

「先づ晝間で可かつた。夜中に是を見せられると、申分なく目をまはす。」

三

是より前、境は不圖、ものの頭を葉越に見た時、形から、名から、牛の首……と胸に浮ぶと、此の栗殻とは方角の反対な、加賀と越前の國境に、同じ名の牛首がある——其の山も二三度越えしたが、土地に古代の俤あり。麓の里に、鍛頭巾を取つて被き、薙刀小脇に搔込んだ、面には丹を

塗り、眼は黄金、髯白銀の、六尺有餘の大彫像、熊坂長範を安置して、観音扉を八文字に、格子も嵌めぬ祠がある。ために字を熊坂とて、俗に長範の産地と稱へる、巨盗の出處は面白い。祠は立場に遠いから、路端の清水の奥に、蒼く蔭り、朱に輝く、活けるが如き大盗賊の風采を、車の上からがたくと、横に視めて通つた事こそ。われ御曹子ならねども、此の夏休みには牛首を徒歩して、菅笠を敷いて對面せう、とも考へたが、あゝ、しばらく、此の栗殻の峠には、謂はれぬ可懐い思出があつたので、越中境へ足を向けた。――

處を、牛の首に出會つたために、寧ろ其の方が興味があつたかも知れないと、そゞろに心の迷つた端を、隱身寂滅、地獄が消えた牛妖に、少なからず驚かされた。

正體が知れてからも、出遊の地に二心を持つて、山靈を蔑にした罪を、慙懃に此の神聖なる古戰場に對つて、人知れず慚謝したのである。

立向ふ山の茂から、額を出して、ト差覗く状なる雲の峰の、如何に其の裾の廣く且つ大なるべきかを想ふにつけて、全體を鶴呑にして居る谷の深さ、山の高さが推量られる。

迎るほどに、洋傘さした蟻のやう――蟬の聲が四邊に途絶えて、何の鳥かカラ／＼と啼くのを聞くと、一寸其の嘴にも、人間は胸中を横脚へにされさうであつた。

谷が分れて、森が涼しい。

右手の谷の片隅に、前に見た牛の小家が、小さくなつて、樹立ありとも言はず、眞白に日が當る。

やがて、二分が處上つた。

坂路に……草刈か、鎌は持たず。自然薯穿か、鋏も提げず。地柄縞柄は分らぬが、いづれも手織らしい單衣を裾短に、草履穿で、日に背いたのは緩かに腰に手を組み、日に向つたのは額に手笠で、對向つて二人――年紀も同じ程な六十左右の婆々が、暢氣らしく、我が背戸に出たやうな顔色して立つて居た。

山逕の礮礮、以前こそあれ、人通りのない坂は寸裂、裂目に草生ひ、割目に薄の丈伸びたれば、蛇の衣を避けて行く足許は狭まつて、其の二人の傍を通る……肩は、一人と擦れ／＼になつたのである。

ト境の方に立つたのが、心持身體を開いて、頬の皺を引伸すやうな聲を出した。

「此の人はや。」

「おいの。」

と皺枯れた返事を一人が、其の耳の邊の白髪が動く。

「何處の人づら。」

「然ればいの。」

と聞いた時、境は早や二三間、前途へ出て居た。

で、別に振返らうともしなかつた——氣に留めるまでもない、居まはりには見掛けない旅の姿を怪しんで、咎めるともなく、聲高に饒舌つたらう、——其につけても、餘り往來のないのは知れた。

けれども、其からと云ふものは、遠い樹立の蔭に、朦朧と立つたり、間近な崖へ影が射したり、背後からざわ／＼と芒を搔分ける音がしたり、どうやら、件の二人の媼が、附絡つて居るやうな思がした。雑と半日の餘、他に人らしいものの形を見なかつたために、何事もない一對の白髪首が、深く目に映つて消えなかつた、と先づ見える。

四

蛸が谷に成つて、境は杉の梢を踏む。と峠は近い。立向ふ雲の峰は轟乎と洞を顯はして、灰色に大なる薄墨の斑を交へ、動かぬ稻妻を畝らした状は凄じい。が、山々の縁が迫つて、むく／＼とある輪廓は、霄との劃を蒼く、何處ともなく嵐氣が迫つて、幽な谷川の流の響きに、火の雲の炎の脈も、淡く紫に彩られる。

又振返つて見れば、山の裾と中空との間に挾まつて、宙に描かれた遠里の果なる海の上に、落ち行く日の紅のかゞみに映つて、其處に蟠つた雲の峰は、海月が白く淨べる風情。蟻を列べた並木の筋に……蛙の如き青田の上に……彼方此方同じ雲の峰四つ五つ、近いのは城の櫓、遠きは狼煙の餘波に似て、此處にある身は紙鳶に乗つて、雲の棧渡る心地す。

これから前は、坂が急に峻くなる。……以前車の通つた時も、空でないと曳上げられなかつた……雨降りには灌に成らう、縦に藥研形に崩込んで、人足の絶えた草は、横ざまに生え繁つて、眞直に杖ついた洋傘と、路の勾配との間に、殆ど餘地のないばかり、蔦蔓も葉の裏を見上げるやうに這懸る。

其は可い。

かほどの處を攀上るのに、敢て躊躇するのではなかつたが、不圖此處まで来て、出足を堰止められた仔細がある。

山の中の、恁る處に、流灌頂では得もあるまい。路の左右と眞中へ、草の中に、三本の竹、荒繩を結渡したのが、目の前を遮つた、——麓のもの、何かの禁厭かとも思つたが、紅紙をさした箸も無ければ、強飯を備へた盆も見えぬ。

「可訝いな。」



考へるまでもない、手取り早く有體に見れば、正に是、往來止。  
して見ると、先刻、路を塞いでイんだ、媼の素振も、通りがかりに小耳に挟んだ言の端にも、深い様子があるのかも知れぬ。……土地の神が立たせて置く、門番かとも疑はれる。  
が、往來止で済ましては居られぬ。もし其の意味に従へば、……一寸先へも出られぬのである。

尤も時経つたか、竹も古びて、繩も中弛みがして、草に引摺る。跨いで越すに、足を擧ぐるまでも無かつたけれども、路に着けた封印は、然う無雑作には破れなかつた。

前後を向しながら、密と其の繩を取つて曳くと、等閑に土の割目に刺したらしい、竹の根はぐら／＼として、繩がする／＼と手繰られた。慌てて放して、後へ退つた。——一對の媼が、背後で見張るやうにも思はれたし、繩張の動く拍子に、矢がパツと飛んで出さうにも感じたのである。いや、名にし負ふ俱利伽羅で、天にも地にも唯一人、三造が此の舉動は、われ／＼人間としては尋常事ではない。手に汗を握る一大事であつたが、山に取つては、蝗が飛ぶほどでもなからう。境は、今の騒ぎで、取落した洋傘の、寂しく打倒れた形さへ、まだしも娑婆の朋達のやうな頼母しさに、附着いて腰を掛けた。

峰から落し、谷から推して、夕暮が次第に迫つた。雲の峰は、一刷刷いて、薄黒く、坊主のや

うに、ぬつと立つ。

日が蔭つて、草の青さの増すにつけ、汗ばんだ單衣の縞の、くつきりと鮮明になるのも心細い

——山路に人の小ささよ。

蜻蛉でも来て留まれば、城の逆茂木の威嚴を殺いで、抜いて取つても棄つべきが、寂寞として三本竹、風も無ければ動きもせず。

蜩の聲がする……

五

カラ／＼と飴して、谷の樹立を貫ぬき／＼、空へ傳はつて、一寸途絶えて、やがて峰の方でカラカラと又聲が響く。

と、蜩の聲ばかりでなく、新に鐸の音が起つたのである。

ちりりんりと——然矣、鐸を鳴らす、と聞いただけで、夏の山には、行者の姿が想像されて、境は少からず頼母しかつた。峠には人が居る。

其の實、山靈が奏でるので、次第々々に雲の底へ、高く消えて行く類の、深祕な音楽ではあるまいか、と覺束なさに耳を澄ますと、確に、然も、段々に峰から此方に近くなる。

蛸が其に競はむとする如く、又頻に鳴き出す——足許の深い谷から、其の銀の鈴を揺上げると、峠から黄金の鐸を振下ろして、何處で結ばるともなく、ちり、ちり、と行交ふあたりは、目に見えぬ木の葉が舞ひ、霧が降る。

涼しさが身に染みて、鐸か、聲か、音か、蛸の、と聞き紛ふまで恍惚と成つた。目前に、はたと落ちた雲のちぎれ、鼠色の五尺の霧、ひらりと立つて、袖擦れにはつと飛ぶ。

「わつ。」

と云つて、境は驚駭の聲を揚げた。

遮る樹立の楯もあらず、霜夜に凍てたものの如く、山路へぬつくと立留まつた、其の一團の霧の中に、カラ／＼と鐸が鳴つたが、

「ほう——」

と梟のやうな聲を發した。面緒黒く、牙白く、兩の頬に胡桃を噛み破り、眼は大蛇の穴の如く、額の幅約一尺にして、眉は榮螺を並べたやう。耳まで裂けた大口を開いて、上から境を睨め着けたが、

「これは、」

と云ふ時、かつしと片腕、肱を曲げて、其の蟹の甲羅を面形に剝いで取つた。

四十餘りの總髪で、筋骨逞ましい一漢子、——又カラ／＼と鳴つた——鐸の柄を片手に持換へながら、

「思ひがけない處にござつた。頓と心着きませんで、不調法。」

と一揮して、

「面です……は、は、面でござる。」

と緒を手首に、可恐い顔は俯向けに、ぶらりと膝に蹴つたが、鐵で鑄たらしい其の嚴さ。逞ましい漢の手にもづしりとする。

「お驚きでございましたらうで、恐縮でござります。」

「はあ、」

と云ふと、一刎ね刎ねたまゝで、弾機が切れたやうに其處に突立つて居た身構が崩れて、境は草の上へ投膝で腰を落して、雲が日和下駄穿いた大山伏を、足の爪尖から見上げて黙る。

「別に、お怪我は？」

手を出して寄つて來たが、腰でも抱かう様子に見えた。

「怪我なんぞ。」

境は我ながら可笑くなつて、

「生命にも別條はありません。」  
「重畳でござる。」

と云ふ、落着いて聞くと、聲のやゝ掠れた人物。

「しかし大丈夫、立派な處を御目に懸けました。何ですか、貴下は、是から、」

「然やう、竹の橋をさして下山いたすでございます、貴邊はな。」

境は振向いて峠を仰いだ。目を突くばかりの坂の葎に、竹はすつくと立つて居る。

六

「え、日脚は十分、これから峠をお越しになつても、夏の日は暮れますまい——が、其の事でござる、……然やう、其の儀に就いて、」

境の前に蹲んだ時、山伏は行衣の胸に堆い、鬼の面が、襟許から片目で睨むのを推入れなどして、

「實は、貴邊よりも私がお恥かしい。臆病から致して恚やうなものを持出しましたぞ。」

其と申すが、矢張此の往來止の繩張でございまするがな。此處ばかりではなうて、峠を越しました向うの坂、石動から取附の上り口にも、ぴたりと封じ目の墨があるでござります。

仔細あつて、私は、此の坂を貴邊、眞暗三寶驅下りましたで、此方の此の繩張は、今承りますまで目にも入らず、貴邊がお在なされる姿さへ心着かなんだでござります。

が、彼方のは、風説にも聞きますれば、私も見ました、と申しますのが、其處から然まで隔てませぬ、石動の町を此の峠の方へ、人里離れた處に、山籠りを致して居ります。」

不動堂の先達だと云ふ。それで其の鐸も、雲のやうな行衣も解めた。

「御免下され、」

と此處で、鐸を倒に腰にさして、袂から、ぐつたりした、油臭い、吠の煙草入を出して、眞鍮の煙管を、ト隔てなく口ごと持つて来て、蛇の幻のあらはれた、境の吸ふ巻莖で、吸附けながら、「赫と氣ばかり上つて、雑と一日、好きな煙草も能う喫みません。世に推事と云ふは出来ぬもので、此がな、腹に底があつてした事ぢやと、うむと堪へるでござりませうが、好事半分の生兵法、豪く汗を掻きました。」

「峠に何事があつたんですか。」

「然れば。」

すばくと二三服、然も旨さうに立續けた行者は、矢繼早に乙矢を番へて、

「——ございました。」

「何んな事ですか。」

少し急込んで聞きながら、境は楯に取つた上坂を見返つた。峠を蔽ふ雲の峰は落日の餘光に赤し。

行者の頬も夕焼けて、

「順に申さんと餘り唐突でございませう——一體恚やうでございませう。」

峠で力餅を賣りました、三四軒茶屋旅籠のございませう、あの廣場な、……俗に猿ヶ馬場——以前上下の旅人で昌りました時分には、何が故に、猿ヶ馬場だか、頓と人力車の置場のやうでござりましたに、御存じの汽車が、此の裾を通るやうになりましたからは、富山の樂賣、城端のせり呉服も、碌に越さなくなりまして、年一年、其の寂れ方と云ふものは……それこそ又、猿どもが寄合場になつたでございませう。

處で、峠の茶屋連中、山家ものでも商人は利に敏い——名物の力餅を乾餅にして貯へても、活計の立たぬ事に疾く心着いて、どれも竹の橋の停車場前へ引越しまして、袖無しのちゃん／＼こを、裾の長い半纏に着換へたでござります。扱雪國の山家とて、桁梁、巖丈な本陣擬、百年經つて石には成つても、滅多に朽ちる憂はない。其だけに又、盜賊の棲家にでもなりはせぬか、と申します内に、一夏、一日晩方から、や、もう可恐く羽蟻が飛んで、麓一圓、目も開きませぬ。こ

れはならぬ、と言ふ、口へ入る、鼻へ飛込む。蚊帳を釣つても寢床の上をうよ／＼と這廻る——さ、其の夜あけ方に、あれ／＼峠を見され、羽蟻が黒雲のやうに眞直に、と押魂消る内、焼けました。

残つたのが唯た一軒。

いづれ、山持ぎのものか、乞食どもの疎勿であらう。焼残つた一軒も、其の儘にして置いては物騒ぢやに因つて、上段の床の間へ御佛像でも据ゑたなら、構は大い。其のまゝ題して、俱利伽羅山焼残寺が一院、北國名代の巡拜所——

と申す説もござりました。」

七

「處が、買手が附いたのでござりましてな。随分廣い、山ぐるみ地所附だと申す事です。」

行者が一寸句切つたので、

「別荘にでもなりましたか。」

煙管を揮つて、遮る如く、

「否、其の儀なら仔細はござらん、又何處の好事ぢやと申して、そんな峠へ別荘でもござります

まい。……先づ理窟は措いて、誰だか買主が分らぬでございます。第一其の話がござつてから、二人や三人、ぼつ／＼峠を越したのもございますが、一向に人の住んで居る様子は見えぬと言ふ事で。但稀代なのは、何時の間にやら雨で洗つたやうに、焼跡らしい灰もなし、焚さしの材木一本横はつて居らぬばかりか、大風で飛ばしたか、土礎石一つ無い。すらりと飯櫃形の猿ヶ馬場に、吹溜まつた落葉を敷いて、閑々と静まりかへつた、埋れ井戸には桔梗が咲き、薄に女郎花が交つたは、薄彩色の褥のやうで、上座に猿丸太夫、眷属づらりと居流れ、連歌でもしさうな模様ぢや。……(焼撃をしたのも九十九折の猿が所爲よ、道理こそ、柿の樹と栗の樹は焼かずに背戸へ残したわ。……などと申す。

山家徒でござるに因つて、何か一軒家を買取つたも、古猿の化けた奴。古此の猿ヶ馬場には、渾名を熊坂と言つた大猿があつて、通行の旅人を追剥し、石動の里へ出て、刀の鏝で小豆餅を買つたとある、と雪の爐端で話が積る。

唯其處等白いものばかりで、雪上蔭は白無垢ぢや……なんぞと言ふ處から、袖裾が出来たものと見えまして、近頃峠の古屋には、世にも美しい婦が住ふ。

人が通ると、猿ヶ馬場に、むら／＼と立つ、靄、霞、霧の中に、御殿女中の装ひした婦の姿がすつと立つ——

見たものは命がない。

さあ、其の風説が立ちますと、其から此方兩三年、悪いと言ふのを強ひて越して、麓へ下りて煩ふのもあれば、中には全く死んだもござる。……」

「眞個？」

とハタと巻蓑を棄てて、境は路傍へ高く居直る。

行者は、掌で、鐸の蓋して、腰を張つて、

「然れば其の儀で。——

隣村も山道半里、谷戸一里、何時の幾日に誰が死んで、其の葬式に参つたと云ふでもござらぬ、が杜鵑の一聲で、あの山、其の谷、それ／＼に聞えまする。

地體、一軒家を買取つた者と云ふのも、猿ぢや、狐ぢや、と申す際に、停車場前の、今、餅屋で聞か、其の筋へ出て尋ねれば、皆目知れぬ事はござるまい。が、人間其處まではせぬもので、火元は分らず、火の粉ばかり、ワツぱと申す。

然らぬだに往來の途絶えた峠、怪い風説があるために、近來殆んど人跡が絶果てました。

處がな、つい此の頃、石動在の若者、村相撲の關を取る力自慢の強がり、田植が濟んだ祝酒の上機嫌、雨霽りで元氣は可、女小兒の手前もあつて、是見よがしに腕を扼つて——己が一番見

届ける、得物なんぞ、何、手摺みだ、と大手を振つて出懸けたのが、山路へかゝつて、ハッさがりに、私ども御堂へ寄つたてござります。

其處で、御神酒を進せました。あびらうんけんそわかと唱へて、押頂いて飲んだですて……

(お氣をつけられい。)

と申して、石段を送つて出ますと、坂へ立身上りに片足を踏伸ばいて、

(先達、譯あねえ。)

と向顔卷をしたであります——はて扱、此の氣構へでは、何うやら覺束ない、と存しながら、連にはぐれた小相撲と云ふ風に、源氏車の首拔浴衣の諸肌脱、素足に草鞋穿、おんく端折で、てくく峠へ押上る後姿を、日脚なりに遠く蔭るまで見送りましたが、何が、貴邊、

「え、其の男は？」

八

先達は澁面して、

「先づ生命に別條のないばかり、——日が暮れましたで、私御本堂へだけ燈明を點けました。で、縁の端で……然れば四日頃の月を恠う、」

手廂して、

「森の間から視めて居ますと、けた、ましい音を立てて、ぐるく舞ひぢや、二三度立樹に打着りながら、件の其の晝間の妖物退治が、驅込んで参りました。

(お先達、水を一口。)

と云ふと、のめすつて、低い縁へ、片肱かけたなり尻餅を支いたが、……月明りで見ると所爲で

はござらん、顔の色、眞蒼でな。

すぐに岩清水を月影に透かして、大茶碗に汲んで進めた。

(明王のお水でござる……確乎なされ。)

と申したが、此方で口へ當がつて遣らずには、震へて飲めなんだでござります。

漸と人心地になつた處で、本堂傍の休息所へ連込みました。

處で様子を尋ねると、(其、其の森の中、垣根越、女の姿がちらくする、わあ、追懸けて來た、入つて來る……閉めて欲しい。)と云ふで、ばたく小窓など塞ぎ、赫と明くとも参らんが、煤けたなりに洋燈も點けたて。

少々落着いての話では——勢に任せて、峠をさして押上つた、途中別に仔細はござらん。元來、其處から引返さうと云ふではなく、猿ヶ馬場を、向うへ……

と云ふのが、……此方で、

と煙管の尖で草を壓へ、

「峠越し竹の橋へ下りて、汽車で歸らう了簡。唯々、山一つ越せば可いわ、で薄、燒石、踏しだいに、……薄暮合——猿ヶ馬場はがらんとして、中に、すつくりと一軒家が、何か大牛が蟠まつたやうな形。人が開けたとは受取れぬ、兩戸が横に一枚と、入口の大口の半分ばかり開いた様子が、口をぱくりと……それ、遣つた鹽梅。根太ごと、ぐわたくと動出しも爲兼ねんですて。

其奴を睨みつけて、右の向顔巻、大肌脱で通りかゝると、キチキチと草が鳴る……否、何か鳴くですぢや、……

蟋蟀にしては聲が大いぞ——道理かな、颯、彼の颯な。

颯でござるが、仰向けに腹を出して、尻尾をぶるりと遣つて、同一處をころころ廻る。

つい、路傍の足許故に、

(叱!叱!)

と追つて見たが、同一處を一寸も動かさず、四足をびりりと伸べつ、縮めつ、白い面を、目も口も分らぬ眞仰向けに、草に擦つけくつて轉げる工合が、どうも狗ころの戯れると違つて、焦茶色の毛の火になるばかり、悶え苦むに相違ござらん。

大蛇でも居て狙ふか、と若い者些と恐気がついたげな、四邊に紛ひさうな松の樹もなし、天窓の上から、四斗樽ほどな大蛇の頭が覗くと云ふでもござるまい。

尙ほ熟と瞻ると、何やら陽炎のやうなものが、颯の體から、すつと傳り、草の尖をひらくと……細い波形に靡いて居る。はてな、で、其の筋を据眼で、續く方へ辿つて行くと……いや、解めました。

右の一軒家の軒下に、恚う崩れかゝつた區劃石の上に、ト天を睨んだ、腹の上へ兩方の眼を凸、シヤ!と構へたのは墓で——手ごろの澤庵壓ぐらるあらうと言ふ曲者。

吐く息恰も虹の如しで、かツと颯に吹掛ける。此とても、蚊や蜂を吸ふやうな事ではござらん、式の如き大物をせしめるで、垂々と汗を流す。濡色が蒼黄色に夕日に光る。

怪しさも、凄さもこれほどなら朝茶の子、此奴見物と、裾を捲つて、蹲み込んで、(負けるな、ウシ、)

などと面白半分、颯殿を煽つたが、最う弱つたか、キチキチと云ふ聲も出ぬ。だんくんに、影が薄くなつたと申す事です。

「其の内に、同じく伸つ、反つ、背中を橋に、草に頸窪を擦りつけながら、慙う、じり、じりと手繰られる體に引寄せられて、心持動いたげにございました。發奮んで、する／＼と來た奴が、若衆の足許で、ころりと蹴ると、クシヤツと異變な聲を出した。

此奴喚がされては百年目、ひよいと立つて退つたげな、うむと呼吸を詰めて居て、しばらくして、密と嗅ぐと、芬と——貴邊。

此處が可訝い。

何とも得知れぬ佳い薫が、露出の胸に冷りとする。や、これがために、若衆は清涼劑を飲んだやうに氣が變つて、今まで傍目も觸らずに居ました。墓の虹を外して、フト前途を見る、と何と、一軒家の門を離れた、峠の絶頂、馬場の眞中、背後へ海のやうな蒼空を取廻して、天涯に衝立めいた醫王山の巔を背負ひ、颯と一幅、障子を立てた白い夕靄から半身を顯はして、錦の帯は確に見た。……婦人が一人……御殿女中の風をして、」

——顔を合はせた。——

「御殿女中の？……」

と三造は聞返す。

「お聞きなされ、其の若衆の話でござつて——ト見ると、唇がキラ／＼と玉蟲色、……其が、ぼつちり燃えるやうに紅くなつたが、莞爾したげな。

若衆は、一支もせず、腰を抜いたが、手を支く間もない、仰向けに引くりかへる。獨りで手足が動く、ばたくはじまる。はッあア、馳の形と同一ぢや。吐胸を突くほど、足が窘む、手が縮まる、五體を手毬にかゝられる……六萬四千の毛穴から血が颯と霧に成つて、件の其の紅い唇を染めるらしい。草に頸を擦着け、

(お助け下さい、お助け！)……

と頭で尺取つて、じり／＼と後退り、——何うやら些と、緊めつけられた手足の筋の弛んだ處で、馬場の外れへ俵轉がし、むつくりこと天窓へ星を載せて、山端へ突立つ、と目が眩んだか、日が暮れたか、四邊は暗くなつて何も見えぬ。

で、見返りもせず、逆落し、舊の坂をどゞツツと驅下りる——いや最う途中、追々ものの色が分るにつけ、山茨の白いのも女の顔に顯はれて、呼吸も吐けずに遁げた、——と申す。

若衆は話の中も、わな／＼と齒の根が合はぬ。

(生血を吸はれた、お先達、ほう、腕が冷い、氷のやうぢや。)

と引被せて遣りました夜具の襟から手を出して、情なさうに、銀の指環を視める處が、丁と早



や大病人でな。

お不動様の御像の前へ、かん／＼燈明を點じまして、其夜は一晚、私が附添つたほどでござります。

峠越し汽車に乗つて歸ると云うたで、其の夜は歸らないのを、村の者も、然まで案じずに居ましたげな。午過ぎてから四五人連立つて様子を参つたのが、通りがかり、どや／＼御堂へ立寄りましたに因つて、豪傑は其の連中に引渡して、事済んだでござります。

が、唯今もお尋ねの肝腎の其の怪い婦人が、姿容、これがそれ御殿女中と申す一件——振袖か詰袖か、裙模様でも着てござつたか、年紀ごろは、顔立は、髪は、島田とやらか、それとも片はづしと云ふやうなことから、委しく聞いて見たでござりますが、當人其の邊は全然見境がござりません。

何でも御殿女中は御殿女中で、薄ら蒼いに何處か黄味がかつた處のある衣物で、美しく底光りがしたと申す。これはな、墓の色が目映つて、其が幻に出たらしい。

して見ると、風説を聞いて、風説の通り、御殿女中、と心得たので、其の實確にどんな姿だか分りませぬ。

さあ、是沙汰は大業で、……

(朝疾う起きて空見れば、

口紅つけた上臈が、)

と村の小兒は峠を視める。津幡川を漕ぐ船頭は、(笄さした黒髪が、空から水に映る)と申す、

峠の婦人は、里も村も、ちら／＼と遊行なさるゝ……

十

「其の替り村里から、此の山へ登るものは、ばつたり絶えたでありますな。」

「それで、」

聞惚れて居た三造は、此處ではじめて口を入れたが、

「貴下が、探險——山開きをなさいましたんですね。」

先達は額に手を當て、膨れた懷中を伏目に覗いて、

「御意で、恐縮をいたします……然やうな行力がありますか。はッはッ、尤も足は達者で、御覽の通り日和下駄ぢや、こゝらは先達めきましたな。立山、御嶽、修行にならば這摺つても登りますが、祕密の山を人助けに開かうなどは以ての外の事でござる。」

又早い話が、此の峠を越さねばと申して、多勢のものが難澁をするでもなし、で、聞いたまゝ、

のお茶話。秋にでもなつて、朝ぼらけの山の端に、不圖朝顔でも見えましたら、扱こそく高峰の花と、合點すれば濟みます事。

處を、年効もない、密と……様子が見たい漫ろ心で、我慢が成らず企てました。

其にいたせ、飛んだ目には逢ひたうござらん心得から、用心のために思ひつきましたは此の物、な、御覽の通り、古くから御堂の額面に飾つてござります獅嚙面、——待てく對手は何にもせよ、此の方鬼の姿で參らば、五枚鍔を頂いたも同然、同じ天窓から一口でも、變化の口に幅つたからうと、緒だけ新しいのを着けた奴を、苛高がはりに手首にかけて、ト先づ、金剛杖を突立てて、がたくと上りました。約束通り、先づ何事もなく、峠へか、つたでござります。」

「猿ヶ馬場へ、」

「然やうで、立場の焼跡へ、」

「はあ成程。」

「繩張のあります處から、此處ぞと最早や面を装ひ、チャクと黒鬼に構へました。

仔細なく、鼻の穴から麓まで見通し、潤と睨んだ大の眼は、此處の、」

と額に皴を寄せて、

「汗を吹抜きの風通し……然して難澁にもござらなんだが、其でも素面のやうではない。一人前、

顔だけ背負つて歩行く工合で、何となく、坂路が抄取りません。

馬場へ懸ると、早や日脚が摺つて、一面に蔭つた上、草も手入らずに生え揃ふと、綺麗に敷くでござりましてな、成程、早咲の桔梗が、ちらほら。は、あ、其處らが埋井戸か……薄がざわざわと波を打つ。又其の風の冷たさが、颯と魂を濯ふやうな爽快いだものではなく、氣の所爲か、ぞくぞくと身に染みます。

おのれ、と心を先づ丹田に落つけたのが、氣ばかりで、炎天の草いきれ、今鎮まらうとして、這廻るのが、むらくと鼠色に畝つて染めるので、變に幻の山を踏む——下駄の齒がふわくと浮上る。

さあ、恚うなると、長し短し、面被りでござるに因つて、眼は明いが、面は眞暗、丁と夢の中に節穴を覗く——先づ鹽梅。

それ、躓くまい、見當を狂はすなと、俯向きざまに、面をぱくく、鼻の穴で撓める様子が、クン、クンと嗅いで、

(やあ人臭いぞ。)

と吐きさうな。是がさ、峠に唯一人で遣る舉動ぢや、我ながら攫はれて魔道を一人旅の異變な體。」

「眞個……ですね。」

と三造は頷いたのである。

「な、貴邊、こりや佯やうな態をするのが、既にものに魅せられたのではあるまいか。はて、宙へ浮いて上るか、谷へ逆様ではなからうか、などと怯氣がつくと、足が窘んで、膝がつくり。ヤ、ヤ、此のまんまで、窮いては山車人形の土用干——堪らんと身悶えして、何のこれ、若衆でさへ、婦人の姿を見るまでは、向願巻が弛まなんだに、苟も行者の身として、——」

十一

「御尤ですね。」

些とこれが不意だつたか、先達は、はたと詰つて、擦たい顔色で、

「痛入ります、苟も行者の身として……其のしだらで、」

境は心着いて、氣の毒さうに、

「否、否。」

「何、私も其の氣で仰有つたとは存じませぬがな、はッはッはッ。

笑事ではござらぬ。うむと扱て、勇氣を起して、其のまゝ驅下りれば驅下りたであります、

せつかくの處へ運んだものを、唯山を越えたでは、炬燵櫓を跨いだ同然、待て〜禁札を打つて、先達が登山の印を残さうと存じましたで、携へました金剛を、一番突立てて置かう了簡。

薄の中へぐいと入れたが、ずぶりと參らぬ。草の根が張つて、ぎし〜云ふ、こじつたが刺りません。曳と杖の尖で捏ねる内に、何の花か、底光りがして艶を持った黄色いのが、右の突捲りで、薄なりに、ゆら〜揺れたと思ふと、……」

「お〜！」

「得も言はれぬ佳い匂がしました。はてな、あの一軒家の戸口を覗くと、ちらりと見えた——や、其の艶麗なことを申すものは。——」

時ならぬ月が廂から衝と出たやうに、ぱつと目に映ると云ふと、手も足も突張りました。

必ず、どんな姿で、どんな顔立ちやなどとお尋ね御無用。まだ〜若衆の方が間違ひにもいたせ、衣服の色合だけでも覚えて来たのが目つけものぢや。いやはや、私の方は唯颯と白いものが一軒家の戸口に立つたと申すまでで——衣服が花やら、體が雪やら、然やうな事は眞暗三寶、然も家の内の暗い處へ立たれた工合が、牛か、熊にでも乗られたやうでな、背が高い。

(鬼ぢや)

と、私一つ大聲を上げました。

(鬼ぢや、鬼ぢや。)

と、恠うぬつと腕を突張つた。金剛杖を棄置いて、腰の据らぬ高足を挫と踏んで、躍上るやうに其の前を通つた、が、可笑い事には、對方が女性ぢやに因つて、何時の間にか、自分ともなく、名告が慇懃になりましたな。……

(鬼でござる。)

と夢中で喚いて、何うやら無事に、猿ヶ馬場は抜けました。で、後は此の坂一なだれ、轉げるやうに驅下りたでございます。――

處で、先刻の不調法、

と息を吐き、

「何とも、恥を申さぬと理が聞えませぬ、仔細は恠うでござります――が、さて同一人間……も變なれども、此の際……とでも申すかな、其の貴邊を前に置いて、今お話をします段になると云ふと、いや、我ながら餘りな慌て方、此方こそ異形な扮装をしましたけれども、彼方は何にせよ女體でござる。風説の通り、あの峠茶屋の買主の、何處の嗜好な御令嬢が住居いたさるゝでも理は聞える。よしや事あるにもせい、いざと云ふ時に遁出しましたも可ささうなものぢやつたに……」

……と申すが矢張、貴邊にお目に掛りましてからの分別で。ぱつと美しいもので目が眩みました途端には、唯我を忘れて、

(鬼ぢや。)

と拳を握りました。

是だけでは、能う御合點はなりません、私其の驚き方と申すものは、變つた處に艶麗な女中の姿とだけではござらぬ。日の蔭りました、俱利伽羅峠の猿ヶ馬場で、山氣の凝つて鼠色の靄のかゝりました一軒家、廂合から白晝、時ならぬ月が出たのに仰天した、と、先づ御推量が願ひたい――幾干か、其の心持が……お分りになりませうかな。」

十一

「分りました。」

と三造は衣紋を合はせて、

「何ですか、其の一軒家と云ふのは、以前の茶屋なんぞでせう、左側の……右側のですか。」

「御存じかな。」

「毎度通つて知つて居ます。」

「ならば御承知ぢや。右側の二軒目で、鍵屋と申したのが焼残つて居りますが。」  
「鍵屋、——二軒目の。」

と云つて境は俯向いた。峠に残つた一軒家が、其であると聞くまでは、或は先達とともに、舊來た麓へ引返さうかとも迷つたのである。

が、思ふ處あつて、恚う聞くと直ぐに心が極つた。

様子は先達にも見て取られて、

「え、鍵屋なら、お上りになりますかな。」

「別に、鍵屋ならばと云ふのぢやありませんが。これから越します。」

と云つて、別離の會釋に頭を下げたが、其處に根を生して、傍目も觸らず、黙つて居る先達に、氣を引かれずには濟まなかつた。

「悪いんですか、参つては。」

山伏は押眠つた目を瞬いて開けた。三造を右瞻左瞻で、

「お待ち下さい。血氣に逸り、我慢に推上らうとなさる御仁なら、お肯入れのないまでも、お留め申すが私年効ではあります、お見受け申した處、悪いと言へば、それでもとはおつしやりさうもない。其の御心得なれば別儀ござるまいで、必ず御無用とは申上げん。」

峠で其の婦人を見るものは……云々と恐るべき風説はいたすが、現に、私とても御覽の如く別條はないやうで、……折角ぢや、一層のこととお出が宜しい。」

「あ、それは何うも難有い。」

と三造は禮を云ふ。許されたやうな氣がしたのである。

「さ、さ、」

先達も立構へで、話の中に撈つて落した道芝の、帯の端折目に散りかゝつた、三造の裾を二ツ三ツ、煽ぐやうに拂いてくれた。

「處で、」

顔を振つて四邊を見た目は、何方を向いても、峰の緑、處々に雲が白い。

「此の日脚ぢや、暮切らぬ内峠は越せます、が坂は暗くなるでござらう。——急ぎの旅ではなからうで、手前お守りをいたす、麓の御堂で御一泊のやうに願ひます。無事にお越しの御様子も伺ひたい。留守には誰も居らず、戸棚には夜具一組、蚊帳もござる。」

「私は、急いで、竹の橋まで下りますで、汽車でぐるりと一廻り、直ぐに石動から御堂へ戻ると、貴邊はまだ上りがある。事に因ると、先へ歸つて茶を沸して相待てます。其が宜しい、然うなさつて。あ、御承知か。重疊々々。」

就きましては、

かさ／＼と胸を開いて、仰向けに手に据ゑた、鬼の面は、紺青の空に映つて、山深き徑に幽なる光を放つ。

「先生方には唯の木の面形でござれども、現に私が試みました。驚破とある時、此の目を通して何事も御覧が宜しい。さあ、お持ちなさるやう。」

三造は猶豫ひつつ、

「しかし、御重寶、」

「否、御役に立てば本懐であります。」

即ち取つて、帽子をはづして、襟にかける、と先達の手に鐸が鳴つた。

「御無事で、」

「然やうなら。」

朔の聲に風颯と、背を押上げらるゝが如く境は頭を峠に上げた。雲の峰は縁を淺葱に、鼠色の牡丹をかさねた、頂白くキラ／＼と黄金の條の流れたのは、月が其の裡に宿つたらう。高嶺の霞に咲くと云ふ、金色の葶の野を、天上遙かに仰いだ風情。

西山日没東山昏。旋風吹馬馬踏雲。――

低聲に唱ひかけて、耳を澄ますと、鐸の音は梢を揺つて、薄暗い谷に沈む。

十三

女巫澆酒雲滿空。玉爐炭火香縹緲。海神山鬼來座中。紙錢窸窣鳴颯風。相思木帖金舞鸞。

攢蛾一暎重一彈。呼星召鬼歆杯盤。山魅食時人森寒。

境の足は猿ヶ馬場に掛つた。今や影一つ、山の端に立つのである。

終南日色低平灣。神兮長有有無間。

越の海は、雲の模様隠れながら、青い絲の縫目を見せて、北國の山々は、皆黄昏の袖を連ねた。

「神兮長有有無の間にあり。」

胸を見ると、背中まで抜けさうな眼が潤と、鬼の面が馬場を睨んで、此處にも一人神がイむ、三造は身自から魔界を辿る思がある。

郎女星

峠の此の故道は、聞いたよりも草が伸びて、古沼の干た、蘆の茂かと疑ふばかり、黄にも紫にも咲交つた花もない、――其は夕暮の所爲もあらう。が第一に心懸けた、目標の一軒家は靄も掛らぬのに屋根も分らぬ。

場所が違つたかとも怪しんだ、けれども、踏迷ふ路續きではない。で愈々進むとしたが、ざわざわ分入らねばならぬ雑草に遮られて、いざ、と言ふ前、しばらくを猶豫うて立つと、風が誘つて、時々さらさら〜と、其處等の鳴るのが、蟲の聲の交らぬだけ、餘計に響く。……  
ひよつこり肌腕の若衆が、草鞋穿て出て来さうでもあるし、續いて、山伏がのさ〜と顯はれさうにもある。大方人の無い、こんな場所へ来ると、聞いた話が實際の姿になつて、目前へ幻影に出るものかも知れぬ。

現にそれ、それ〜、若衆が、山伏が、ざわ〜と出て、すつと通る——通ると……其の形が幻を束ねた雲になつて、颯と一つ谷へ飛ぶ。程もあらず、むつくりと湧いて来て、ふいと行くと、何時の間にか、草の上へちぎれ〜に幾つも出る。中には動かすに凝と留まつて、裾の消えさうな山伏が、草の上に漂々として吹かれもやらず浮くのさへある。

又ふわりと来て、ぱつと胸に當つて、はつとすると、他愛もなく、形なく力もなく、袖を透かして背後へ通る。

三造は誘はれて、ふら〜と成つて、怯乎としたが、つら〜見ると、むかうに立つた雲の峰が、はら〜と解けて山中へ擴がりつつ、薄の海へ波を亂して、白く翻つて、然も次第に消えるのであつた。

「あ、然うか……」

山伏は大跨で、やがて麓へ着いた時分、と、足許の杉の梢にか、つた一片の雲を透かして、里可懐く麓を望んだ……時であつた。

今昇つた坂一畝り下つた處、後前草がくれの徑の上に、波に乗つたやうな趣して、二人並んだ姿が見える——齊く雲のた、すまひか、あらず、其の雲には、淡いが彩があつて、髪が黒く、俤が白い。帯の色も、其の立姿の、肩と裾を横に、胸高に、細りと劃つて濃い。

道は二町ばかり、間は隔つたが、翳せば頓て掌へ、其の黒髪が薫りさう。直ぐ眉の下に見えたから、何となく顔立ちの面長らしいのも想像された。

同時に、其の傍の最う一人に、瞳を返して、三造は眉を擡めた。正しく先刻の婆らしい。其が、黒い袖の裾短かに、皺の想はる、手をぶらりと、首桶か、骨瓶か、風呂敷包を一包提げて居た。

境が、上から伸懸るやうにして差覗くと、下で枯枝のやうな手を出した。婆が其の手を、上に向けて、横ざまに振つて見せた。

確かに暗號に違ひない、然も自分にするのらしい。

「え、」

胸倉を取つて小突かれるやうに、強く此方へ應へるばかりで、見るなか、行けか、去れだか、

來いだか、其の意味が薩張分らぬ。其の癖、烏が横啣へにして飛びさうな、厭な手つきだと染々感じた。

十四

其の内に……婆の手の傍から薄が靡いて、穂のやうな手が動いた。密と招いて、胸を開くと、片袖を搔込みながら、腕をしなやかに、其の裾のあたりを教へた。

其處へ下りて来よ、と三造に云ふのである——

意味は明かに、然も優しく、美しく通じたが、待て、何故下へ降りよ、と諭す？

峠を越すな、進んでは成らぬ、と言ふか。自分我に爾か云ふものが、婦人の身で何うして来た、……さて降りたらば何とする？すん／＼行けば何とする？

凡て恠る事に手間隙取つて、兎角うするのが魔が魅すのである。——構はず行かう。

「何だ。」

谿間の百合の大輪がほのめくを、心は残るが見棄てる氣構へ。踵を廻らし、猛然と飛入るが如く、葎の中に躍込んだ。ざ、ざ、ざら／＼と雲が亂れる。

山路に草を分ける心持は、水練を得たものが千尋の淵の底を探るにも似て居よう。どつと瀧を

浴びたやうに感じながら、殆ど盲蛇で慕如に突いて出ると、颯と開けた一場の廣場。前面にぬつくり立つた峯の方へなぞへに高い、が、其の峰は俱利伽羅の山續きではない。越中の立山が日も月も呑んで眞暗に聳えたのである。丁ど廣場と其の頂との境に、一條濃い靄が懸つた、靄の下に、九十九谷に介まつた里と、村と、神通、射水の二大川と、富山の市が包まる。

然ればこそ思ひ違へた、——峠の立場は此處なので。今し猿ヶ馬場ぞと認めめたのは、道を急いだ目の迷ひ、未だ其處までは進まなかつたのであつた。

紫に桔梗の花を織出した、緑は氈を開いたやう。こんもりとした果には、山の瘦せた骨が白い。岸破と、又さつくりと、見覺えた岩も見ゆる。一本の柿、三本の栗、老樹の桃も彼方此方に、夕暮を涼みながら、我を迎ふる風情にイむ。

と見れば鍵屋は、礎が動いたか、四邊の地勢が露出しに成つたためか、向う上りに、づ、んと傾き、大船を取つて一艘頂に据ゑたる如く、嚴に且寂しく、片廂をぐいと、山の端から空へ離して、舳の立つた形して、立山の波を漕がむとす。

境は可懐げに進み寄つた。

「や！」

其の門口に、美しい清水が流るゝ。否、水のやうな棲が溢れて、協明の肌ちら／＼と、白い撫



子の亂咲を、帯で結んだ、浴衣の地の薄お納戸。

すらりと草に、姿横に、露を敷いて、雪の腕力なげに、ぐたりと投げた二の腕に、枕すともなく艶かな鬢を支へた、前髪を透く、清らかな耳許の、幽に洩る、俯向き形、膝を折つて打伏した姿を見た。

冷い風が、衝と薫つて吹いたが、キ、と鳴く鼈も聞えず、其の婦人が蝦蟆にも成らぬ。

耳が赫と、目ばかり冴える。……冴えながら、草も見えず、家も暗い。が、其の癖、件の姿ばかりは、がつくり伸ばした頸の白さに、毛筋が揃つて、後れ毛のはらりと戦ぐのまで、瞳に映つて透通る。

これを見棄てては驅抜けられない。

「もし……」

と言ひも敢へず、後方へ退つて、

「是だ！」

とつい出た口許を手で壓へる。あとから、込上げて、突ばじけて、

「……顔を見ると……のつぺらぼう——」

と思はず又獨言。我が聲ながら、變に掠れて、まるで先刻の山伏の音。

「今も今、手を掉つた……あ、頻りに留めた……」  
と思ふと、五體を取つて緊附けられる心地がした。

十五

けれども、未だ幸に俯向けに投出されぬ。

「觸らぬ神に祟なし……」

非常な場合に、極めて普通な諺が、記憶から出て諭す。諭されて、直ぐに踏出して去らうとし

たが……病難、危難、もしや——とすれば、此のまゝ見棄つべき次第でない。

境は後髪を取つて引かれた。

洋傘を支いて、怯々其の胸に掛けた異形の彫刻物を又視めた。——今しがた、ちぎれ雲の草を

掠めて飛んだ如く、山伏にて候ものの、此處を過つた事は確である。

確で、然も其の顔には、此の鬼の面を被つて居た。——時に、門口へ露はれた婦人の姿を鼻の

穴から覗いたと云ふぞ。待てよ、繩張際の坂道では、恠くある我も、爲に尠からず驚かされた。

お、其だと、たとひ須磨に居ても、明石に居ても、姫御前は目をまはさう。

三造は心着いて、夕露の玉を鏤めた女の寢姿に引返した。

「鬼ぢや。」

試みに山伏の言を繰返して、正しく、怯かされたに相違ないと思つた。

「鬼ぢや。……」

と一足出て又呟いたが、フト今度は、反對に、人を警むる山伏の聲に聞えた。勿れ、彼は鬼なり、と我に與へし豫言にあらすや。

境は再び逡巡した。

が、凝と瞻めて立つと、衣の模様の花、撫子の俤も、一目の時より際立つて、伏隠れた膚の色、小草に擲んで亂れた有様。

手に觸ると、よし蛇の衣とも變らば化れ、熱いと云つても月は抱く。

三造は重い廂の下に入つて、背に盤石を負ひながら、漸と婦の肩際に蹲んだのである。

耳許はづれに密と覗く。俯向けの其の顔斜めなれば、鼻かと思ふのがすつとある、ト手を翳しもしなかつたが、鬢の毛が、霞のやうに、何となく、差寄せた我が眉へ觸るのは、幽に呼吸がありさうである。

「令嬢。」

と一寸低聲に呼んだ——爪はづれ、帯の狀、肩の様子、山家の人でないばかりか、髪のかざり

の當世さ、鬢の香さへも新しい。

「嬢さん、嬢さん——」

とや、心易げに呼活けながら、

「何うなすつたんですか。」

と其の肩に手を置いたが、花瓣に觸るに齊しい。

三造は四邊を見て、つツと立つて、門口から、眞暗な家の内へ、

「御免。」

「ほう……」

と響いたので、はつと思ふと、うゝと鳴つて訝と知れた。自分の聲が高かつた。

「誰も居ないな。」

美女の姿は、依然として足許に横はる。無慚や、片頬は土に着き、黒髪が敷居にかゝつて、上さまに結目高う根が弛んで、簪の何か小さな花が、頓て美しい蟲に成つて飛びさうな。

しかし、煙にも成らぬ人を見るにつけて、——あの坂の途中に、可厭な婆と二人居て手を掉つたことを思ふと、殆ど世を隔てた感がある。同時に、渠等怪しき輩が、此處に恠る犠牲のあるを知らせまいとして、我を拒んだと合點さるゝにつけて、兎角う言ふ内に、追つて来て妨せう。早

く助けずば、と急心に赫となつて、戦く膝を支いて、ぐい、と手を懸ける、とぐつたりした腕が柔かに動いて、協明を這つた指尖が胸へかゝつた處を、づつと膝を入れて横抱きに抱き上げると、仰向けに綿を載せた、胸がふつくりと咽喉が白い。カチリと音して、櫛が鬼の面に觸つたので、慌てて、かなぐり取つて、見當も附けず、どん、と背後へ投つた。

「山伏め、何を言ふ！」

十六

「いや、最う、先方が婦人にもいたせ、男子にもいたせ、人間でさへありますれば、手前は正のもの鬼でござる。——狼が法衣より始末が悪い。世間では人の皮着た畜生と申すが、鬼の面を被つた山伏は、扱て早や申譯がない。」

御堂の屋根を蔽ひ包んだ、杉の樹立の、廂を籠めた影が射す、爐の灰も薄蒼う、茶を煮る火の色は燦と冴えて、埃は見えぬが、休息所の古壘。まちなし黒木綿の腰袴で、畏つた膝に、兩の腕の毛だらけなのを、ぬい、と突いた、賤しからざる先達が總髪の人品は、山一つあなたへ獅鬣を被つて参りしには、些と分別が見え過ぎる。

「怪しからぬ山伏め、と貴邊がお思ひなされたで好都合。其の御婦人が手前の異形に驚いて、恍

惚となられる。貴邊は貴邊で、手前の野謔言を眞實と思召し、そりやこそ鬼よ。觸らぬ神に祟りなしの御思案で、またくお見棄てに成つたとします、御婦人がそれなりで御覽じろ、手前は立派な人殺でございます。何も、げし人に立派は要らぬが、承りましただけでも、冷汗になります。

いや、其につけても、

と山伏の肩が聳え、

「物事と申すは、能く分別をすべきであります。私ども身柄、鬼神を信ぜぬと云ふも如何ですが、軽忽に天窓から怪くして、然る御令嬢を、臺、土蜘蛛の變化同然に心得ましたのは、俗にそれ：棕櫚箒が鬼、にも増つた狼狽へ方、何とも恥入つて退けました。」

——（山伏め、何を吐す。）——結構でござるとも。其の御婦人をお救ひなさつて、手前もお庇で助かりました。

如何にも、不意に貴邊にお出逢ひ申したに就いて、體の可い怪談をいたし、其の實、手前、峠に於て、異變なる扮装して、晝強盜、追落はまだな事、御婦人に對し、あるまじき無法不禮を働いたやうに思召したも至極の至りで。」

「まあ、お先達、貴下、」

對向ひの三造は、脚絆を解いた瘦脛の、疲切つた風して居たのが、此の時遮る。……  
「いや、仰せではありませんが、早い話が、これが手前なら、矢張り貴邊を然う存する、……  
道でござる、理でござります。」

しかし笑つて遣はされ。先づ山中毒とでも申すか、五里霧中とやらに徘徊しました手前、眞人間から見ますと狂人の沙汰ですが、思ひの外時刻が早く、汽車で時の間に立歸りましたのを、何か神通で、雲に乗つて馳せ戻つたほどの意氣組。其の勢でな、いらだか、苛つて、揉上げ、押し摺り、貴邊が御無事に下山のほどを、先刻此の森の中へ、夢のやうにお立出でになつた御姿を見まするまで、明王の靈前に祈を上げて居りました。

其れ以て、貴邊が、必定、お立寄り下さると信じましたからで。

信じながらも、思ひ懸けぬ山路に一人憩んでござつた、あの御様子を考へると、何うやら遠い國で、昔々お目に懸つたやうな、茫とした氣がしまして、眼前に焚きました護摩の果が、霧になつて、森へ染み、森へ染み、峠の方を蔽ひ隠すやうにもござつた。……

何にせよ、私何うかして居たと見えます。兎は一寸々々、猿も時々は見懸けますが、狐狸は氣もつきませぬに、穴の中からでも魅りましたかな。

明王も嘸呆れ返つて、苦笑ひなされたに相違ござらん。私の其の痴けさ加減、——あ、御無

事を祈るに、お年紀も分らぬ、貴邊の苗字だけでも窺つて置かうものを、——心着かぬことをした。

「總髪をうしろへ撫でる。」

「などと早や……」

三造は片手を丁と爐縁に支いて、

「難有う存じます。御厚意、何とも。」

十七

更めて、

「お先達、然うやつて貴下は、御自分お心得違ひのやうにばかりお言ひですが、——其の人を抱き起して、美しい顔を見た時、貴下に對して心得違ひしましたのは、私の方やありませんか。

而して、無事、」

と言ひ懸けたが、寂しい顔をした、——實は、餘り無事ばかりも無かつたのであるから。

「兎も角も……峠を抜けられましたのは、貴下が御祈念の功德かも知れませんが、——確に功德です。然うでないと、今頃どう成つて居たか自分で自分が解らんです。何ともお禮の申上げやうは